42985
教科書文庫
4
220
41-1904
013049507

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

教科書文庫
4
220
41-1904
0130449507

中央図書館

広島大学図書
0130449507

文部省檢定濟

明治三十七年十月二十五日　中學校歷史科用

東京高等師範學校教授　文學士　桑原隲藏著

東洋史教科書

東京
大阪
開成館藏版

広島大学図書
0130449507

例言

一この書は中等程度の學校に於て、規定の時間内に東洋史を授くる目的を以て編纂せるものにして、著者は及ぶ限り、平易簡明に記述することを力めたり。

一紀事の連絡せると趣味あるとは、教授上最も必要なる條件なれば、著者は十分この點に注意せり。書中多く逸話、文辭を挾み、重要なる民族の風俗を記しし、亦この意に外ならず。

一南方亞細亞、中央亞細亞等の紀事を簡畧にせしは、紙頁を減少し、授業時間に不足なからしめんが爲なり。若し餘裕あらば、教師は拙著初等東洋史、中等東洋史等に參酌して、適宜に之を補足しても可なり。

一紀年は國史との連絡を保たしめんが爲に、一に皇紀を本とすれ

ども、我が維新以後に起れる事變のみは、明治の年數を紀して、記憶に便ならしむ。

一毎期の終に、その期間の沿革の摘要と年表とを載せて、既得の知識の復習に充て、かねて時代と事實との關係を明かならしむ。生徒は必ず之を參照することを怠るべからず。

一卷尾に重要なる支那皇室の畧系を掲げたり。亦生徒の之を參照せんことを要す。

一本書に挿入せる圖畫は、皆正確なる考據あるものにして、尋常の東洋史に掲載せるものと、聊か其選を異にせるは、著者の斷言して憚らざる所なり。

明治三十六年一月

著者識

東洋史教科書目次

第一編　**上古期**

第一章　支那の太古……一
第二章　夏殷の治亂興亡……三
第三章　周初の政治及び制度……五
第四章　周室の東遷及び春秋の五覇……一〇
第五章　戰國の七雄……一三
第六章　周末の學術……一六
上古史摘要及び年表

第二編　**中古期**

第一章　秦の興亡……一九

第二章　漢楚の爭……二三
第三章　漢の初世……二五
第四章　漢の武帝の功業……二六
第五章　漢の中世……三二
第六章　漢の中絶及び再興……三四
第七章　佛教の傳播……三六
第八章　東漢の極盛……四〇
第九章　東漢の末路……四三
第十章　三國及び西晉の盛衰……四七
第十一章　五胡の興亡及び東晉の盛衰……四九
第十二章　南北朝の對立……五四
第十三章　隋の興亡及び唐の初世……五七
第十四章　唐の制度風俗……五九

第十五章　唐の外國經畧……六六
第十六章　唐代に於ける東西の交通……七〇
第十七章　唐の中世……七五
第十八章　唐の衰滅……七九

中古史摘要及び年表

第三編　近古期

第一章　契丹の興起及び五代の紛爭……八三
第二章　宋の一統……八六
第三章　遼の極盛……八八
第四章　神宗の改革……九〇
第五章　女眞の興起……九四
第六章　金宋の關係……九六
第七章　蒙古の興起……九九

第八章　太宗及び憲宗の事業……一〇三
第九章　宋の滅亡及び世祖の外征……一〇六
第十章　元の極盛……一一〇
第十一章　元の衰微……一一三
第十二章　明の初世……一一七
第十三章　帖木兒帝國の興起……一二〇
第十四章　明の衰微……一二三
近古史摘要及び年表
第四編　近世期
第一章　滿洲の興起……一二八
第二章　清の塞外征畧……一三二
第三章　清の制度及び學術……一三六
第四章　莫臥兒帝國の興亡及び

英人の印度侵畧……一四二
第五章　阿片戰爭　露人の東侵……一五〇
第六章　露國の中央亞細亞侵畧　露國と英清との衝突……一五六
第七章　佛國の後印度侵畧……一五九
第八章　朝鮮の狀態　日清戰爭……一六一
第九章　日清戰爭後の東亞……一七〇
近世史摘要及び年表
附錄
一　漢の系圖
二　晉の系圖
三　唐の系圖

四　宋の系圖
五　蒙古の系圖
六　明の系圖
七　清の系圖
八　朝鮮の系圖

東洋史教科書目次終

東洋史教科書

文學士　桑原隲藏著

第一編　上古期（太古より四四〇年まで）

第一章　支那の太古

苗族と漢族と

支那文化の發端。 支那の太古には苗族といへる人種ありて、早く江（揚子）河（黃河）の間に居を占めしが、今より五千餘年前に、漢族、西北方より黃河沿岸に移住し來りて、次第に蕃殖し、原住者たりし苗族を南方に逐ひて、其地を占領するに至れり。其太古の事蹟は詳にし難けれど、古傳說によれば、太古の帝王に燧人（スヰ）、庖犧、神農の三皇あり。之に繼ぎて黃帝、帝顓頊（センギョク）、帝

三皇に關する古傳說

諸種の發明

苗族（現時）九年の大洪水

嚳（コク）、帝堯、帝舜の五帝あり。庖犧始めて八卦を畫し、漁獵を敎へ、神農始めて耕作、貿易を敎へ、醫藥を製し、黃帝始めて舟車を造り、音樂を定め、文字を製しきといふ。

帝堯、帝舜。　帝堯、帝舜は今より四千餘年前に出づ。ともに支那の聖人として、後世に崇拜せらるゝ帝王なり。帝堯の晩年に九年に亙れる大洪水あり。鯀（コン）に命じて、之を治めしめしかど、其功なし。當時民間に舜といふ者あり。至孝賢明を以て聞えければ、帝堯之を擧げて國事を攝行せしむ。舜は鯀

帝舜の功績

夏の禹王の時王位世襲の基定まる

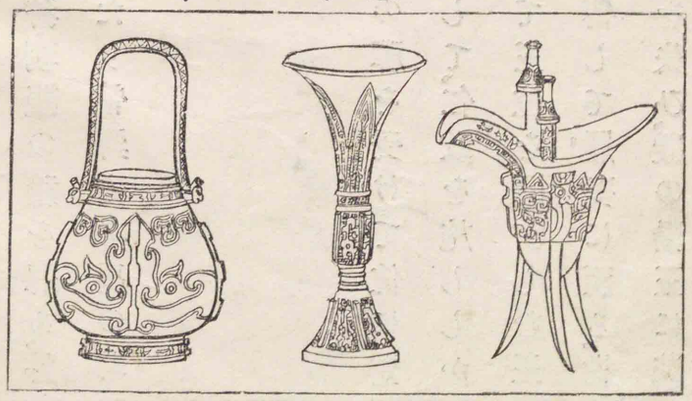
に代ふるに禹（ウ）を以てし、遂に治水の功を遂げしかば、帝堯は其功を賞して、位を之に禪れり。帝舜は禹、皐陶（カウエウ）、稷契（ショクセツ）等の名臣を用ゐ、內は官制を定め、刑法を制し、巡狩、朝覲の禮を敘め、外は苗族を驅逐して、版圖を南方に廣めたり。帝舜も亦禹の功を賞して位を之に禪れり。

第二章　夏殷の治亂興亡

夏の時代。　禹は帝顓頊の孫なり。帝舜の禪を受けて位に登り、國號を夏といふ。禹、人となり恭儉にして、仁政を施ししかば、民皆悅服し、禹の死後其子、啓を推して王位を嗣がしむ。王位世襲の基こゝに定まる。啓の後十五傳して履癸（キ）に至る。世之を桀王と稱す。淫虐暴戾にして、人望を失ひ、殷の湯王に滅

ぼさる（皇紀前一一〇〇年頃）。

殷の時代。 湯王は帝舜の名臣、契の後なり。伊尹（イイン）といふ賢者を擧げて、之に政を委ね、亳（ハク）（河南省）に都して國號を商といふ。十數傳して盤庚に至り、都を殷（河南省）に遷したり。これより商は又殷と號す。後十一傳して受辛に至る。受辛は、世に紂王と稱せられ、殘忍暴虐桀王に過ぎ、租稅を重くし、刑罰を嚴にし、日に酒池肉林の樂に耽り、箕子、微子、比干（殷の三仁）の諫をも聽かざりしかば、天下王を怨むもの多く、周の武王起りて、遂に之を滅ぼせり（皇紀前四六〇年頃）。



殷代の古銅器

紂王の暴虐

第三章　周初の政治及び制度

文王と武王と

周の武王。 周の武王は帝舜の名臣、稷の後なり。稷の裔孫に古公亶父（タンポ）といふ者ありて、岐山（陝西省）の下に住し、始めて國を周と號せり。其孫昌は殷紂虐政の世に出でて、大に仁政を行ひしかば、民心漸く殷を離れて周に歸す。世に謂ふ所の文王は卽ち此人なり。昌死して子發嗣ぎ、謀臣太公望の計を用ゐて、殷を滅ぼし、王位に鎬京（カウ）（陝西省）に卽く。之を武王とす。武王は公、侯、伯、子、男の五爵を建て、一族、功臣を諸侯に封じて、王室の藩屏となしたり。

周公の攝政、周の制度。 武王死して、子成王猶ほ幼なりしかば、叔父周公政を攝し、武王の業を大成して、周室の基を固め

西都と東都と

たり。又この時都を洛邑（河南省）に營み、鎬京に對して、之を東都といへり。周公聰明多能にして、治國の才に富み、制度を定め、禮法を正して、後世に模範を垂れぬ。

六官、三公、三孤

官制。 周の時、中央政府に天（長官は冢宰）、地（長官は大司徒）、春（長官は大宗伯）、夏（長官は大司馬）、秋（長官は大司寇）、冬（長官は大司空）の六官を設く。天官は庶政を總理し、地官は民治、教育を掌り、春官は祭祀、禮儀を掌り、夏官は軍事を掌り、秋官は刑律を掌り、冬官は工藝を掌れり。六官の外に、又三公（太師、太傅、太保）、三孤（少師、少傅、少保）あり。されど、こは常置の官にあらずして、且、政務には與らず。

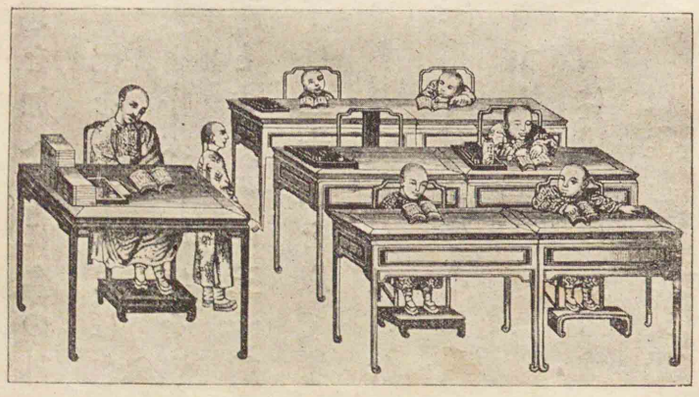
井田の法

田制、稅法。 方一里九百畝の地を九分して井田となし、其八分を私田とし、八家に授けて其收穫を私有せしめ、其一分を公田とし、八家をして之を耕し、其收穫を官に納めて田租に充てしむ。其他力役（人民を土木に使役す）の征、布縷（絹布を貢せしむ）の征あり。

支那の學校（現時）

學制。 學校を大學、小學に分ち、大學には、己を修め、人を治むる道を教へ、小學にては洒掃、應對、進退の節を教ふ。而して禮、樂、射、御、書、數の六藝は、最も重要なる學科をなせり。

禮儀、風俗。 階級制度嚴重にして、天子諸侯以下貴賤に應じて、衣、食、住に區別あり。國民は士、農、工、商にわかれて、皆其業を世襲にせり。男女の區別も亦嚴重にして、七歳以上は交際を許さず。男子は八歳にして學校に就けども、女子には此制なし。女子は年

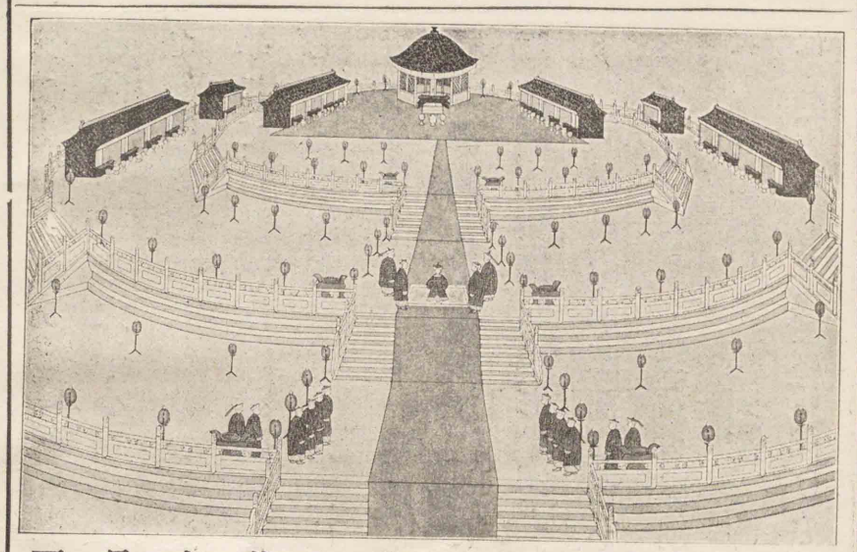


名と字と

清帝祭天の圖

周代に於ける女子の位置

三年の喪



十五にして笄を加へ、男子は二十にして冠を加へ、俱に名の外に字を稱す。己を稱するには名を以てし、人を呼ぶには字を以てするを禮とす。男子は三十歳を以て、女子は二十歳を以て婚姻の期となす。妻は專ら夫の命を受けて家事を行ふのみにて、其位置頗る低し。

人の子たる者は、成人の後も、父母には絶對的服從を要し、父母死すれば、喪を行ふこと三年に

亙り、其他血族の親疎に應じて、一定の喪期ありて、喪服を著けざるべからず。父祖の祭日には尸（カタシロ）を設け、死者の衣服を著けしめて、之に神事せり。

日蝕を禳ふ圖（現時）

天子は其祖先の外に、天地日月を祭るの大禮あり。こは後世にも遵奉せられ、現時も北京に宏大なる祭天壇あり。又天變地異、日蝕等は、皆神意に出づるものとなし、種々の儀式を行ひて之を禳ひ、其他一般に迷信深く、疑事は必ず卜筮により、神意を問ひて決行せり。是等の風習は現時と雖も亦多少實行せらる。

北京の祭天壇

宣王と幽王と

第四章　周室の東遷及び春秋の五覇

周室の東遷。 成王及び子康王の時、四十餘年間、天下頗る泰平なりしが、其後王威漸く衰へ、數傳して宣王立つに及び、賢相、良將を用ゐ、内は國政を整へ、外は四方の夷狄を攘ひ、一時周室を再興せしかど、子幽王に至り、褒姒を愛して、政を怠り、諸侯離叛せしに乘じ、犬戎といふ蠻族侵入して、王を攻め殺せり。其子宜臼諸侯に擁立せられて天子となる。之を平王とす。平王は犬戎を避けて、都を洛邑に遷せり。（皇紀前一〇年）。之を周室の東遷といひ、以後を東周の世と稱す。

春秋の世。 平世の遷都より以後、凡そ三百年間を春秋の世といふ。この間周室益〻衰微して、殆ど無政府の有樣となりしかば、有力なる諸侯は、王命を藉りて他の小諸侯を統べ、天下に號令するに至れり。之を覇者といふ。齊の桓公、晉の文公、楚の莊王、吳王夫差、越王勾踐を春秋の五覇と稱す。

春秋の五覇

齊の覇業。 齊の桓公は名臣管仲を用ゐて、富國强兵の實を擧げ、小諸侯を扶けて、戎狄を攘ひ、又王事に力を盡し、其功業五覇に冠たりしが、管仲、桓公相つぎて死するに及び、内亂起りて、國勢頓に挫けり。

齊の貨幣（周代）

齊の桓公と管仲と

管仲もと鮑叔と善し。其の桓公に信任せらるゝに至りしも、鮑叔の力なり。されば今も世に管鮑の交と稱す。管仲は農業殖産を以て、治國の基礎とし、倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱といへり。かくて齊は國富み、兵强く、中國

の諸侯を統一して戎狄を攘へり。漢族が戎狄の侵略を免れ得しは、偏に管仲の力なり。孔子も微管仲吾其被髪左衽矣といへり。當時漢族は結髪して冠を戴き、衣は衽を右にしければ、被髪左衽とは、戎狄の風に化するをいふ。

晉の文公

晉の覇業。 齊の桓公の後、晉の文公は中國の諸侯を統べて、覇業を成ししが、其孫靈公の時内亂ありしかば、楚は代りて覇者となれり。

楚の莊王

楚の覇業。 楚は春秋の初より、既に王號を僭して、南方の諸侯間に雄視せしかど、齊、晉に妨げられて、久しく中國を窺ふ能はざりしが、莊王に至りて、遂に晉を破りて一時天下の覇者となれり。然るに莊王の後、國威衰へしかば、吳、越の二國南方より起り、代りて覇業をなせり。

吳、越の覇業。 吳王闔閭は楚の亡臣伍子胥を用ゐて、大に楚を破りて國威を興ししが、後越王勾踐と戰ひて敗死せり。其子夫差復讎の師を發して、越を破り、勾踐を會稽（浙江省）に圍みて之を降し、遂に中國に入りて覇者となりしが、後勾踐に襲はれて敗死せり。越王勾踐は謀臣范蠡の力によりて吳を滅ぼし、一時強大を極めしが、勾踐の死後次第に衰へ、遂に楚に征服せられたり。

吳の夫差と越の勾踐と

第五章　戰國の七雄

戰國の七雄

戰國の世。 平王より凡そ三百年を經て、威烈王（平王十六世の孫）に至る。この以後二百年間を戰國の世といふ。この時代には、弱肉強食の爭益〻烈しく、春秋時代の諸侯は略滅亡し、其よく大諸侯の面目を保てる者、北に燕、南に楚、西に秦あるのみ。晉は其重臣韓、魏、趙三氏に分割せられ、齊も亦其重臣田氏に簒は

れ、彼等は皆周の王命によりて諸侯となる。この秦楚、燕、田齊、韓、魏、趙を戰國の七雄と稱す。

秦の强盛。 秦は春秋時代より西戎の間に勢を振ひしが、戰國の初め、孝公立つに及び、商鞅を用ゐて、富國强兵の策を講ぜしより國力日に强く、他の六國を壓せんとするに至りしかば、斯に合從の說起れり。

秦の孝公と商鞅と

合從の說。 合從とは、六國同盟して、秦に當るの謂にして、蘇秦の首唱せし所なり。蘇秦は名高き雄辯家にして、燕より趙、趙より韓、魏、齊、楚と次第に合從の利を遊說して成功し、遂に同盟の長となりて、專ら秦を弱めんことを圖れり。秦大に之を患ひ、巧に齊、魏を欺きて、趙を伐たしめければ、合從忽ち破れぬ。

蘇秦合從の說を唱ふ

蘇秦は洛陽の人なり。嘗て游學せしが、功名成らずして故鄉に歸りしに、一族頗る之を侮辱せしかば之より發憤して學を勵み、遂に合從の策を建て、六國の相となり、復故鄉に歸りしに、一族皆俯伏して敢て仰ぎ視る者なかりしかば、蘇秦は人情の反覆を歎じて、此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎、使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎といへり。負郭田とは城郭に近き耕作に便益ある田を指すなり。

連衡の說。 蘇秦の友に張儀といふ者あり。合從の解くるを見て、秦の爲に六國を服從せしめんとて、連衡の策を立て、得意の智辯を振ひて、先づ魏に說きて秦と和せしめ、尋で爾餘の五國をも說服せしめしが、後張儀故ありて秦を去りしかば、連衡も亦破れたり。蘇秦、張儀の後、策士、說客雲の如く起り、或は合從を說き、或は連衡を唱へ、六國の君主は多く彼等に惑ひて、方針一定せざりしかば、國勢次第に衰微せり。

張儀連衡の說を唱ふ

戰國の四君

戰國の時代には、列國の有力者競ひて客を養ひ、事ある際に、其才智技能を利用せんことを計りしが、中にも齊の孟嘗君、楚の春申君、趙の平原君、魏の信陵君は、門下の食客、常に數千の多きに及べり、之を戰國の四君といふ。

范雎の遠交近攻策

秦の統一　六國の方針一定せざるに乘じ、秦は范雎（スキ）の勸に從ひ、遠交近攻の策を以て、益諸侯を削弱しければ、周の赧（タン）王（威烈王の玄孫）大に懼れ、竊に六國に命じて、秦を伐たしめんとせしに、反りて秦に攻め滅ぼさる（四〇五）。其後秦は韓、趙、魏、楚、燕、齊を滅ぼして、天下を統一せり（四〇四）。

第六章　周末の學術

周末に學術興起せし原因

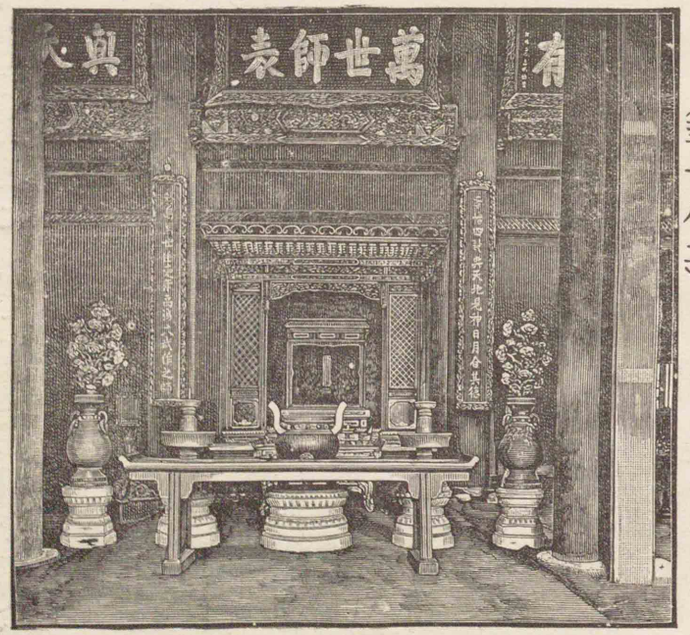
學術の興起　春秋、戰國時代は、周の王室已に衰へ、禮法全くやぶれ、言論自由となり、立身容易となりしかば、學者、論客輩出して、各意見を公にし、大に學術の振興を促せり。就中尤も

孔子と儒教と

有名なるは孔子と老子となり。

孔子。春秋の末、孔子魯に生る（一一〇乃至一八二）。名を丘字を仲尼といふ。始めて儒教を唱ふ。儒教は孝悌を以て身を修め、仁を以て國を治むるを主とし、今日に至るまで支那政教の基礎となれり。かくて孔子は其道を諸侯に說きしかど、用ゐられずして世を終へたり。其孫子思中庸を著し、子思の後に孟子出

孔子の廟（北京）



子思、孟子、荀子

て、性善說を唱へ、荀子は更に其後に出でて、性惡說を唱へ、皆孔子の道を祖述せり。

老莊の學

老子。 孔子と世を同じくして、老子あり。無爲自然の道を說きて、道德五千言を著す。列子、莊子其後に出でて、其道を擴張せり。此學派を老莊の學といひ、後世之に附會して道敎起れり。

諸子百家。 儒、道兩家の外、楊子は自愛の說を立て、墨子は兼愛の說を唱へ、商鞅、韓非は法家の祖となり、孫武、吳起は兵家の祖となる。世に是等を總稱して、諸子百家といふ。

		一五四〇頃	二一〇〇頃	夏興る
		一一〇〇頃	一七六〇頃	夏亡び殷興る
		四六〇頃	一一一〇頃	殷亡び周興る
		一一〇	七七〇	周の東遷
		二五	六八五	齊の桓公立つ
神武	後二五	六三六	晉の文公立つ
同	四八	六一三	楚の莊王立つ
紹靖	二一〇	五五一	孔子生る
懿德	一八二	四七九	孔子死す
同	二五八	四〇三	韓魏趙三氏諸侯となる
孝安	二七五	三八六	田氏齊侯となる
同	二九〇頃	三七一頃	孟子生る
同	三〇〇	三六一	秦の孝公立ちて商鞅を任用す
同	三二八	三三三	蘇秦合從を唱へて成功す
同	三五〇	三一一	張儀連衡を唱へて成功す
孝靈	四〇五	二五六	周亡ぶ
同	四四〇	二三一	秦支那を一統す

諸子百家。 儒道兩家の外、楊子は自愛の說を立て、墨子は兼愛の說を唱へ、商鞅、韓非は法家の祖となり、孫武、吳起は兵家の祖となる。世に是等を總稱して、諸子百家といふ。

上古史摘要及び年表

上古期は太古より秦の一統に至るまでを包括し、我が孝靈天皇以前に當る。此期の初に於て、漢族は黃河沿岸の地を占領して、東洋文化の曙光を放てり。漢族の周圍には、數多の蠻族ありしが、漢族は次第に之を征服し又は驅逐して勢力を擴め、此期の最終に至りては、今の支那本部の大部を一統したり。要するに漢族膨脹の時代といふべし。此間に於ける漢族革命の大勢を示せば左の如し。

太古——三皇——五帝——夏四四〇——殷六四〇——周八六四——秦

年代	事蹟	年代	事蹟
皇紀 西暦		皇紀 西暦	
前一六八〇頃 前三四〇頃	帝堯の卽位	孝昭 一八八 前四七三	越王勾踐吳を滅ぼす
一六〇〇頃 二三六〇頃	帝舜の卽位	同 二三六 四二五	周の威烈王の卽位○戰國時代
一五四〇頃 二三〇〇頃	夏興る	同 二五八 四〇三	韓魏趙三氏諸侯となる
一二〇〇頃 一七六〇頃	夏亡び殷興る	孝安 二七五 三八六	田氏齊侯となる
四六〇頃 一二三〇頃	殷亡び周興る	同 二九〇頃 三七一頃	孟子生る
一一〇 七七〇	周の東遷	同 三〇〇 三六一	秦の孝公立ちて商鞅を任用す
二五 六八五	齊の桓公立つ	同 三二八 三三三	蘇秦合從を唱へて成功す
神武後二五 六三六	晉の文公立つ	同 三五〇 三二一	張儀連衡を唱へて成功す

上古史摘要及び年表

上古期は太古より秦の一統に至るまでを包括し、我が孝靈天皇以前に當る。此期の初に於て、漢族は黄河沿岸の地を占領して、東洋文化の曙光を放てり。漢族の周圍には、數多の蠻族ありしが、漢族は次第に之を征服し又は驅逐して、勢力を擴め、此期の最終に至りては、今の支那本部の大部を一統したり。要するに漢族膨脹の時代といふべし。此間に於ける漢族革命の大勢を示せば左の如し。

太古——三皇——五帝——夏四四〇——殷六四〇——周八六四——秦

年代	皇紀	西暦	事蹟	年代	皇紀	西暦	事蹟
	前一六八〇頃	前二三四〇頃	帝堯の卽位	孝昭	一八八	前四七三	越王勾踐吳を滅ぼす
	一六〇〇頃	二三六〇頃	帝舜の卽位	同	二三六	四二五	周の威烈王の卽位○戰國時代
	一五四〇頃	二二〇〇頃	夏興る	同	二五八	四〇三	韓魏趙三氏諸侯となる
	一二〇〇頃	一七六〇頃	夏亡び殷興る	孝安	二七五	三八六	田氏齊侯となる
	四六〇頃	一二二〇頃	殷亡び周興る	同	二九〇頃	三七一頃	孟子生る
	一二〇	七七〇	周の東遷	同	三〇〇	三六一	秦の孝公立ちて商鞅を任用す
	二五	六八五	齊の桓公立つ	同	三二八	三三三	蘇秦合從を唱へて成功す
神武	後二五	六三六	晉の文公立つ	同	三五〇	三一一	張儀連衡を唱へて成功す
同	四八	六一三	楚の莊王立つ	孝靈	四〇五	二九六	周亡ぶ
綏靖	二一〇	五五一	孔子生る	同	四四〇	二二一	秦支那を一統す
懿德	一八二	四七九	孔子死す				

第二編　中古期（四四〇年より一五六七年まで）

第一章　秦の興亡

封建を廢して郡縣を興す

文字の改定と兵器の沒收と

始皇帝の內治。　秦王嬴政は剛愎なる君にして、六國を併合したる後、其功德は三皇五帝を兼ぬとて、自ら始皇帝と號したり。かくて從來の封建を廢して郡縣となし、天下を三十六郡に分ち、各郡に守、尉、監を置きて之を治め、中央政府には丞相、大尉、御史大夫を置きて、天下を統べしめ、文字を改定して、民心を一にし、民間の兵器を沒收し、諸郡の富豪十二萬戶を國都咸陽（鎬京の北）に徙して、禍亂の源を絕ち、又阿房宮以下の大宮殿を築きて壯麗を極め、以て天下の權力を中央に集めて、一統の政治を施さんことを圖れり。

始皇帝長城を築く

書體の變遷

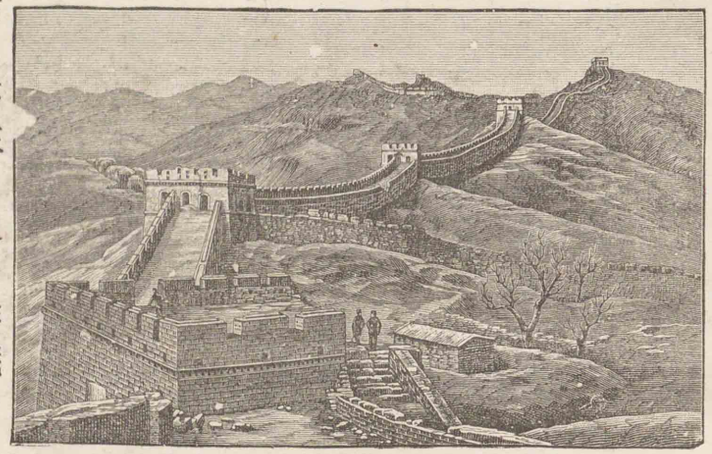
黄帝の時始めて文字を製せし以來、數多の變遷ありしが、之を總稱して古文又は蝌蚪文といふ。始皇帝天下を一統して、交通の區域廣まり、文字の必要を增すに及びて、古文を省略して篆書と隸書とを制せしめ、之を天下に通用せしむ。漢代に至り隸書を省略して楷書となし、行草の二體も亦尋で使用せらるゝに至れり。

始皇帝の外征。 戰國の世に、匈奴（土耳古族の一種）中國に入寇し、燕、趙、秦の三國常に其害を蒙れり。始皇帝は將軍蒙恬をして、兵

萬里の長城（北京の西北約二十里に在る八達嶺附近）

支那の國名の起源

書を焚き儒を坑にす



三十萬に將として匈奴を擊退せしめ、北邊に長城を築きて、其侵入を防ぎ、又南の方、越人を征して、今の安南地方を定め、かくて秦の威名遠近に振ひ、諸外國は秦を訛りて支那と呼び、遂に今日の國名となれり。

火坑の暴政。 然れども其法令苛酷にして、國民は土木と外征とに驅使せられて、漸く新政を厭ひ、學者も亦往々之を非議せしかば、始皇帝は丞相李斯の議を用ゐ、醫藥、卜筮、農業以外の一切の書を聚めて、悉く之を焚き、且

つ儒生四百六十餘人を坑殺せり。

宦者の專横

宦者の專横、群雄の蜂起。 始皇死して少子二世皇帝嗣ぎしが、暗愚にして、宦者趙高政權を恣にせり。宦者はもと内廷に奉仕する罪人なりしが、常に君側に侍するを以て、次第に權勢を得、遂に支那歴朝の禍を成すに至れり。かくて趙高は擅に皇族、大臣を殺して、暴政を行ひければ、楚人陳勝先づ兵を起し、群雄之につぎて蜂起せしが、就中項羽、劉邦の二人最も勢力ありき。

項羽と劉邦と。 項羽は勇武なる軍人にして、兵を江東（江蘇省）に起し、楚の後を擁立して懷王となし、以て民望を繫げり。劉邦は寛仁なる長者にして、項羽と同時に兵を沛（江蘇省）に起し、懷王の麾下に屬せり。

劉邦秦を降す

秦の滅亡。 項羽、劉邦共に懷王の命を受けて、秦を伐つ。此際趙高は二世皇帝を弑し、嬴子嬰（二世皇帝の從子）を立てしが、劉邦の軍咸陽に迫りしかば、子嬰遂に出で降り、秦茲に亡びぬ（四五）。

第二章　漢楚の爭

鴻門の會

項羽の暴虐。 劉邦既に秦を滅ぼし、苛政を除きて民望を收めしに、項羽大軍を率ゐて後れ至り、劉邦の功を忌み、之を鴻門（咸陽の東）に招致して、殺害せんとせしが、劉邦は其臣張良の智と樊噲の勇とにより、僅に其難を免る。當時項羽は其勢力を負ひて阿房宮を燒き、始皇の塚を發き、降王子嬰を殺して東に歸れり。

項羽の覇業。 項羽東歸の後、陽に懷王を尊びて義帝となし、

項羽西楚の覇王となる

自ら彭城(江蘇省)に都して、西楚の覇王(當時彭城附近一帶を西楚と稱せり)と稱して、天下の政權を握り、擅に諸將を分封せり。初め義帝は諸將の先づ關中に入りし者を其地に封ずべきを約せしに、項羽は其約を履まず、劉邦を巴蜀の僻地に移して漢王となせり。

劉邦天下を一統す

漢楚の戰。 既にして項羽義帝を弑せしかば、劉邦は義兵を擧げ、爾來漢楚相戰ふこと四年に及びしが、項羽の勢力漸く衰へ、遂に烏江(楊子江の下流)にて自殺せり。此に於て劉邦は天下を一統して帝位に卽く。之を漢の高祖となす。

項羽少き時、書を習ひ劍を學びしかど、皆上達せざりしかば、書足記姓名而已、劍一人敵、不足學といひて、遂に兵法を講せり。劉邦と爭ひ、遂に敗れて垓下(安徽省)に圍まるゝや、漢軍中に楚歌する者多きを聞き、慷慨に堪へずして、力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何と歌へり。騅とは羽の愛馬にして、虞とは其寵姫なり。

第三章　漢の初世

西漢の三傑

子弟を分封して藩屏に備ふ

高祖の施政。 高祖卽位の後、都を長安(古の鎬京なり)に定む。帝性寛厚にして、善く人を用ゐしかば、其下には蕭何、張良、韓信の三傑以下、文武の名臣多かりしが、晩年に至り、身後の計をなさんが爲に、多く之を殺戮せり。帝は又秦の孤立して敗亡せしに鑑み、其子弟に廣大なる土地を與へて、帝室の藩屏に備へしが、諸王の權勢强きに過ぎ、遂に後年の禍源を成せり。

呂氏の亂。 高祖死して、惠帝嗣ぐ。母后呂氏實權を握り、惠帝の死後、呂氏の一族は、帝位を簒はんことを圖りしが、周勃、陳平等悉く呂氏を平げて、文帝(惠帝の弟)を迎立す。

文帝の仁政。 文帝政に勤め、民を憫み、田租を減じ、嚴刑を廢

し、又儉素を旨とせしかば、國庫充實して天下無事なりき。

呉楚七國の亂。 文帝の後、景帝立つ。高祖の時、四方に封ぜし同族の諸王は、年月を經て疎遠となるに從ひ、漸く朝命を奉ぜざるに至れり。此に於て帝は鼂錯（テウソ）の策を用ゐ、諸王の封地を削りて、朝廷の勢を強めんとせしに、吳王は楚、趙、膠（カウ）西、膠東、菑（シ）川、濟南の六國王と兵を連ねて反抗せしが、周亞夫（周勃の子）之を平定せしより、諸王跋扈の憂全くやみぬ。

諸王跋扈の弊やむ

是も試驗

第四章　漢の武帝の功業

文運の勃興。 秦の火坑以來、典籍殆ど滅び盡して、學術其傳を失ひしが、漢興りて後、文教漸く再興し來り、景帝の子武帝立つに及び、始めて大學を興し、五經博士（易、詩、書、禮、春秋）を置きて弟子を養成し、學術德行ある者を登庸しければ、天下皆儒學に向ひ、董仲舒、孔安國等の大儒現れ、また文學を奬勵しければ、司馬遷（史記を撰す）、司馬相如等の名家出でたり。帝の時（一五二）年號を建てて建元といふ。これ東洋に於ける年號の始なり。

武帝儒學を興し文學を奬む

武帝以前には老莊韓非等の學流行せしを、董仲舒は武帝に上書して、今師異道、人異論、百家殊方、指意不同、臣愚以爲諸不在六藝之科、孔子之術者、勿使並進、邪辟之說滅息、然後民知所從矣といひしかば、武帝之を採用し、是より儒學獨り盛大となり、支那歷代必ず之を崇奉することとなれり。

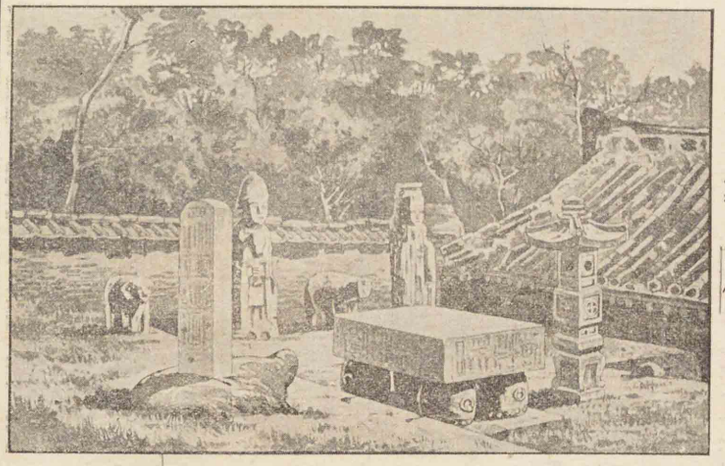
武帝の雄圖。 然れども武帝の大功業は外征にあり、帝はその在位五十餘年の間、南越を平げ、朝鮮を從へ、匈奴を逐ひて連に國威を輝かせり。

南越。 南越は今の廣東、安南地方なり。嘗て秦の始皇に征服せられしが、秦末の亂に獨立せり。武帝の時其國內亂ありし

箕子古朝鮮に王となる

箕子の墓（朝鮮平壤）

武帝古朝鮮を滅ぼす



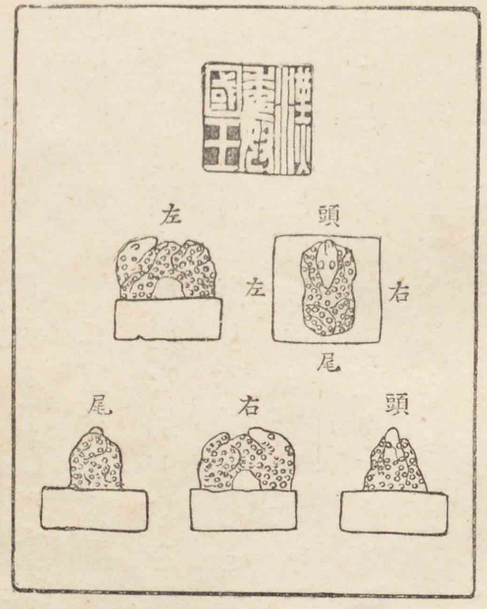
かば、武帝之を擊ちて悉く其地方を郡縣となせり。

古朝鮮。 曩に殷の亡びし時、其王族箕子は遼東に往き、推されて古朝鮮の王となりて、王儉（今の平壤）に都せり。當時の朝鮮は遼河と大同江との間の地にして、箕子の子孫相繼ぎて斯に君臨せしが、箕準の世に至り、燕人衛滿といふ者此國に來り、箕準を逐ひ、自立して朝鮮王となる（四六）。武帝の時、其孫衛右渠は屢漢の命に抗せしかば、武帝之を滅ぼし、其地に眞番（鴨綠江流域）、樂浪（大同江流域）、臨屯（今の江原道）、玄菟（今の咸鏡道）の四郡を置けり。當時朝鮮半島の南部は馬韓（全羅、忠清、京畿、三道の地）、辰韓（慶尚道の地）、弁韓（慶尚道の南隅）の三大部に分かれしが、是より漢と三韓との關係漸く頻繁となり、從ひて三韓と交通し來りし我が國人と漢との交通も、亦此頃より開けたり。

我が國及び三韓と漢との交通開く

漢委奴國王の印

匈奴の冒頓單于



今より百三十年ほど前に、筑前國志賀島にて、漢委奴國王と刻したる金印を發掘せしが、こは我が九州地方の酋長が、東漢の光武帝より授かりしものなるべしといふ。

匈奴。 秦の時、匈奴（フンヌ）は蒙恬に逐はれて、一時遠く塞外に逃れ去りしが、漢初冒頓（バヤツール）といふ者、單于（センク）（匈奴の天子）となるに及び、東は東胡（蒙古の東に居

武帝匈奴を征す

りし族）を從へ、西は月氏（甘肅地方に居りしチベット族）を逐ひ、其勢甚だ盛にして、屢漢の邊境に寇せり。高祖曾て親征せしかど、反りて平城（山西省）に圍まれ、婚を通じ、帛を贈りて、和親を請へり。匈奴は是より中國を侮り、益〻入寇せしかば、武帝は之を攘ひて國辱を雪がんと欲し、衞青、霍去病を大將とし、大軍を發して之を討たしめ、屢匈奴を破りて、內蒙古の地を取れり。

匈奴の風俗

匈奴は文字なく、耕作を營まず。老者を輕んじ、殉死の風行はれ、父兄死すれば子弟は其妻を娶る等、其風習極めて野蠻なれども、政治軍隊の組織はやや備はり、單于の下に二十四人の大臣あり、其下に千長、百長、什長あり、兵士は騎射に習ひ、且つ戰勝てば戰利品の分配に預かるが故に、戰鬪力强し。

張騫の遠征。　武帝は匈奴征伐に著手するに先だち、張騫を大月氏國に遣り、匈奴を夾擊することを計畫せしむ。大月氏はもとの月氏にして、匈奴を避けて、新に中央亞細亞に建國せしものなり。騫途にて匈奴に捕へられ、後逃れて遂に大月氏に往きしかど、要領を得ず。歸途再び匈奴に獲られ、かくて十三年を經て歸國し、具さに西域の風土、人情等を奏し、且つ大月氏の隣國烏孫と同盟すべきをいへり。

西域諸國との交通。　武帝はこの勸に從ひ、烏孫と婚を通じて匈奴を牽制せしめしかば、匈奴の勢益〻衰微せり。加之、是より漢と大宛、康居、安息、于闐等の西域諸國との交通始めて開け、西方の珍品奇物漸く漢土に

第十二圖　于闐附近より發掘せられし漢代前後の古物

輸入し來れり。

漢の高祖始めて匈奴と婚を通じてより、歴代の支那の君主は塞外諸族と結婚して、平和を保持するを常とせり。かく塞外に嫁する者を和蕃公主といふ。武帝の時烏孫に嫁せしは、漢の皇族の女なりしが、異域に在るを悲みて、吾家嫁ニ我兮天一方、遠託ニ異國兮烏孫王、穹廬爲ニ室兮旃爲ニ牆、以肉爲ニ食兮酪爲ニ漿、居常土思兮心內傷、願爲ニ黃鵠ニ兮歸ニ故鄉ニといふ歌を作れり。

和蕃公主

武帝の晩年。 武帝は、かく遠征を事とし、又頻に土木を起しかば、國費多額にして、前代の貯蓄悉く竭き、終に酷吏を用ゐて、課稅を重くし、又鹽、酒等の專賣を行ひて、民間の利益を奪ひしが故に、晩年に至り、天下漸く不穩の有樣を呈せり。

第五章　漢の中世

霍光の攝政、宣帝の中興。 武帝死して、嗣子昭帝猶ほ幼なりしかば霍光政を攝し、務めて民力の休養を計れり。昭帝の後宣帝立つ。英明にして官吏其人を得、天下頗る泰平なりき。

匈奴の衰微。 曩に烏孫は漢と通じて同盟せしが、宣帝又烏孫と協力して、大に匈奴を破れり。是より匈奴全く衰へ、加ふるに內亂相踵ぎ、遂に郅支（シツシ）、呼韓邪（コカンヤ）の二單于に分かれ、呼韓邪單于は、漢に來降せしが、郅支單于は後に漢兵と戰ひて敗死せり。かくて匈奴の衰微するに從ひ、西域三十餘國皆漢に歸服しければ、漢は鄭吉を西域都護に命じ、烏壘（ウルヰ）城（天山南路）に在りて之を統御せしむ（○六一）。

郅支と呼韓邪と

鄭吉初めて西域都護となる

宦官、外戚。 宣帝の後、名主なく、元帝の世には、宦官弘恭、石顯權を專にし、成帝の世には、外戚王鳳等政を執り、漢業漸く衰へぬ。

外戚朝政を執る

第六章　漢の中絶及び再興

外戚王莽西漢を簒ふ

王莽の簒奪。 成帝の從子平帝の時、王鳳の從子王莽政を攝し、且つ其女を納れて皇后とせり。王莽は表に恭儉を裝ひ、次第に人望を收め、遂に平帝を毒弑して、自ら帝位に卽き、國を新と號せり。漢室是に於て一旦中絶す(六六八)。

王莽の失敗。 王莽もと自ら周公に擬せしが故に、卽位の後も、諸制度一に周の古代に倣はんとして、法令徒に紛雜を極め、賦斂また重きを加へしかば、幾ばくならずして叛亂四方に起り、遂に王莽を斃せり。新は僅に十五年にして亡びぬ。

劉秀漢を再興す

漢の中興。 時に漢の王族劉秀も亦兵を春陵(ショウリヨウ)(湖北省)に起ししが、王莽の大軍を昆陽(河南省)に破りてより、威名頓に揚りしかば、遂に衆に推されて帝位に卽き、都を洛陽に定む(六八五)。之を東漢の光武帝といふ。尋で諸將を遣り、所在の群雄を平定して、天下を一統せり(六六九)。

漢の長安に都せし間を西漢といひ、洛陽に都せし間を東漢といふ。其國都の位置に從ふなり。この後、晉に東西あり、宋に南北あるが如き、皆同一の例なり。

光武の施政。 光武帝卽位の後、專ら意を內治に用ゐ、國政を親らして、外戚專權の源を塞ぎ、又敎化を盛にして名節を奬勵せり。光武帝の後、子明帝、孫章帝皆よく其遺業を紹ぎ、國運益〻盛なりしが、方に此時に際して、佛敎は印度より東漸して、支那に傳來せり。

印度の四種姓

第七章　佛教の傳播

印度の古代。 今より凡そ四千餘年前に當り、アーリア人種の一派は、中央亞細亞より南下して印度に入り、次第に其北半部を占領して、斯に文化を扶植せしが、後國民中に僧族、王族、平民、奴隷の四種姓を生ぜり。王族は政治、軍事に、平民は實業に、奴隷は諸種の賤役に從ひ、僧族は最高位を占めて、宗教と學術とを掌れり。

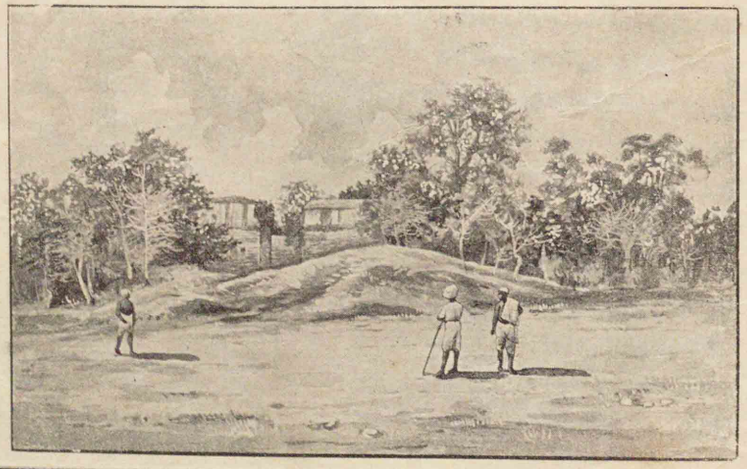
波羅門の專横。 當時の宗教は所謂波羅門教にして、全く四種姓の區別を基礎とせるものなるが故に、年月を經るに從ひ、僧族は宗教を私して專横貪慾を極め、自餘の三種姓の者は、其壓制に苦めり。

釋迦の誕生地

釋迦の名稱

釋迦の革新。 時に中印度迦毘羅城（今のネパールに在り）主の子に、悉達（シッタハルタ）あり（九七乃至一七七頃）。社會の腐敗と人生の無常とに感じて、衆生濟度の念を起し、遂に宮を棄てて山に入り、解脱の法を求めて、佛陀（ブダー）（單に佛ともいふ。一切の眞理を會得せし者）となる。世に所謂釋迦（シャカ）是なり。

釋迦とは元來種族の名にして、太古より葱嶺附近を占領し、其一部は早く印度に侵入し來りし種族なり。悉達は釋迦種族より出でしが故に、世に彼を釋迦と呼ぶなり。釋迦は今の佛陀伽耶（ブダガヤ）附近の一菩提樹の下にて成道せしが故に、此菩

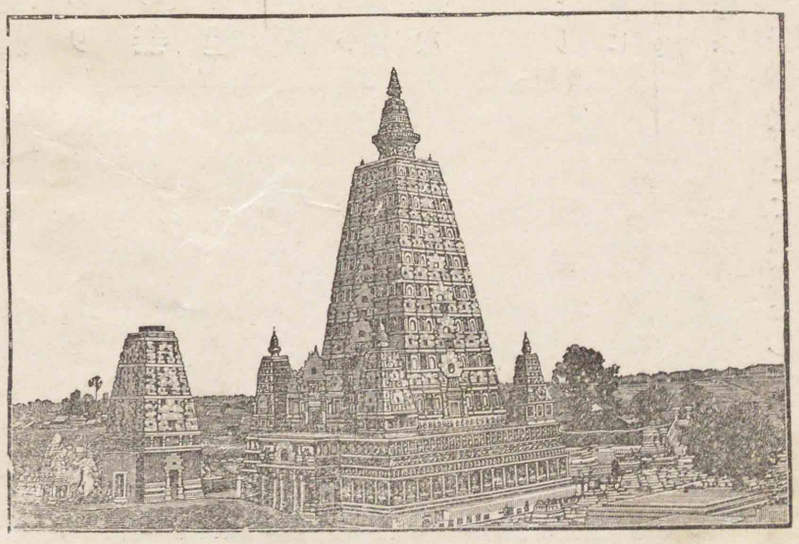


菩提樹

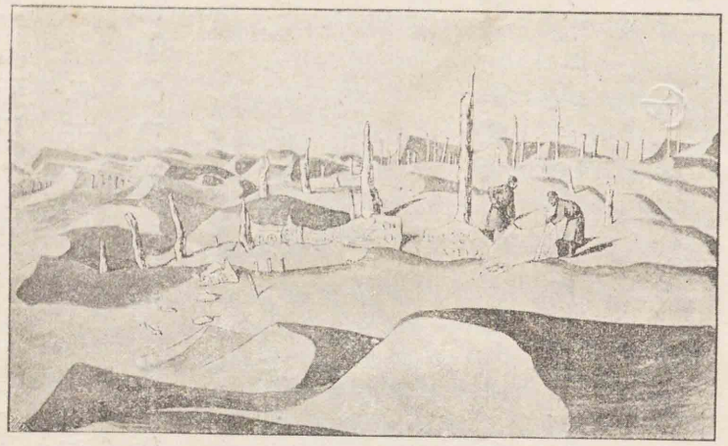
提樹は久しく佛教徒に崇拜せられしが、今は枯死し、其古蹟に緬甸王の建立せし一大高塔あるのみ。高塔の後に新菩提樹あれども、こは後世錫蘭より移植せしものなりといふ。

佛教の興起。 釋迦は是に於て佛教を開きて、平等の主義を唱へ、一切の衆生は種姓の差別なく、皆正道を行ひて、解脱し得べしと教へたり。されば從來僧族の壓制に苦めるる諸種姓は、皆この新宗教を歡迎せり。

釋迦の成道地



天山南路に於ける古物搜索の圖



阿育王の出世。 かくて佛教は次第に流通せしが、阿育王が中印度の摩揭陀國に君臨（三九頃）するに及びて、厚く佛法に歸依し、其傳播に盡力せしかば、西はシリアより、東は今の緬甸に至り、北は中央亞細亞より、南は錫蘭島に至るまで、皆佛教の感化を受くるに至りぬ。

迦膩色迦王の出世。 中央亞細亞の大月氏は、迦膩色迦王の時に至りて（東漢の初）國勢頗る強く、北西兩印度を併せ、葱嶺以東をも領せしが、

王も亦厚く佛法を信じて、其擴張に力を用ゐしかば、佛教は次第に天山南路に流行せり。

佛教の東漸。 東漢の明帝は大月氏の佛教隆盛を聞き、蔡愔をやり、佛教を求めしむ。彼は大月氏より佛經と高僧迦葉摩騰とを得て歸り、洛陽に白馬寺を建てたり（七二七）。其後外國僧侶の來りて、翻經又は布教に從事するもの多く、佛教は次第に隆盛に赴きぬ。

天山南路に於て發掘せられたる佛像

東漢の明帝佛法を大月氏に求む

第八章　東漢の極盛

南北匈奴。 曩に一旦漢に歸服せし匈奴は、漢の中絶すると共に、また北邊を騷擾せり。當時匈奴は南、北二部に分かれ、南匈奴は早く東漢に歸服せしかど、北匈奴は西域諸國を威服して屢入寇せしかば、明帝遂に竇固等をして之を征せしめ（七三三）、又班超をやり、西域諸國と同盟を圖らしむ。

班超の遠征。 班超は西域に往きて、恩威並び施しければ、西域五十餘國は北匈奴に背きて、皆漢に降れり。是に於て漢は西域都護を龜茲（天山南路）に置き、班超を以て之に任ぜり（七五一）。班超の後、都護其人を得ずして、西域また叛きしかば、漢廷遂に西域都護府を廢せり（七六七）。

班超もと家貧にして、筆耕を業とせしが、筆を投じて、大丈夫當立功異域以取封侯、安能久事筆硯間乎と奮慨し、遂に使者となりて西域に往く。途にして匈奴の使者に遭ふ。從者甚だ多し。超曰く、不入虎穴、不得虎子と。夜襲ひて之を殺ししかば、西域諸國皆其勇猛に服せり。西域に在ること三十一年に

班超西域都護となる

班固と班昭と

して歸る超の兄班固は歷史家、文章家として其名高く、妹班昭も亦婦德と文學とを以て世に重んぜらる。

匈奴の滅亡、鮮卑の興起。 西域諸國漢に服してより、北匈奴の勢衰微せしに乘じ、漢は頻に之を攻擊せしかば、彼等は遂に裏海の方面へ遁れ去り、後フン二（またハンふといふ）として西洋史上に現はる。匈奴の移轉と共に東胡の一種なる鮮卑は、東より移りて其地を占領し、次第に强大に赴けり。

匈奴の西方移轉

大秦との交通。 かくて東漢の勢力塞外に加はるに從ひ、當時西方亞細亞の侵略に從事せし大秦國（ダルシ）（羅馬）は、漢の富盛を聞き、漢

大秦王安敦

にても亦大秦の强大を知り、互に交通せんことを望みしかど、當時安息國（アルサク）（今の波斯（ペルシア）地方を領す）は、兩國間に介在して之を妨害せしかば、久しく目的を達する能はざりしが、後東漢の末に至り、大秦王安敦（アントニウス）は使を發し、海路より東漢に通ぜり（八二）。爾來三國、兩晉の頃まで、大秦の商人等今の東京（トンキン）地方に來りて貿易に從事せり。

當時大秦との貿易に於ける重要品は、支那の絹なりき。絹は上古より波斯、印度等を經て、歐洲に傳はり、大に希臘（ギリシア）、羅馬の富民の嗜好に投じ、一時は黃金と絹と同一の重量を以て交易しきといふ。後皇紀千二百年の頃、養蠶の業始めて歐洲に傳はり、次第に隆盛に赴けり。

養蠶業支那より歐洲に傳はる

第九章　東漢の末路

外戚、宦官の專橫。 光武帝は特に外戚の禍を防ぐに注意せ

東漢の衰微

しが、其曾孫和帝年幼にして卽位し、竇太后政を攝するに及びて、外戚始めて勢を得、和帝の後も幼主多くして、外戚愈專横を極めしが、桓帝の時、宦者の力を借りて、外戚梁氏を誅せしより、宦者は其功を負ひ、外戚に代りて政權を握れり。

黨人の難。 初め光武帝名節を奬勵せしより、東漢の人士は一般に氣慨を尙びしが、宦者の跋扈するに及びて、當時の學者等盛に之を攻擊せしかば、宦者怒り、此等の學者を指して黨人となし、皆之を禁錮す(八二)。之を東漢の黨錮といふ。

宦者の誅戮。 かくて中央政府の腐敗すると共に、黃巾の賊等諸方に起れり。是等の叛亂は久しからずして畧鎭定せしかど、中央政府に於ける宦者の跋扈愈甚しかりしかば、袁紹といふ者起りて、悉く宦者を誅戮せり(八四)。此時董卓も亦宦

東漢人士の氣風

袁紹と董卓と

者を誅するを名として洛陽に來り、遂に獻帝を脅して、西の方長安に據りしが、幾ばくならずして殺戮に遇へり。

群雄の割據。 此時天下殆ど無政府の有樣となり、群雄四方に割據せしが、就中曹操最も智略に富み、獻帝を許(河南省)に迎へ、之を擁して黃河の南北を征服し、尋で南して襄陽(湖北省)の劉表を圖る。

赤壁の戰。 時に漢の疎族に劉備ありて、劉表に依りしが、劉表死し、襄陽陷るに及びて、劉備は曹操の軍を避け、謀臣諸葛亮の勸に從ひ、援を江南の孫權に求む。孫權之を納れ、其將周瑜をして、大に曹操の軍を赤壁(湖北省)に敗らしめしかば、曹操遂に北に歸れり(八六)。

天下の三分。 已にして劉備は又孫權の後援を請ひ、巴蜀漢

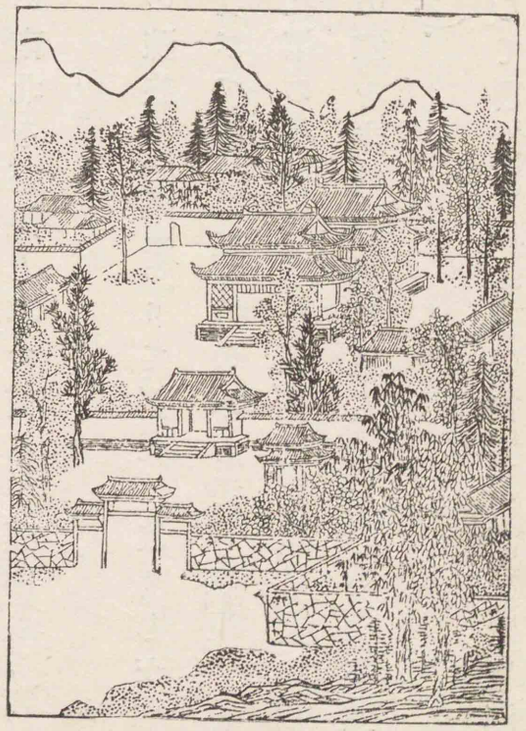
曹操獻帝を擁して四方を征服す

中の地を定めしかば、楊子江以北は曹操に、江南は孫權に、而して西方一帶は劉備に歸し、天下三分の形勢成れり。

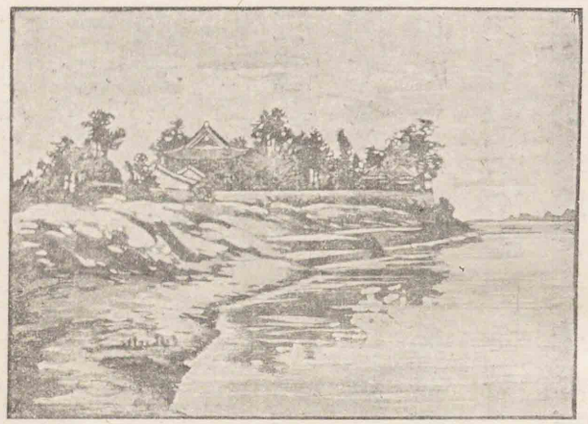
東漢の滅亡。 此時、獻帝は猶ほ帝位に在りしが、曹操の子曹丕之を廢して、魏國を洛陽に建つ(八八)。漢は東西を併せ、四百六年にして亡ぶ。是に於て劉備は蜀漢國を成都(四川省)に建て、尋で孫權も亦吳國を建業(江蘇省江寧府)に建てぬ。

曹丕東漢を簒ふ

劉備の祠(直隸涿州)



諸葛亮の祠(陝西漢中府)



第十章　三國及び西晉の盛衰

三國の攻爭、諸葛亮の出陣。

蜀漢の劉備は一時吳と荆州(今の湖北、湖南)を爭ひしが、其子劉禪嗣ぐに及びて、諸葛亮政を輔け、先づ吳と和し、力を專にして魏を伐つこと前後七年、魏將司馬懿よく防ぎしかば、諸葛亮其志を遂げずして死せり(八九)。

諸葛亮もと亂世を避けて、山野に遯れしが、有爲の材なりしかば、時人之を臥龍と呼べり。劉備其名を聞き、三度其廬を訪ひて之を臣とするを得たり。蜀漢が西方に偏在せしに關せず、よく魏、吳と對立し得たりしは、一に亮の力な

諸葛亮の出師表

り。されば劉備も孤之有孔明、猶魚之有水也といへり。孔明は亮の字なり。魏を征伐する際、劉禪に上りし前後二回の出師表の如きは、至誠忠烈、讀者をして感泣せしむ。亮死せし時、魏軍之を擊たんとせしが、蜀軍は亮の生存せるが如く裝ひしかば、魏軍畏れて退却せり。されば時人語して死諸葛走生仲達といへり。仲達は司馬懿の字なり。

三國の滅亡。　諸葛亮死してより、蜀漢次第に衰微して、遂に魏に滅ぼされ（九三二）、魏も亦尋で司馬懿の孫司馬炎に國を簒はる。司馬炎更に吳を併せて、天下を一統し（九〇四）、洛陽に都す。之を西晉の武帝といふ。

西晉の武帝天下を一統す

武帝の失政。　武帝は天下一統の後、子弟を要地に分封して、帝室の藩屏となししが、反りて後年諸王跋扈の患を釀し、又當時塞外人種の內地に雜居するもの頗る多かりしに、之が豫防を怠り、反りて地方の武備を廢せしかば、後年夷狄侵入の基を開けり。

八王の亂。　武帝死し、子惠帝嗣ぎて暗愚なりしかば、趙王、齊王等の八王、各政柄を握らんが爲に、相攻爭し、晉室の藩屏全く壞れたり。加ふるに當時老莊の學行はれ、天下の人士清談（世務以外の哲理を談ずるをいふ）に耽りて、皆國事を顧みざりしかば、國家の元氣全く竭きたるに乘じ、夷狄內地に侵入し來りて、遂に西晉を滅ぼせり。

清談の流行

第十一章　五胡の興亡及び東晉の盛衰

塞外人種の雜居。　兩漢、三國の間、塞外人種の支那內地に移住する者多く、晉初に至りて益增加し、就中匈奴、鮮卑、氐、羌、最も强大なりき。

西晉の滅亡、東晉の興起。　晉の衰ふるに及びて、匈奴の酋劉淵先づ亂を起し、平陽（山西省）に據りて、國を漢と號す。子劉聰の時、一族劉曜及び羯（匈奴の別種）人なる石勒をして、晉を滅ぼさしめしかば、司馬懿の曾孫、司馬睿は位に建康（もとの建業）に卽き、僅に江南の地を保つ。之を東晉の元帝といふ。而して江北の地は、爾來殆ど三百年間、塞外人種の占領に歸しぬ。

匈奴の興起

江北の爭亂。　漢は一時江北を占領せしかど、劉聰の死後內亂起り、劉曜は前趙國を建て、石勒は後趙國を建てて、相爭ひしが、石勒遂に勝ちて襄國（直隸省）に都せり。石勒の死後また內亂ありて、領土分裂し、前秦、前涼の諸國獨立せるに乘じて、鮮卑の慕容儁は河北を占領す。慕容儁の父慕容皝は、曩に前燕國を遼東に建て、國勢强大なりしが、是に至りて中國に入り、

劉曜と石勒と

前燕の建國

都を鄴（河南省彰德府臨漳縣）に奠む。

前秦の興隆。　後趙の亂るゝや、氐酋苻健は關中に據りて、前秦王と稱せしが、其從子苻堅に至り、王猛を任用して前燕を滅ぼし、前涼を降し、尙ほ西域諸國をも征服せしめ、天下の十の八を領せしかば、遂に江南を併呑せんと欲し、九十萬の大軍を起して、東晉に侵入す。

前秦の苻堅江北を一統す

淝水の戰。　東晉は、南渡の後、名臣王導等一意恢復を圖りしが、內亂多くして志を遂ぐるを得ず。後桓溫軍事都督となり、僅に西晉末より巴蜀の地を占領せし氐種の成（又漢と稱す）國を滅ぼししかど、未だ中原を恢復する能はざりしが、苻堅來侵するに及びて、東晉の相、謝安は、從子謝玄をして、兵八萬を率ゐて、之を淝水（安徽省）に逆擊せしむ。秦軍大敗して還れり（一〇四三）。

晉將謝玄大に苻堅を破る

謝安の書

謝安の大量

謝安は名家の出にして、夙に令名ありしが、當時の風尚に從ひ、清談に耽り、風流を事とし、久しく仕官を肯せざりしかば、時人は安石不肯出、將如蒼生何といへり。安石は謝安の字なり。年四十を過ぎて官途に就き、遂に宰相となる。秦軍來侵して擧國震動するや、獨り安は日に客を會し、碁を圍みて、自若たりしかば、衆情始めて鎭定しきといふ。其大量想ふべし。

六月廿日具記道民安惶恐言此月向終惟祥奠在近殯墓崩慟煩冤深酷不可居忝比奉十七十八日二告承故不和甚馳灼大熱尊體復何如謹白　記不具謝安惶恐再拜

後魏の興起。　淝水の敗後久しからずして前秦衰滅し、鮮卑、

後魏の太武帝江北を一統す

南朝及び北朝

匈奴、氐、羌、諸族各一方に割據して、後燕（鮮卑）、後秦（羌）、後涼（氐）、其他の諸小國前後分立せしが、鮮卑の拓跋珪も亦帝位に平城（山西省）に卽く（一〇五八）。之を後魏の道武帝といふ。後魏の勢日に強大となり、道武帝の孫太武帝の時、遂に江北諸國を一統す（一〇九九）。

東晉の滅亡。　東晉も淝水の戰後內亂相踵ぎしが、その相劉裕之を鎭定し、加ふるに外征の功ありしかば、遂に簒立して帝位に建康に卽く（一〇〇八）。之を宋の武帝といふ。是に於て支那は分れて南北兩大國となる。江北を北朝とし、江南を南朝と稱す。

五胡十六國。　西晉の末より、塞外人種が江北の地に相攻爭すること百三十年に餘り、其間に興亡せし列國十六（漢（前趙も之に合す）、成（又漢といふ）、後趙、前涼、前燕、前秦、後燕、後秦、西秦、後涼、南燕、西涼、南涼、北涼、大夏、北燕）種族五（匈奴、羯、鮮卑、氐、羌）。故に

之を總稱して五胡十六國といふ。

第十二章　南北朝の對立

後魏の極盛。　三國以來騷亂相繼ぎ、從ひて西域諸國の支那に通ずるもの甚だ稀なりしが、後魏の太武帝畧江北を一統するに及びて、西域諸國を招致し、又柔然を擊破せり。

後魏と柔然との關係

柔然は匈奴の別種にして、漠北に據り、道武帝の時より屢後魏と爭ひしが、是に至りて太武帝は大擧之を擊破しければ、柔然の勢一時衰微せり。時に宋の武帝の子、文帝南朝に君たりしが、後魏が柔然と爭ふに乘じて北伐せしに、反りて大敗し、江北の地は概ね後魏に歸し、後魏の國勢益〻强大となる。

孝文帝の改革。　後魏はもと北邊より起り、國俗野鄙なりしかば、太武帝の玄孫孝文帝の時、之が改良を企て、都を洛陽に移し、朝廷の儀式は一切漢族に模擬し、頭髮を辮垂して、窄袖の衣服を著けし舊俗は皆之を禁ぜり。故に學藝、文化は進歩せしかど、同時に華奢柔弱の風行はれて、國力始めて衰微す。

後魏の國力漸く衰微す

北朝の沿革、隋の興起。　北朝は孝文帝の後、內亂相踵ぎ、後魏遂に分かれて、東魏、西魏となる(一一九四)。東魏は鄴(河南省)に都し西魏は長安に都して、相攻爭せしが、東魏は北齊に簒はれ、西魏も亦尋で北周に簒はる。北周は後北齊を併せしが、北周の外戚楊堅又北周を簒ひて、帝位に長安に卽く。之を隋の文帝となす(一二四)。文帝尋で南朝を併せて天下を一統せり。

後魏東西に分かる

南朝の沿革、隋の一統。　南朝は宋滅び、齊を經て、梁に至る。梁の武帝は博學にして仁慈に富み、治國の器なりしかど、佛法

梁の武帝

に心醉して、武備を顧みざりしかば、後に内亂起りて國勢瓦解し、幾ばくならずして、陳之に代りしが、是に至りて隋に滅ぼされ、南北朝始めて一に歸しぬ(一二九)。

南北朝時代の大勢。 南北朝對立すること凡そ百五十年、其沿革の大勢は左表の如し。此間南北俱に二十餘君を出し、其半は皆簒弑に遭へり。以て當時紛亂の一端を察すべし。されば兩晉より南北朝にかけて、文物、學藝等一般に衰微せしかど、獨り佛教は盛に流行し、歷代の君主も概ね之を尊崇しければ、其結果として、繪畫、彫刻等次第に進歩し、殊に繪畫にては、東晉の顧愷之、宋の陸探微等の名手を出せり。

顧愷之筆孔子の像

繪畫の發達

南朝	宋	六〇年 八世	
	齊	二四年 七世	
	梁	五六年 四世	
	陳	三三年 五世	
北朝	魏	一三七年 一一世	
	東魏	一七年 一世	
	西魏	二四年 四世	
	北齊	二八年 五世	
	後周	二五年 五世	
	隋		
	隋		

第十三章　隋の興亡及び唐の初世

煬帝大に土木を興す

文帝の勤儉。 隋の文帝性勤儉にして、天下一統の後、專ら力を政治に用ゐて國民を愛養し、その規定せし諸般の制定は、多く唐代に遵奉せられたり。

煬帝の豪奢。 文帝の子、煬帝父を弑して位に卽きしが(六一四)、性豪奢を好み、盛に土木を興し、所在に離宮を築き、遊觀に備へ、運河を開きて、江南と河北との水路を通ぜり。されば後に

は丁男不足して、婦人を使役するに至れり。

運河

運河は文帝の時より已に幾分著手せり。もと運漕を目的とせしが、煬帝は之に加ふるに、遊觀の便宜を以てせしなり。煬帝の時に、通濟渠(黄河、淮水間)、刊溝(江、淮間)、永濟渠(黄河以北)、南運河(楊子江以南等を開きしが、大抵故の水道を利用せしものにて、其水道も固より今の運河と相違する所多し。

煬帝の外征。 煬帝又使者をやりて、西域諸國を招致し、林邑(今の柴棍附近)を伐ち、流求(今の臺灣)を征し、吐谷渾(當時青海附近に居りし鮮卑族)を降せり。我が推古天皇の時、國使を派して修交せられしも、亦是時なり(一二六七)。唯高句麗征伐には再三大失敗して、大に國力を疲弊せしめたり。

我が國始めて國使を派して隋と修交す

隋末の大亂、唐の興起。 かねて苦役に呻吟せし國民は、煬帝が外征に失敗せしを機として、四方に亂を興ししが、李淵も亦其子李世民と共に兵を擧げて長安を陷れ、遂に帝位に卽く(一二七八)。之を唐の高祖となす。時に煬帝は江都(江蘇省)に在りて、其下に弑せられしかば、李世民は四方を平定して天下を一統し、尋で高祖の禪を受く。之を太宗といふ。

貞觀の治。 太宗は非常の英主にして、杜如晦、房玄齡等の賢相、李勣、李靖等の名將を任用しければ、國内泰平にして、國威外に輝けり。後世稱して貞觀の治といふ。貞觀とは當時の年號なり。我が國及び朝鮮の古代の制度風俗は、多く唐風を傳へしものなれば、次章に當時の制度、風俗の大要を述ぶべし。

第十四章　唐の制度風俗

中央政府の官制

官制。 中央政府には、尚書、中書、門下の三省ありて、天下の大政を統ぶ。中書省は天子の詔勅を宣奉し、門下省は其詔勅を

三省、六部

審査し、尚書省は中書、門下二省を經て已に確定せる詔勅を天下に施行することを掌る。尚書省の下に、吏（官吏の進退を掌る）、戸（戸口の調査と租稅の徵收とを掌る）、禮（禮儀及び教育を掌る）、兵（軍事を掌る）、刑（刑律を掌る）、工（工藝を掌る）の六部ありて、天下の行政事務を分擔せり。

地方の官制

地方には、天下を十道に分ち、道の下に州と縣とあり。州には刺史、縣には令を置きて、其地方を治めしめ、道毎に巡察使を置きて、州、縣を監督せしむ。

田制、稅法。　周代井田の法は、戰國の頃より次第に壞ぶれ、富豪の兼併日に盛となり、貧民困窮しければ、其救濟策として、唐の時には均田法を用ゐ、毎年國民の年齢を調査し、二十一歲以上の丁男には、官田百畝を授け、その收穫中より、粟二斛を上納せしむ。之を租といふ。其他丁男は其土地の物產若干

均田の法

租、庸、調

を獻じ又毎年二十日間、國家の爲に、力役に服せざるべからず。前者を調といひ、後者を庸といふ。租、庸、調の三種は國家收入の最大財源をなせり。

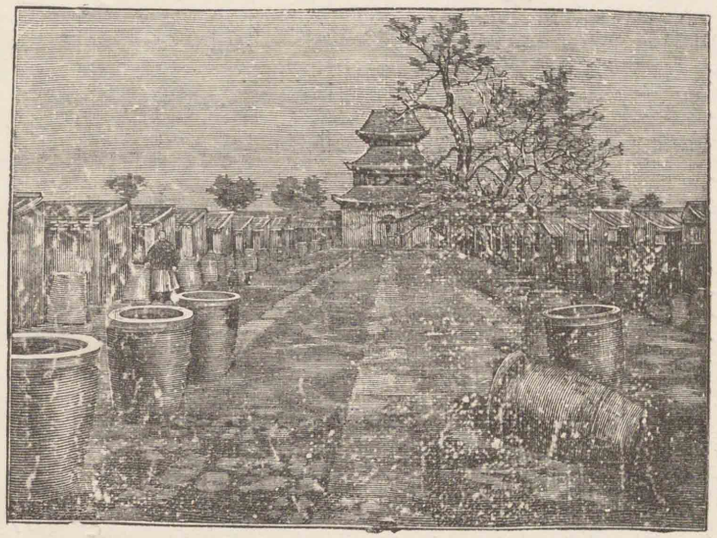
唐代の官吏登庸法

兵制。　天下に六百三十四府を置き、毎府大抵千人の常備兵を置く。天下の丁男の三分の一以内を以て府兵に充つ。府兵は其租、庸、調を免ぜらるる代りに、毎年一定の時日間武藝を練習し、又衞士として番上し、宮城の守護に當る者とす。

學制。　京師に國子學、大學、四門學等の學校を置き、地方にも各州、縣に學校を置く。この學校出身者を生徒といひ、別に、州、縣の檢定試驗に及第せし者を鄕貢といふ。歲毎に生徒、鄕貢を尚書省に會して之を考試し、合格者を官吏となす。其課目は、經學を主とする明經には經書（易、詩、書、三禮、三傳等）の義理を問ひ、文

學を主とする進士には詩賦の制作を試むるなり。

官吏登庸試驗場（北京）



秀才、舉人、進士

官吏登庸の法は、今日に至りても大差なし。清朝にては、毎年各府にて歳試を行ひ、及第者を秀才といひ、次に省内の秀才を首府に會して鄉試を行ひ、及第者を舉人といひ、最後に舉人を北京に會して、省試と殿試とを行ひ、及第者を進士といふ。進士、舉人は皆官吏たるを得べし。支那人は官吏となるを以て、人間最大の名譽と信ずるが故に、其一生を、この試驗に費す者多し。宋の蘇舜欽の及第の詩に、拔身泥澤底、飄迹雲霄上、爽如秋後鷹、榮如凱旋將などいへるにて、其得意を察すべし。

五刑

支那の罪人（現時）

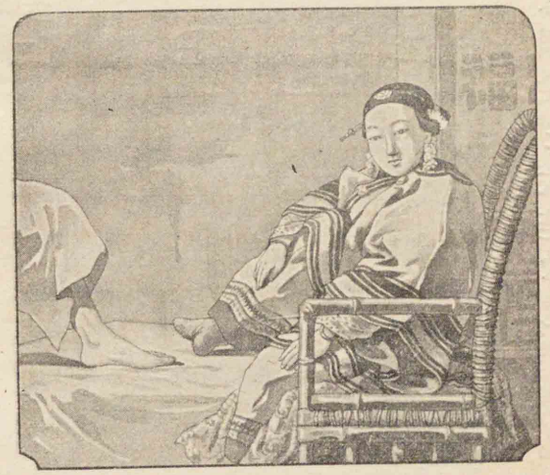
法制。 刑罰には、笞、杖、徒、流、死の五刑あり。笞（十、廿、卅、四十、五）杖（六十、七十、八十、九十、百）徒（一、年一年半、二年、二年半、三年）の三刑は更に五等に分かれ、流刑（二千里、二千五百里、三千里）は三等、死刑（絞、斬）は二等に分かる。故に刑の輕重はすべて二十等あり。

風俗。 婚姻、葬祭等は周代と大差なし。唯、喪期は西漢の頃よ

支那婦人の纏足

纏足及び喫茶

り次第に短縮となり、又墓地を相する風行はれ、相墓を世業とする者あるに至りぬ。女子は纏足してその小なるを貴び、男子は蓄爪してその長きを誇る奇風、及び喫茶の慣習等も亦唐代より次第に流行せり。



唐代の年中行事

正月元旦には屠蘇酒を酌みて新年を迎へ、七日は人日と稱して、七菜（ナナクサ）を食し、三月三日は上巳と稱して、曲水流觴の遊を

端午の競渡（現代）

催し、四月八日には灌佛の式あり。五月五日の端午には、艾糕（チマキ）を食し、香草湯を浴し、又水邊につきて競渡を行ふ。七月七日の七夕には、婦人は乞巧とて、裁縫、手藝の上達を天に祈り、七月十五日は中元と稱し、盂蘭盆（ウラボン）を行ひ、諸佛に供養し、九月九日の重陽には、山に登りて菊酒又は茱萸酒を飲み、歳終の除夕には追儺を行ひ、疫癘を禳ふ。是等の年中行事は、秦漢時代より次第に發達し、唐代に完成して現時に

も行はれ、又我が國、朝鮮にも傳はりしなり。

第十五章　唐の外國經略

突厥。 突厥はもと金山（阿爾泰山）附近を占領して、柔然に隷屬せし種族なりしが、南北朝の末より次第に勢力を增し、遂に柔然を斃して、今の內外蒙古、新疆、中央亞細亞等を併せ、都斤山（外蒙古）を根據地とし、東に向ひては、北周、北齊を掠め、西に向ひては、波斯を侵ししが、唐初に至り、內亂ありて、部落漸く離叛せしに乘じ、太宗は李靖、李勣をやりて之を滅ぼせり（一二九〇）。

唐の太宗突厥を滅ぼす

突厥の君主は可汗といひ、其妻を可敦といふ。野蠻にして文字なく、法律備らず。可汗に背き又は人を殺しし者は死罪に處し、爭鬪して人を傷つけし者は、其輕重に應じ、妻女若しくは馬を以て辨償せしめ、盜せし者には十倍の辨償を命ず。父兄死すれば、子弟其妻に配すること匈奴に同じ。

突厥の風俗

西突厥、波斯。 曩に突厥の一部は、千泉（中央亞細亞）を根據地として、西突厥と號せしが、太宗の子高宗の時、裴行儉をやりて、之を平定せしめしより（一一七三）、其西隣なる波斯も唐の保護に歸し、尋で摩訶末の建設せし阿剌比亞の大食國も亦來貢せり。

吐蕃、印度。 吐蕃（今の西藏）は唐初に至りて國勢大に揚がり、頻に青海附近に侵入して、唐と攻爭せしが、後和を請ひ、婚を通ず（一〇一三）。是より吐蕃の南隣なる泥波羅、印度の諸國も亦皆唐に來聘せり。

高句麗、新羅、百濟。 西漢の武帝の時、古朝鮮を平定せしが、西漢の衰ふると共に、滿洲人種の一部は、部酋朱蒙に率ゐられて、鴨綠江の上流地に高句麗部を建て（六四二）、朱蒙の子溫祚は更に南下して、馬韓の地に百濟部を建て（六三四）しが、俱に次第

高句麗、百濟、新羅の建國

に強大となり、西晉の頃に至りて、高句麗は畧古朝鮮の故土を占有し、百濟は馬韓の地を統一し、同時に辰韓の一部に新羅ありて、亦次第に辰韓、弁韓を併呑し、かくて三國鼎立の姿をなしし、新羅は最も我が國に近く、屢我が九州の叛民を煽動しければ、神功皇后之を征服し、尋で百濟を保護國とし、もとの弁韓の地に、日本府を建てて朝鮮の南半を統領せり。』

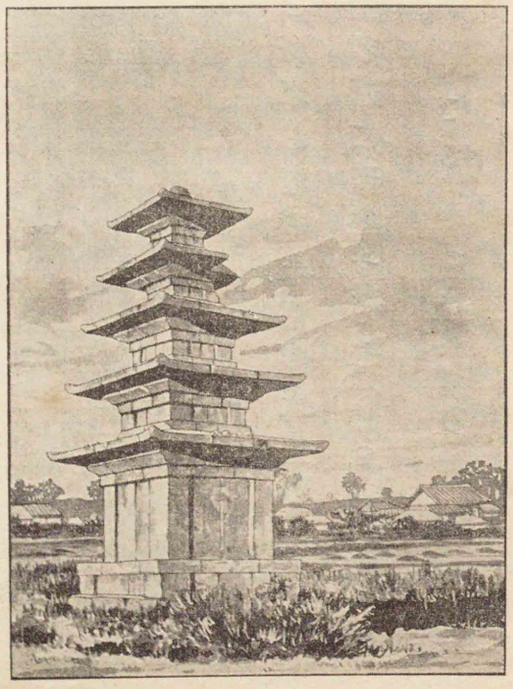
日本府の設立

新羅の一統。 已にして新羅の勢頗る強大となり、日本府を陷れ、百濟を侵しければ、百濟は高句麗と同盟して之に當り、新羅は孤立となり、頻に隋、唐に好を通じて、其保護を乞ふ。是に於て唐の太宗は高句麗を親征せしかど、大敗せり。高宗の時、海軍をやり、新羅と協力して百濟を滅ぼし(一三二三)、尋で又高句麗を併せ(一三二八)、平壤に安東都護府を開きて其地を統べしが、幾ばくならずして新羅叛きて、平壤を陷れしかば、唐は安東都護府を遼東に移し、朝鮮半島は新羅の占領に任せたり。

百濟及び高句麗の滅亡

大唐平百濟國碑塔（朝鮮忠清道扶餘縣附近）

新羅朝鮮半島を占領す



當時新羅には、上に英主武烈王文武王あり。下に賢臣金庾信あり。その朝鮮を一統し得しは是等數人の力なり。就中金庾信は才文武を兼ね、其妻智炤夫人も亦尋常の婦人にあらず。その子金元述曾て敗軍して生還せしかば、庾信怒りて生涯之に對面せず。庾信の死後、元述一たび母に見えんことを求むるや、夫人は婦人有『三從之義、今既寡矣、宜從』於子、若『元述』者、既不得『爲』子『於先君』、吾焉得『爲』其母『乎』といひて、遂に之を許さ

金庾信と智炤夫人と

ざりきとぞ。

日本。 我が國は已に隋と使聘を通ぜしが、唐興るに及びて、舒明天皇の時、國使を太宗の廷に派せしより、歴代遣唐使を置き、盛に使聘を通じて、其制度、文物を將來し、唐の末、宇多天皇の時、遣唐使を廢せしまで、僧侶、學生の唐に留學する者頗る多かりき。

遣唐使吉士長丹の像及び遣唐使唐の皇帝に拜謁する圖

我と唐との交通

第十六章　唐代に於ける東西の交通

六都護府の設立。 唐の太宗、高宗は主として東、北、西の三方面を經營し、南方に兵を用ゐざりしが、國威加はるに從ひ、今の後印度及び南洋の諸國皆來貢し、此の如くして唐の政令の及ぶ所、頗る廣大となりしかば、左の六都護を建てて、之を統治せり。

都護府	所在地	所轄區域
一、安東	初め朝鮮の平壤に治し、後、遼東城に移る。	滿洲及び朝鮮
二、安北	初め都斤山の邊に治し、後、陰山の麓に移る。	外蒙古
三、單于	山西省大同府の西北なる雲中城に治す。	內蒙古
四、北庭	天山北路の庭州に治す。今の迪化府なり。	天山北路
五、安西	初め高昌に治し、後、龜茲に移る。今の庫車なり。	天山南路及び中央亞細亞
六、安南	嶺南の交州に治す。今日の東京の河內なり。	南海諸國

大食人の通商。 かく空前の大帝國建設せられしが故に、外

國貿易は頗る發達し、支那の商船時に印度洋、波斯灣に往來せしが、唐の中世以後は、大食人（ダージ人）（アラブ人）の商業尤も盛にして、彼等は南洋を經て、交州（東京）、廣州（廣東）の諸港に、犀角、象牙、胡椒、香料等を輸入し、唐は此等の諸港に、提舉市舶といふ官を置き、入港稅を徵收せり。

外商多く廣府に來る

廣州はまた廣府と稱せしかば、外國人はカンフと呼べり。當時此地に滯在せし外商、時に十數萬人に及びきといふ。唐末の內亂に殺戮に遭ふもの多かりしかば、皆歸國し、貿易も亦衰微せり。

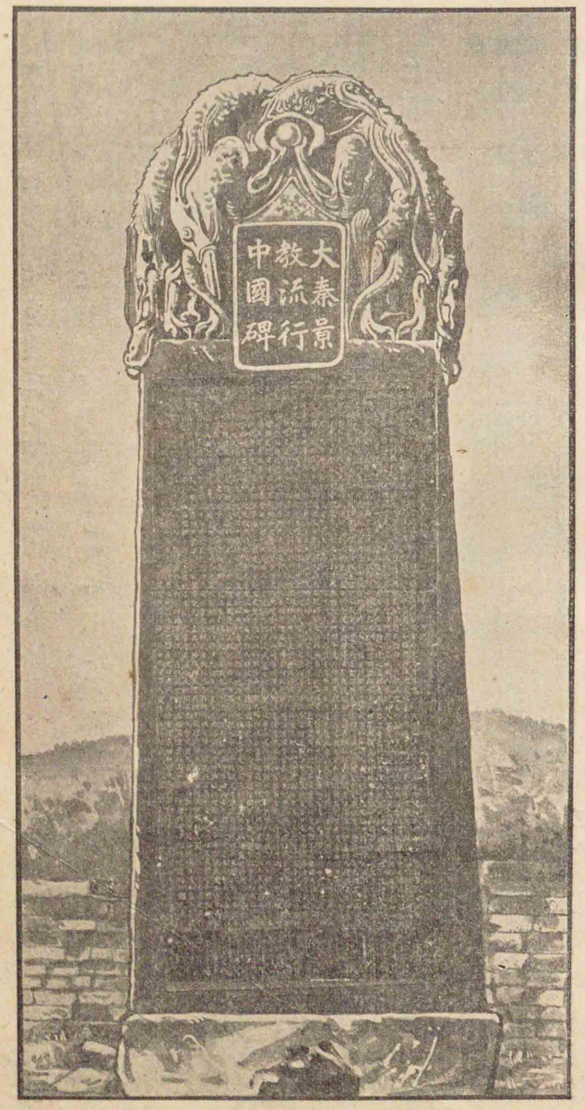
祆教、回教及び景教

諸外教の東漸。　東西の交通盛大となるに從ひ、當時中央亞細亞に流行せし祆教（ゾロアスター）、回教、景教等前後支那に東漸せり。祆教は波斯の蘇魯支（ゾロアスター）の創めし拜火教にして、回教は阿剌比亞（アラビア）の摩訶末（ムハメッド）の唱へしイスラム教なり。景教は唐の太宗の時（一二九五）支那に渡來せし耶蘇教の一派ネストル教にして、シリアの

阿羅本景教を傳ふ

ネストルの唱へし所なり。

景教は阿羅本（オロパン）といふ者皇紀一二九五年に始めて唐に來りて、太宗の尊信を得てより、次第に流行し、所在に寺院の建設を見るに至れり。之を大秦寺といふ。景教は大秦に起源すればなり。德宗の時、大秦寺の僧景淨は、長安に



大秦景教流行中國碑（陝西西安府）

景教流行中國碑を建てて、其教派の由來を述べたり。この碑は久しく世に佚せしが明末に至りて發見せられ、今日に現存す。

佛教の隆盛。 諸外教の東漸に關せず、佛教は益〻隆盛に赴き、東晉の法顯が渡天せし以來、唐代に至りては、玄奘、義淨等相繼ぎて印度に往き、遺經を求めて盛に之を譯出せり。

法顯、玄奘及び義淨の渡天

玄奘は太宗の時(一二八九)年二十六にして陸路より印度に往き、十七年間に百三十國を遊歷し、梵文の佛典六百五十餘部を齎して歸國せり。義淨は高宗の時(一三三二)に海路より印度に往き、二十四年の後、梵經四百部許を齎して歸國せり。玄奘以後の譯經を新譯といひ、以前を舊譯といふ。

玄奘渡天の圖

文化の發達。 かく佛教の流通せし結果、唐代に於ける地理學、音韻學、印刷、繪畫、彫刻、建築等は頗る發達を見るに至れり。

支那に於ける印刷術の發達

支那に於ける印刷は隋の時(一二五三)佛書を刊行せしを始めとし、唐代に至りて次第に盛大となれり。唯儒書は五代の頃より漸く印行せられ、尋で北宋の時活版の發明ありて、書籍の印行益〻隆盛を加へたり。

第十七章　唐の中世

則天武后

武韋の內亂。 高宗は晩年多疾の故を以て、國政を皇后武氏に委ねしかば、大權其手に歸し、高宗の死後自ら皇帝の位に卽く。世に所謂則天武后是なり。已にして張柬之は武后を强迫し、高宗の子中宗を位に卽かしめ、唐室を復興せしが、其皇后韋氏又中宗を弑して、權勢を擅にしければ、中宗の從子李隆基は韋氏を誅し、父睿宗を迎へて位に卽かしめ、尋で其禪

を受く(七一三)。之を玄宗とす。

外國の侵入。 この内亂三十年に亙り、其間に唐の邊備弛みしかば、新羅は朝鮮半島を占領し、大食國は波斯併呑の後、更に中央亞細亞より今の新疆地方に侵入し、吐蕃も亦黃河の上流地に出沒せり。

十節度使

節度使の設置。 玄宗は外國の侵入を防がんが爲に、邊要の地に十節度使(平盧、范陽、河東、朔方、河西、隴右、安西、北庭、劒南、嶺南)を置き、兵馬の大權を委ねて、四方を經畧せしかば、唐の國威また振へり。

開元の治

玄宗の内治。 玄宗又意を内治に用ゐ、天下泰平にして戸口蕃殖し、文學、宗教等隆盛を極めしかば、後世之を貞觀に比して、開元の治といへり。開元は當時の年號なり。

文學の革新。 支那上古の文學は、皆達意を主とせしが、三國時代より南北朝にかけて、詩、文共に内容よりも字句の修飾のみに重きをおくに至りしかば、世人漸く其實用に便ならざるを厭ひしが、玄宗の時李白(太白)、杜甫(子美)の二人出でて、始めて詩風を一變し、玄宗の後四十年にして、韓愈(退之)、柳宗元(子厚)の二人出でて、又文體を一變し、詩、文共に空前の發達をなし、支那文學史上に一大光彩を放つに至れり。

李白と杜甫と韓愈と柳宗元と

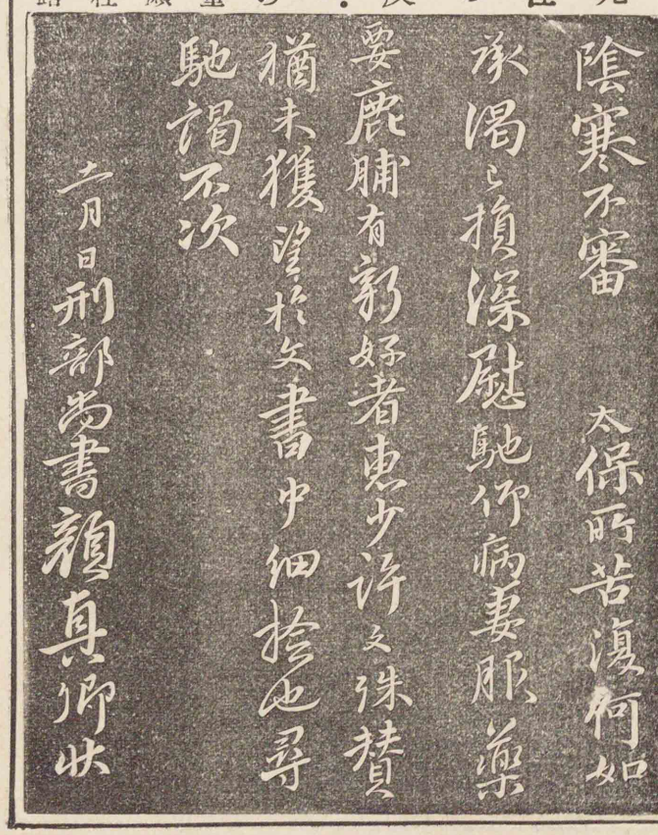
道教の興隆。 玄宗は佛教、景教等をも保護せしかど、殊に道教を尊崇せり。道教は道家の學說に、佛教を參酌せし一種の宗教なり。玄宗の時之を唐の正教と定めしより、頗る流行し、玄宗七世の孫武宗に至り、道教尊崇の極、一時自餘の諸宗教を嚴禁せしかば(一五〇五)、唐初傳來の諸外教は多く衰滅せり。

武宗諸外教を禁ず

安祿山の亂。 玄宗は在位四十五年に亙りしが、晩年楊貴妃

を寵して國政を顧みず。平盧范陽、河東の節度使安祿山之に乘じて兵を擧げ(一四一五)、直に洛陽を取り、更に長安に逼りしかば、玄宗は蜀に出奔し、位を子肅宗に讓れり。肅宗及び其子代宗は郭子儀、李光弼等の名將に任じ、回紇、大食等の援兵を得、遂に反亂を平定せり(一四三)。

顏眞卿の書



當時玄宗は宴遊の濫費多く、賦稅を重くせしかば、國民頗る疲弊せり。詩人杜甫の朱門酒肉臭、路有凍死骨といへるもの以て觀るべし。加ふるに泰平久しくして、府兵の制全くやぶれ、京師の近衞兵の如きも、甲を著くることだに知らざるが如き有樣なりしかば、安祿山の軍は無人の境を行くが如く、唯其間に張巡、顏眞卿、顏杲卿等ありて、聊か賊勢を支へしのみ。張巡は唯陽を守り、顏杲卿は常山を守りしが、皆敗死せり。正氣歌に爲張睢陽齒、爲顏常山舌とあるもの卽ち是なり。顏眞卿は顏杲卿の族弟にして、尤も書を善くせり。

玄宗時代に於ける財政の困難及び兵備の弛廢

張巡、顏眞卿、顏杲卿

第十八章　唐の衰滅

亂後の國勢。 安祿山の亂より、唐の國勢頓に衰へ、外國の侵入、節度使の跋扈、宦者の專橫等相踵ぎ、之に加ふるに財政の困難を以てし、遂に滅亡の已むを得ざるに至れり。

回紇及び南詔

回紇及び南詔。 回紇は娑陵河畔を根據とせし土耳古族にして、もと東突厥に隷屬せしが、東突厥の滅亡後之に代り、漠

回紇の入寇

北を占領して唐に歸服せり。安祿山の亂に、唐を救ひしより、頗る尊大となり、歳幣を貪り、婚を逼り、少しく意に滿たざれば、直に北邊に入寇せり。南詔は今の雲南地方を占領せし蠻族にして、玄宗の頃より强大となり、安祿山の亂後、四川、安南の兩方面を掠め、而して吐蕃も亦屢西境を擾だし、時に長安を陷れしことあり。』

南詔の侵掠

唐代に於ける回紇文字の碑片

回紇人は當時東亞に布教せし景教徒よりシリア文字を傳へ、之に本づきて回紇文字を作れり。かくて回紇人は漠北種族中にて、尤も早く文字の使用に達せし人種なるが故に、蒙古の漠北に勃興せし時も、多く回紇人をして文書を掌らしめたり。現時の蒙古文字及び滿洲文字は、この回紇文字より分派せしものなりといふ。

節度使の跋扈。 玄宗の時、邊要の地に節度使を置きしが、安祿山の亂後、外國の侵入相踵ぐに及びて、其數次第に增加せり。彼等は其管内に於ける、兵、政の兩權を握りしが故に、其勢日に强く、遂に朝廷の命を奉ぜざるに至れり。

財政の困難。 安祿山の亂後は、人民の流離甚しく、租、庸、調の法は壞ぶれ、朝廷の歳入減少せしのみならず、節度使の其管内の租稅を私するもの多かりしかば、國庫愈缺乏せり。是に於て、代宗の子德宗の時(一四〇)、租、庸、調の法を廢して、新に兩稅法を行ひ、更に諸種の新稅を起ししかど、財政の困難を救ふ能はずして、反りて民心の離叛を招きぬ。

租庸調の法やぶれ兩稅の法行はる

宦者の專横。 代宗の孫憲宗は、一時節度使を制服せしかど、幾ばくならずして宦者に弑せられぬ(八一〇)。玄宗の宴遊に耽

りし頃より、宦者次第に信任せられて、權勢を增し、安祿山の亂後は朝廷に於ける文武の大權を握り、憲宗を弑してより以來、天子の廢立も亦全く其手に歸するに至りしが、憲宗の曾孫昭宗位に卽くに及びて、汴（又大梁ともいふ。河南省）の節度使朱全忠を招きて悉く宦者を誅戮せり（一五六三）。

朱全忠宦者を誅戮す

唐の滅亡。 朱全忠是より權勢を專にし、昭宗を殺して、遂に唐を簒ふ（一五六七）。之を後梁の太祖となす。然れども其權勢の及ぶ所は、僅に中原に過ぎず。各地の節度使は多く之に從はずして、各一方に割據して相攻爭せり。

昭宗朱全忠に逼られ、長安より洛陽に移りし時、紇干山頭凍殺雀、何不飛去生處樂といふ俗謠を歌ひて、自ら之に比せり。以て唐末諸帝の境遇を察知すべし。紇干山は支那の北邊に在る寒氣烈しき山なり。

唐の滅亡。 朱全忠是より權勢を專にし、昭宗を殺して、遂に唐を簒ふ（一五六七）。之を後梁の太祖となす。然れども其權勢の及ぶ所は、僅に中原に過ぎず。各地の節度使は多く之に從はずして、各一方に割據して相攻爭せり。

昭宗朱全忠に逼られ、長安より洛陽に移りし時、紇干山頭凍殺雀、何不飛去生處樂といふ俗謠を歌ひて、自ら之に比せり。以て唐末諸帝の境遇を察知すべし。紇干山は支那の北邊に在る寒氣烈しき山なり。

（八十二と八十三との間）

中古史摘要及び年表

中古期は、皇紀四四〇年より一五六七年に至る約千百年間に亙り、我が孝靈天皇より醍醐天皇に至る時代に當れり。支那にては、秦の一統より唐の滅亡に至る間をいふ。前期以來膨脹し來りし漢族は、其勢力の塞外に擴がると共に、斯に塞外諸族と衝突を起せり。匈奴、鮮卑、柔然、突厥、回紇等の諸族、前後塞外より起りて、漢族と勢力を爭へり。されば此の時代は、漢族塞外族競爭時代ともいふべし。この期に於て、佛教は始めて印度以外に傳播し、塞外を經て、次第に支那、朝鮮、日本に東漸せしが故に、之を佛教東漸時代ともいふべし。又東、西兩洋の交通始めて開け、前には太秦人、後には大食人等支那に來り、南海諸國及び朝鮮、日本等もこの期に於て盛に支那と交通して、其文化を傳へたり。この間漢族革命の大勢と之に關係せる塞外諸族の盛衰とを示せば左の如し。

秦（一五）—西漢（二〇九）—新（一五）—東漢（一九七）—三國（四五）—西晉（五二）

匈奴

鮮卑

西晉（五二）—東晉（一〇四）—南朝（一七〇）

西晉（五二）—五胡—北朝（一四三）—隋（三〇）（三八）—唐（二九〇）—五代

柔然

突厥

回紇

年代事蹟

年代事蹟

秦一五 西漢二〇九 新一五 東漢一九七 三國四五 西晉五二 東晉一〇四 南朝一七〇 隋三〇(三八) 唐二九〇 五代

匈奴 鮮卑 五胡 北朝一四三 柔然 突厥 回紇

年代	皇紀	西暦	事蹟	年代	皇紀	西暦	事蹟
綏靖	九七〇頃	前五六四頃	釋迦生る	應神	九四〇	二八〇	晉天下を一統す
懿德	一七七頃	四八四頃	釋迦死す	同	九六四	三〇四	漢の劉淵帝を稱す
孝靈	三九三頃	二六四頃	阿育王摩揭陀王となる	仁德	九七六	三一六	西晉亡ぶ
同	四四六	二一五	蒙恬匈奴を征す	同	九七七	三一七	東晉興る
孝元	四四九	二一二	秦書を焚く	同	一〇四三	三八三	淝水の戰
同	四五〇	二一一	秦儒生を坑にす	允恭	一〇八〇	四二〇	東晉亡び宋興る
同	四五二	二〇九	陳勝兵を起す	同	一〇九九	四三九	南北朝の對立
同	四五五	二〇六	秦亡ぶ	雄略	一一三九	四七九	宋亡ぶ
同	四五九	二〇二	劉邦漢の皇帝となる	武烈	一一六二	五〇二	齊亡ぶ
同	四六七	一九四	衞滿古朝鮮王となる	安閑	一一九四	五三四	後魏東西に分かる
開化	五〇七	一五四	吳楚七國の亂	欽明	一二一五	五五五	突厥柔然を滅ぼす
同	五一一	一四〇	始めて年號を建つ	同	一二二二	五六二	新羅日本府を陷る
同	五三三頃	一六八頃	中央亞細亞に於ける大月氏の建國	同	一二三〇	五七〇	摩訶末阿剌比亞に生る
同	五三五	一六六	張騫西域より還る	崇峻	一二四九	五八九	隋天下を一統す
孝元	五五三	一〇八	漢古朝鮮を平ぐ	推古	一二六七	六〇七	日本始めて支那と通ず
崇神	六〇四	五七	新羅の建國	同	一二七八	六一八	隋亡び唐興る
同	六一〇	五一	鄭吉西域の都護となる	同	一二八七	六二七	唐の太宗の卽位
同	六二四	三七	高句麗の建國	舒明	一二八九	六二九	僧玄奘印度に往く
垂仁	六四三	一八	百濟の建國	同	一二九〇	六三〇	東突厥亡ぶ
同	六六八	後八	王莽の簒立	同	一二九二	六三〇	摩訶末死す
同	六八五	二五	漢室の再興	同	一二九五	六三五	景教唐に入る
同	七〇〇頃	四〇頃	大月氏の迦膩色迦王出づ	同	一三〇一	六四一	吐蕃唐と和す
同	七二七	六七	蔡愔佛法を傳ふ	皇極	一三〇二頃	六四二頃	大食波斯を占領す
景行	七五一	九一	班超西域の都護となる	天智	一三二三	六六三	百濟亡ぶ
成務	八一九	一五九	宦者始めて政權を握る	同	一三二八	六六八	高句麗亡ぶ
同	八二六	一六六	羅馬と支那との交通開く	同	一三三一	六七一	僧義淨印度に往く
同	八二七	一六七	東漢の黨錮	持統	一三五〇	六九〇	武后の簒立
同	八四四	一八四	黃巾の賊起る	文武	一三六五	七〇五	武后の亂平ぐ
應神	八六八	二〇八	赤壁の戰	元明	一三七二	七一二	唐の玄宗の卽位
同	八八〇	二三〇	魏の曹丕漢を簒ふ	孝謙	一四一五	七五五	安祿山反す
同	八八一	二三一	蜀漢の劉備帝を稱す	淳仁	一四二三	七六三	唐の內亂平ぐ
同	八八六	二三六	波斯のササン王家の興起	光仁	一四四〇	七八〇	兩稅の法を行ふ
同	八八九	二三九	吳の孫權帝を稱す	仁明	一五〇五	八四五	武宗諸外敎を禁ず
同	八九四	二三四	蜀漢の諸葛亮死す	宇多	一五五四	八九四	遣唐使の廢止
同	九一三	二六三	蜀漢亡ぶ	醍醐	一五六七	九〇七	朱全忠唐を簒ふ
同	九二五	二六五	魏亡ぶ				

第三編　近古期（一五六七年より二二七六年まで）

第一章　契丹の興起及び五代の紛爭

契丹の太祖。 契丹（キタイ）は、南北朝の頃より、潢河（シラムレン）（西喇木倫）附近を占領せし滿洲族にして、夙に唐に歸服せしが、唐末、耶律阿保機（エリアボキ）其主となるに及びて、遂に皇帝を稱し（一五七六）、臨潢（潢河の上流）に都す。之を契丹の太祖となす。彼は悉く回紇の故地を併せ、更に東の方渤海國を擊つ。

耶律阿保機皇帝を稱す

契丹の風俗

契丹文字

契丹はもと文字なく、貨幣なく、人死すれば之を山樹の間に曝す等頗る野蠻なりしが、太祖の時より漢人を招きて、文化を輸入するに力め、契丹文字を作り、佛教を傳へ、官制を定めて面目を一新せり。されど猶ほ毎年一定の時日には盜賊を公許する奇風行

はれたり。後支那の北部を併せて、強盛となりしかば、國名遠く聞え、今日に至るまで、露西亞人及び中央亞細亞の諸人種が、支那をさして、キタイ又はカタイといふは、其名殘なりとぞ。

渤海の興亡。 東晉の頃より、今の滿洲地方に靺鞨（マツカツ）部と稱する滿洲族ありしが、唐の中世、大祚榮といふ者其間に起り、靺鞨部を統領して渤海國を建設し（七一三）、國勢日に強く、盛に我が國と交通せしが、契丹の太祖は其國都忽汗（フルカ）城（滿洲吉林省）を取りて、之を滅ぼせり（一五八六頃）。かくて契丹は南下して支那内地を侵畧せんことを圖る。

契丹の太祖渤海を征す

契丹の南侵。 朱全忠の建てし後梁は、十數年にして後唐に滅ぼされ、後唐も亦久しからずして後晉に滅ぼさる。後晉の天下を得しは、契丹の後援の力なれば、支那北邊の十六州を之に割與せしが、其後屢禮を契丹に失ひしかば、契丹の太祖の子太宗は、大舉南下して後晉を滅ぼし、大梁（卽ち汴）に據りて、國を遼と號せり（一〇一七）。されど漢人服せず。叛亂相踵ぎしかば、太宗は遂に北に歸りぬ。

契丹の太宗の南侵

宋の一統。 遼軍の北歸するや、後晉の故將劉知遠は大梁に入りて、後漢國を建設せしが、僅に四年にして後周之に代れり。幾ばくならずして其節度使趙匡胤は、又後周を簒ひて、帝位に汴に卽く。之を宋の太祖となす（一〇六〇）。唐の滅亡より是に至るまで五十餘年、其間中原を占領せしもの五國あり。故に之を五代といふ。其興亡左の如し。

五代

國名	始祖	國都	興起年代	滅亡年代
後梁	朱全忠	大梁	一五六七	一五八三

後唐	李存勗（キヨク）	洛陽	一五八三　一五九六
後晉	石敬塘	大梁	一五九六　一六〇六
後漢	劉知遠	同	一六〇七　一六一一
後周	郭威	同	一六一一　一六二〇

五代時代に於ける士風の墮落

五代の時は、僅に五十餘年の間に、十三君を易へしが如き紛亂の世なりしかば、世道人心頗る頽れて、節義廉耻全く亡びぬ。馮道の如きは一人にして唐、晉、遼、漢、周の五朝十一君に歷事し、敗を去り勝に就きて、巧に將相の位を失はず。しかも世人この無節操漢を寛厚の長者として推重せり。以て當時の士風を察知すべし。

第二章　宋の一統

太祖の事業。 唐末以來節度使の跋扈益甚しく、五代の革命は多く節度使の簒奪に原因せり。されば宋の太祖は機會ある毎に、文臣を以て節度使を補缺し、此の如くして中央集權を行ひ、多年の宿弊を一掃せり。

宋の太祖節度使の權威を削る

太宗の事業。 朱全忠唐を滅ぼしし時、節度使の之に從はざる者、所在に獨立國を建て、宋初に至りても、猶ほ七國（楚、荆南、後蜀、南漢、南唐、吳越、北漢）存在せしを、太祖及び其弟太宗は前後之を征服して、遂に天下を一統せり（一六三九）。

交趾の獨立。 交趾は唐の安南都護府の所在地なりしを以て、又安南といふ。秦漢以來支那の一部をなしし、五代の末、支那の擾亂せるに乘じて獨立せり。太宗は天下一統の後、之が恢復を圖りしかど（一六四〇）、炎熱の爲に失敗し、交趾は遂に一外國を形成するに至りぬ。

宋と交趾との關係

宋、遼の和戰。 太宗は又北邊を恢復せんが爲に、遼を伐つこ

と十年に餘りしかど、終に成功せず。太宗の子眞宗の時、遼軍大舉して入寇す。眞宗之を澶州（直隸省）に防ぎしが、遂に歲幣、銀十萬兩、絹二十萬匹を遼に與へて和を結べり（一六四）。

澶州の役

第三章　遼の極盛

遼の聖宗。 遼は是時太祖の玄孫聖宗、位にありしが、賢明にして國政に勤め、外は宋と和し、又東の方高麗を征服せり。

高麗と遼との關係

高麗の興起。 曩に朝鮮を統一せし新羅は、唐末に至りて國威衰へ、王建といふ者松嶽（京畿道）に據りて、國を高麗と號し、遂に新羅に代りて朝鮮を一統す（一五九六）。之を高麗の太祖といふ。宋遼交戰の際、高麗は常に宋と通ぜしかば、聖宗怒りて之を征し、遂に其朝貢國たらしむ（一六五四）。

聖宗の時代に於ける遼の領土

遼の極盛。 聖宗の時、遼の領土は、東は日本海に涖み、西は天山に至り、內外蒙古を包み、之に朝貢するもの高麗、吐蕃以下六十國に及び、當時、東亞に於ける最强國なりしが、聖宗死して（一六九一）より國威漸く衰微せり。

西夏の李元昊

西夏の興起。 唐の中世より、吐蕃族の別種黨項部は夏州（鄂爾多斯の南）に蕃殖せしが、李元昊其部長となるに及びて（一六九二）、勢强大となり河西（黃河以西の甘肅）を併せ、都を興慶（甘肅省寧夏府）に奠め、國を西夏と號し、皇帝を稱し、西夏文字を作り、尋で宋の西邊に侵入す。

西夏文字

宋と西夏との關係

眞宗の子仁宗は、之を防戰すること數年、遂

に歳賜、銀、絹併せて二十五萬兩匹を與へて之と和す(一〇四七)。爾後西夏は、名義上、宋と遼とに臣屬せり。この西夏の難あるに乘じて、遼は宋に逼りて、歳幣、銀、絹各十萬を增さしめたり。

第四章　神宗の改革

宋の國辱。 宋は唐末五代の弊に懲り、建國以來、藩鎭の勢を殺ぐに急にして、其極兵力を弱くし、交趾、遼、西夏等の諸外國に對して、常に失敗を重ねたり。されば年少、氣鋭なる神宗位に卽くに及びて(一〇七二)、この國辱を雪がんと志ししが、先づ財政を治むる必要ありしかば、王安石を擧げて、國庫の充實を圖らしむ。

宋の神宗王安石を登庸す

王安石の新法。 王安石は、曩に仁宗の時、制度改革に關する萬言の書を上り、當時に聞えたる經世家なり。是に於て富國、强兵の二策を建て、富國の策としては、均輸、青苗、募役、市易等の新法を行ひ、强兵策としては、保甲、保馬の新法を行へり。

王安石の富國策及び强兵策

外征の失敗。 神宗は已に國內の革新を終へたれば、先づ西夏を滅ぼし、交趾を降し、而して後、遼を伐たんと計畫せしが、西夏、交趾の征伐皆意の如くならずして、敗亡多きのみならず、遼は宋が西夏と爭ふに乘じて、反りて其北邊を侵畧せり。かく外征に失敗せしに加へて、國內にも黨爭起れり。

新法黨及び舊法黨。 王安石の新法は、もと國庫の充實を目的としければ、國民固より之を悅ばず。殊に司馬光(溫公)以下の保守的政治家は、その祖宗の制に背くを非難して、之に反對し、かくて政治家中に、新法、舊法の二派を生じて、政權を爭奪

新舊兩派の軋轢

すること三十餘年に及べり。

新法の弊害

新法は必しも非難すべきにあらざれども、其目的上、勢收斂の傾なき能はず。青苗法の如きは、もと農夫の貧賤なるものに資本を貸與して、一定の利子を納めしむる趣意なりしかど、地方官は中央政府の意を迎へ、都市の富民をも強ひて、青苗錢を借らしめて、利子の增加を圖り、又青苗錢を得たる者は、多くは奢侈遊惰に流れたり。故に當時蘇東坡は、杖藜黍飯去匆々、過眼青錢轉手空、贏得兒童語音好、一年强半在城中といふ詩を作りて之を嘲れり。

宣和時代

徽宗の奢侈。 神宗の後、哲宗を經て、徽宗位に卽く。性奢侈を好み、大に宮殿を修飾し、美術品を蒐集し、殊に繪畫を奬勵しければ、美術は頗る發達せり。後世稱して宣和時代といふ。宣和とは當時の年號なり。されど失費多端なりしかば、新法黨の蔡京を擧げて、國庫の充實を圖らしむ。

女眞との同盟。 蔡京もと宦者童貫と善し、是に於て童貫も亦勢を得たり。この時女眞部滿洲より起りて、連に遼を破りしかば、童貫は女眞と通じて遼を擊ち、建國以來の宿望を遂ぐべきを主張す。徽宗之に從ひ、海路より使を發して女眞と同盟せり（一七八〇）。

徽宗皇帝筆花鳥

宋、女眞と遼を夾擊せんとす

第五章　女眞の興起

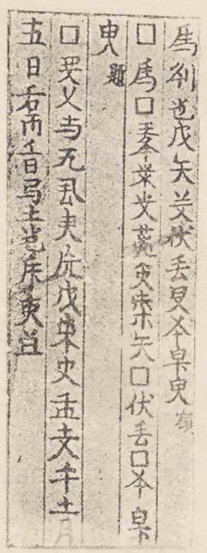
完顏部の獨立。 女眞はもと靺鞨の一部にして、渤海國滅亡の後、遼に隷屬せしが、女眞の一部なる完顏部の長阿骨打は遼の衰微を機として、女眞部を統一して、皇帝を稱し、都を會寧（滿洲吉林省）に奠め、國を金と號す（一七五）。之を金の太祖となす。

女眞の阿骨打皇帝を稱す

女眞の風俗

女眞人は半は地下を掘りたる家屋に住し、文字なく、貨幣の用法を知らざれば、物品交易を行ひ、醫藥なければ重患者は山野に捨つ。殉死の風盛にして、父兄死すれば、子弟は其妻を娶ること匈奴等に同じ、されど幼より騎射を習ひ、艱苦に慣るゝが故に、戰鬪力强し。支那の北半占領後は、其文化を傳へて面目を一新し、女眞文字等も使用せらるゝに至れり。

女眞文字



遼の滅亡。 この時聖宗の玄孫、天祚帝遼に君たり。親征の軍を起して、混同江（今の松花江）に至りしが、金軍の爲に大敗し、尋で金、宋の同盟成りて、宋軍は南より逼りしかば、天祚帝は西夏に遁れんとして、遂に金軍に獲らる。遼は建國より二百十年にして亡べり（一七八五）。遼の王族耶律大石は餘衆と共に、中央亞細亞に遁れて、其地に西遼國を建てぬ。

耶律大石西遼國を建つ

金軍の南下。 遼は滅亡せしかど、其領地は殆ど全く金の有となり、宋は僅に燕京（今の北京）附近を得たるに過ぎず。加之、金は宋の虛弱なるを察し、太祖の弟太宗は大擧して南下せり。徽宗は急に己を罪して、位を子欽宗に讓り、勤王の兵を募りて一時之を防ぎしかど、金軍は遂に國都汴京を陷れ、欽宗、徽宗以下の皇族を執へ、掠奪を縱にして北に歸る（一七八七）。

金の太宗宋の二帝を擒にす

宋の南渡。 金軍北に去るや、欽宗の弟高宗は、位に應天（河南省）に卽きしが、尋で金軍を避けて江南に移り、都を臨安（浙江省杭州府）に奠めたり（一七九八）。宋南渡してより、河南、關中、淮北の地、皆金の有に歸し、宋の國勢益〻蹙れり。

第六章　金宋の關係

宋金と和す

秦檜の專横。 南渡後、金と和戰するの可否は、宋の重要なる問題なりき。軍人、學者は多く開戰論を唱へしかど、高宗は其生母韋氏擒はれて金に在るの故を以て、和睦を望めり。秦檜之を察し、盛に媾和を唱へて、宰相となり、遂に金と和し、宋は歲貢として、銀、絹各二十五萬を納め、且つ金の封册を受け、金は韋氏を還し、兩國は東は淮水、西は大散關（陝西省）を以て境界

となすべきを決定す（一八〇一）。彼は同時に岳飛、韓世忠等の軍人を貶し、學者の國政を議するを禁じ、反對論者を抑壓せり。

岳飛の墓（浙江省杭州府）

岳飛の忠烈

岳飛は性至孝精忠、加ふるに怪力ありて、尤も射術に長せり。金人來侵してより、一意恢復を志し、大小數十戰、未だ曾て敗亡せしことあらず。されば金軍畏れて撼山易撼、岳家軍難（ハカタシ）といへり。秦檜相となるに及びて、その和議に反對なるを忌み、之を讒害せしに、其背に盡忠報國の四大字の墨（イレズミ）ありきといふ。

采石の戰。 太祖の孫廸古乃（ナイ）金に君たるに及びて、都を會寧より燕京に移し、大に宮殿を營み、尋で六十萬の大軍を起し、

江南を併呑せんと欲して、采石(安徽省)に逼りしが、宋將虞允文に敗られ、且つ幾ばくならずして內亂の爲に死せり。

廸古乃は性殘惡なりしかど、文才に富み、大志を抱けり。曾て畫工をして、宋都臨安及び其附近の吳山、西湖の圖を寫さしめ、自から詩を題して、萬里車書盡混同、江南豈有別疆封、提兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰、といへり。

金の世宗國風を保守す

金の世宗。 この內亂の結果、廸古乃の從弟世宗推されて帝位に卽きしが、先づ宋と和し、專ら國內の改革に力を用ゐたり。遷都以來奢侈、文弱の漢風大に流行しければ、世宗之を抑へ、力めて其國風を保守せしむ。然れども世宗の死後、また遠慮の明主なく、金人の氣力は日に衰弱せり。この時に乘じて蒙古は漠北より興り、遂に金、宋を併呑するに至れり。

宋の儒學。 宋は國初以來、遼、西夏、金、蒙古等に連敗するのみにて、國威尤も揚らざりしが、儒學は頗る發達せり。漢、唐の儒者は、唯經書の字句の解釋のみに力を用ゐ、其方法頗る無味にして、且つ實行に遠かりしを、宋の學者は、道敎と佛敎とを參酌して、儒敎の理論的方面と實行的方面とを開拓して、所謂宋學を興こし、最後に朱熹(晦菴先生)出でて之を大成せり。朱子の學は爾來儒學の正統となりぬ。

朱熹

第七章　蒙古の興起

蒙古の鐵木眞

成吉思汗。 蒙古部は外蒙古の斡難河の上流地を占領して、遼、金に隷屬せしが、鐵木眞其部長となるに及びて、近傍の諸部を併せ、殊に當時按臺山附近に勢を振ひし乃滿部長太陽罕を斃してより、內蒙古の地全く鐵木眞に歸服しければ、遂

に大汗の位に卽き、成吉思汗（強盛なる君主の義）と號せり（一八六）。

元代の蒙古の文字

蒙古の風俗

蒙古人は帳幕に住し、狩獵を業とす。文字なかりしが、鐵木眞成吉思汗となりし頃より回紇文字を用ゐ、後元の世祖の時、始めて蒙古文字を作れり。一夫多妻の風行はれ、父兄死すれば、其子弟は其妻を娶る。男子は辮髮して、之を兩耳の邊に垂れ、女子は前頭を剃り、後頭に束髮して一種の冠を戴く。蒙古の兵は、騎馬に長じ、饑渴に耐へ、殊に君主に對して尤も忠實なれば、戰鬪力頗る强し。

成吉思汗西夏を降し金を侵す

西夏、金と蒙古と。　成吉思汗既に塞外を一統し、次に南下して西夏を降し、更に金を侵しければ、金は河北を割きて和を請ひ、都を汴京（河南省）に移す。この時、乃滿の遺族等西域に據り

て、復讐を圖りしかば、成吉思汗は鋒を轉じて西域へ向ふ。

西域の狀態。　曩に摩訶末の建設せし大食國の領土は、一時亞細亞、亞非利加、歐洲に跨りしが、唐末の頃より次第に衰微し、西突厥の餘衆の其地に住せる者勢を得、就中セルヂュク王家の如きは、亞細亞の西半を一統し、屢耶蘇教徒の十字軍をやぶりしが、北宋の末、其勢漸く衰へし時、遼の耶律大石來りて、中央亞細亞を占領せり。

乃滿の屈出律西遼を滅ぼす

西遼の盛衰。　耶律大石は中央亞細亞を占領して、西遼國を建て、都を虎思斡耳朶（吹河の上流）に奠め（一八七）、尙ほ今の新疆の大部をも服從せしめ、勢强大なりしが、其孫直魯克の時、乃滿の太陽罕の子屈出律は、蒙古に逐はれて來奔し、尋で西遼を奪ひ、この勢に乘じて蒙古に復讐せんと志ししが、反りて成吉

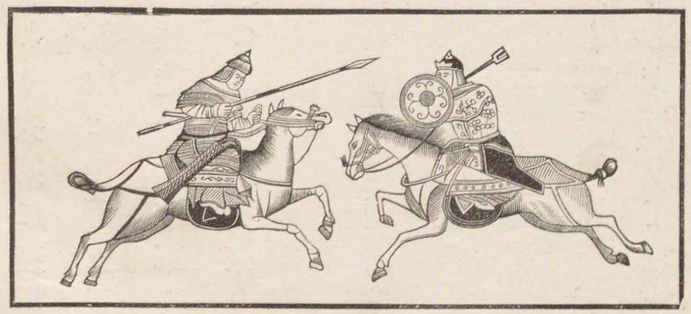
思汗の爲に敗死せり(一八七八)。是に於て蒙古は花剌子模王家と境を接するに至れり。』

蒙古の戰士

花剌子模の强盛。 花剌子模王家は突厥族の建設せし所にして、もとセルヂュク王家に隷屬せしが、後獨立してセルヂュク王家を併せ、屈出律の西遼を篡ひし時、之を助け、其報酬として中央亞細亞を領し、此の如くして國勢益〻强大となりしが、當時の花剌子模王ムハメッドは其勢を賴みて蒙古の隊商を殺害せり。

花剌子模家の滅亡

成吉思汗の西征。 是に於て成吉思汗は其四子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷と共に、花剌子模に侵入して、國都尋思干(今のサマルカンド)を陷れしかば、ムハメッドは裏海の島中に逃れて、憂死せり。ムハメッドを追擊せし蒙古の一隊は、更に太和嶺(今のカウカサス山)を踰えて、阿羅思(今の露西亞)を侵略せしが、成吉思汗の東歸するに及びて軍を還せり(一八八四)。



蒙古軍阿羅思に侵入す

第八章　太宗及び憲宗の事業

西夏の滅亡。 成吉思汗は東に歸りて、西夏を滅ぼせり。西夏は建國より是に至るまで百九十年なり。成吉思汗は更に金に侵入せんとして、中途に死す(一八七)。之を蒙古の太祖といふ。』

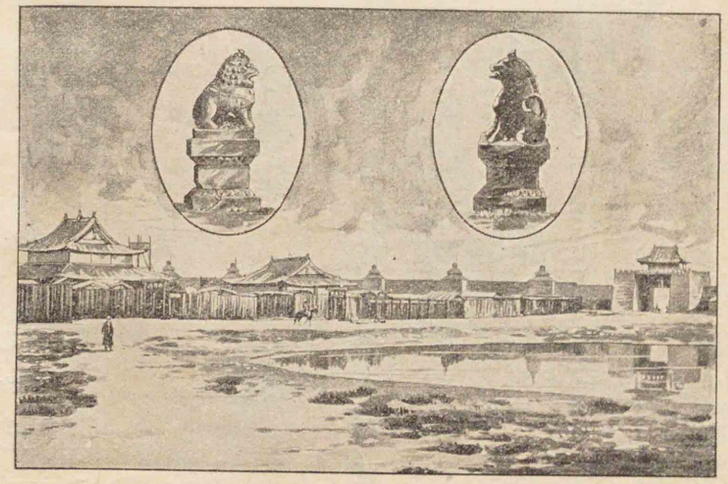
金の滅亡。 太祖の第三子窩濶台嗣ぎて大汗となる。之を太宗といふ。太宗は都を哈喇和林(外蒙古オルコン河の畔)に奠め、又父の遺志を紹ぎて金に侵入せしかば、金の哀宗(世宗の曾孫)は蔡州(河南省)

に出奔して、宋の援を乞ひしに、宋は反りて蒙古と通じて金を夾撃し、金は建國より百二十年にして滅びぬ(一九四)。

現時の喀喇和林及び其附近に於ける元代の遺物

拔都の西征。 この時高麗も亦蒙古に降り、東方稍事なかりしかば、太宗は西方侵畧を計畫し、朮赤の子拔都を元帥とし、太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥等と共に歐洲に侵入せしむ(一八六)。蒙古軍は先づ阿羅思を蹂躪し、遂に歐洲内地に逼り、一軍は波蘭土に入り、一軍は匈牙利に入り

蒙古軍歐洲内地に侵入す



て、殺掠を恣にせしが、會太宗死せしを以て、蒙古軍東に還る(一九二)。

蒙古の軍法、一旦抵抗せし者は必ず之を屠殺し、且つ其一耳を割取するを常とす。南露西亞侵畧中のみにても、その割取せし耳は廿七萬に達しきといふ。其殘虐想ふべし。されば當時歐洲人は、蒙古軍の來侵を以て、上帝が人間の罪惡を懲罰せんが爲に、特に惡魔を下降せしものと信じ、各寺院は盛に祈禱を行ひて、上帝の宥恕を求めきといふ。

蒙古大汗國分裂の遠因

憲宗の卽位。 太宗の後、子貴由立つ。之を定宗となす。定宗は在位三年にして死す。蒙古の法、大汗となる者は必ず諸王、諸將等を以て組織せる大集會の推戴を經るを要せしが、この時、拖雷の子蒙哥、大集會に推されて大汗となる。之を憲宗となす。是に於て太宗の一族は不平を抱き、遂に後年蒙古大汗國の分裂を促せり。

旭烈兀の西征。 憲宗は弟忽必烈をして、南方、吐蕃、交趾等を經畧せしめ、更に弟旭烈兀をやり、西方亞細亞を平定せしむ。旭烈兀は波斯、小亞細亞の回教徒を征服し、更にシリアより埃及に侵入せんとせしが、憲宗死せしを以て軍を收めぬ。

憲宗の南征。 曩に南征の命を受けたる忽必烈は、四川、雲南地方を定め、吐蕃を服し、更に其別軍は交趾に侵入す。是に於て憲宗自ら忽必烈に協力して宋を擊ちしが、中途にして死せり。

第九章　宋の滅亡及び世祖の外征

世祖の卽位。 この時蒙古の諸王中に大汗たらんと企つる者ありしかば、忽必烈は宋の和議を許し、開平（内蒙古ドロンノール湖の西北）に

蒙古國號を建てて元といふ

至りて、蒙古の大汗となる（一二〇九）。之を世祖となす。世祖は都を燕京に移し、之を大都と名づけ、尋で國號を建てて元といふ。世祖は漢人の儒者を任用して、文化を輸入するに力め、又諸般の制度を定めたり。

宋の滅亡。 世祖は宋が和議の約を果さざるを怒り、伯顏等をやり、大擧南征せしむ。文天祥等勤王の兵を起ししかど、皆敗れ、國都臨安遂に陷り（一二九六）、宋は建國より三百十七年にして滅びぬ。

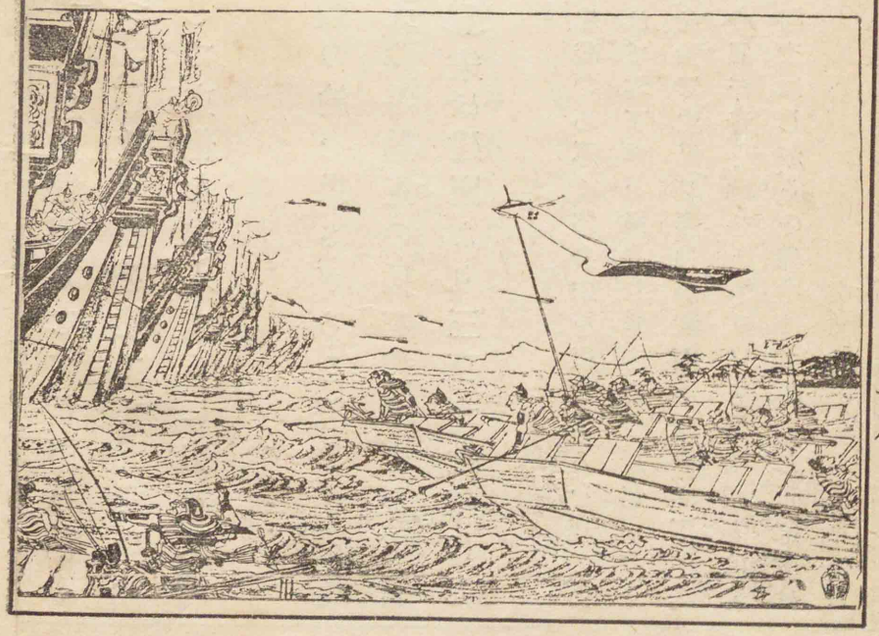
文天祥の精忠

文天祥は學に富み、文を能くし、忠義の心厚く、終身宋を復興するを以て、己の任となせり。曾て元軍に敗られて、零丁洋を過ぎし時、辛苦遭逢起一經、干戈落々四周星、山河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍、惶恐灘頭說惶恐、零丁洋裏歎零丁、人生自古誰無死、留取丹心照汗靑。と詠せり。零丁洋と惶恐灘とは皆廣東地方の地名なり。後元軍に囚はれしが、その獄中にて作りし正氣歌は最も有名なり。

高麗の降服。 高麗は早く蒙古と通ぜしかど、其蠻風を厭ひて心服せず。故に太宗の時より、頻に攻擊を被りしが、世祖の時遂に蒙古に降服し、忠烈王（太祖十二世の孫）は世祖の女を迎へて妃となししより、高麗王は歷代元と婚を通じ、內治、外交は一切元の命を奉ぜり。

元と高麗との關係

當時高麗王は必ず質子を元に送り、且つ親しく元に入朝せざるべからず。又本名の外に蒙古

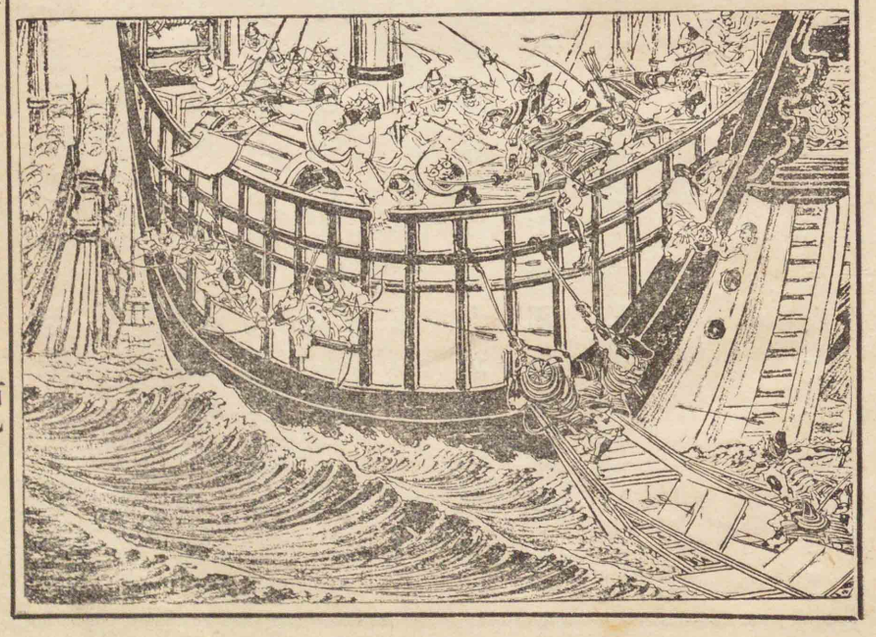


蒙古襲來

弘安の元寇

名を稱し、王は勿論、高麗の官吏、學生に至るまで、皆辮髮して蒙古服を著けたり。かく關係親密なりし結果として、明の中世に至り諺文の發生を見るに至れり。諺文は皇紀二一〇六年に、朝鮮の學者等、蒙古文字を參考して制作せしものなりといふ。母音十一字、子音十四字、すべて二十五字を結合して、種々の語音を表はし得べく、極めて便利なる文字にして、一般の國民に行はるゝこと、我が國の假名のごとし。

日本侵略の失敗。 世祖は



又高麗王に命じて、我が國を招致せしめしが、鎌倉の執權、北條時宗は、その文辭無禮なりしを以て、之を退く(一九二七)。是に於て世祖は、蒙古、高麗の兵三萬餘を發して、壹岐、對馬に入寇せしめしかど成功せず(一九三四)。更に蒙古人、高麗人及び漢人十四萬を發して、我が九州に侵入せしかど、これ亦暴風に遇ひて大敗せり。實に後宇多天皇の弘安四年(一九四一)なり。

南洋諸國の征服。 世祖は我が國に失敗せしかど、緬(今のビルマ國)、交趾、占城(今のサイゴン附近)、眞臘(今のカンボヂア)等の後印度諸國を降服せしめしかば、爪哇、蘇木都剌以下の南洋諸國も、亦皆元に朝貢せり。

第十章　元の極盛

四汗國と大汗國と。 太祖の興起以來、僅々八十年の問に、西

元初に於ける蒙古の版圖

伯利亞の北部と印度の南部とを除ける亞細亞大陸及び歐洲東部は、擧げて蒙古の領土に歸せり。蒙古の諸王は此大帝國內に皆幾分の私領地を有せり。世祖は元の皇帝として、遼東、內外蒙古、支那本部、中央亞細亞を直領し、高麗、吐蕃、後印度諸國を羈絆し、又蒙古の大汗として此等諸王の私領地をも統治せしが、諸王の中にて左の四部尤も强大なり。

蒙古の四汗國

國名	始祖	都首	領土
察合台汗國	察合台	阿力麻里(伊犂曲附近)	西遼の故土
窩濶台汗國	窩濶台	也迷里(外蒙古エミル河附近)	乃滿の故土
欽察汗國	拔都	薩萊(チルガ河の下流)	西伯利亞の西半部及び歐洲
伊兒汗國	旭烈兀	マラグア(ウルミア湖の東)	西方亞細亞一帶

東西の交通。 かく蒙古の領土は歐、亞二大陸に跨りしより、

海、陸に於ける東西兩洋の交通大に開け、殊に江南の泉州の如きは、當時第一の貿易港となり、外國商人の其地に來住するもの數萬に及べり。以太利のマルコ、ポーロ、モロッコのイブンバツタ等が支那に遠遊せしも、亦この時代なり。

マルコ、ポーロとイブンバツタと

マルコ、ポーロは十七歳の時、父と共にヴェニスを出で、元に滯在すること十七年、頗る世祖に親愛せらる。四十一歳の時故郷に歸りしに、親戚故舊多く死亡して、殆ど知人なかりきといふ。彼は後其見聞錄を公にせしが、其書中に蒙古が我が國を侵して大敗せしことを記載せし故、ヂパン(日本)の國名は始めて歐洲に知られたり。イブンバツタは、一生に七万五千英里を旅行せし人にて、元の順帝の時に海路支那に來れり。

マルコ、ポーロ

外國人の任用。 かく交通開けしに加へて、歷代の蒙古大汗は、人種の差別なく才能ある者を登庸しければ、阿剌比亞、波斯の學者、軍人、以太利、佛蘭西の畫家、職工等多く來りて其朝に仕へたり。

蒙古と耶蘇教國との關係

耶蘇教徒の布教。 當時耶蘇教徒は十字軍に熱中せしが、蒙古と同盟して回教徒を撲滅せんと欲し、定宗憲宗の頃より羅馬法王、佛蘭西王等の使僧喀喇和林に來れり。尋で世祖の末年より、耶蘇教徒の支那に來るもの多く、遂に寺院を大都に建設して(一九五九)、盛に布教に從事せり。

第十一章　元の衰微

海都の反亂。 初め憲宗蒙古の大汗となりし以來、太宗の子

孫たる窩濶台汗國の諸王は、常に不平を抱きしが、世祖が宋の經畧に暇なきを機とし、太宗の孫海都は反旗を擧げ（一九二五）、察合台汗國及び欽察汗國の諸王を誘ひ、大汗の直隷地たる中央亞細亞を占領す。三汗國の諸王は遂に海都を擁して蒙古の大汗となし（一九二九）、相與に喀喇和林に逼る。世祖之を防ぎて勝敗あり。世祖死し（一九五四）、孫成宗嗣ぐに及びて、海都猶ほ邊に入寇せしが、海都の死後幾ばくならずして、察合台汗は元に降り、元の援兵を得て、窩濶台汗國を滅ぼし、其地を併呑せしより、內亂始めて鎭定せり（一九六六頃）。

海都蒙古の大汗を稱す

財政の困難。 この四十餘年の內亂によりて、蒙古の諸汗國と元との關係殆ど絕え、次第に獨立の姿をなすに至れり。殊に連年の戰爭にて元の財政頗る亂れしかば、交鈔（今の紙幣）を發

行せしが、濫發の結果、次第に其價下落して通用をなさず。從ひて物價騰貴して、國民困難せり。

明初の交鈔（實物十五分の一）

喇嘛の尊信。 吐蕃には、唐の頃より佛敎の一派なる喇嘛敎流行し、喇嘛（喇嘛敎の僧侶）の勢力次第に强盛となりしが、曩に世祖の吐蕃を平定するや、國民撫御の必要より、喇嘛拔思巴を帝師に拜して、吐蕃を治めしめし以來、歷代の帝王は皆喇嘛を尊信し、佛事供養の費頗る多く、之が爲に國庫益〻缺乏して、國民の負擔頗る增加せり。

西僧の横暴

元の諸帝は卽位の初、必ず帝師より佛戒を受け、帝師は常に天子と對坐せり。されば喇嘛の横肆譬ふるにものなく、甚しきは南宋の諸陵を發きて、其遺骸を侮辱し、其財寶を盜むに至れり。さるに朝廷は之に不問に附せしのみならず。一時は凡歐(ウ)西僧者截(キリ)其手、言者斷其舌とさへ布達せり。史家の元之天下半亡於僧と評せしも過論にあらず。

蒙古の相續法

權臣の專横。 加之、蒙古の相續法は、必しも父子の世襲を認めざるが故に、帝位相續の際に、多少の紛爭を起し、從ひて權臣其擁立の功を負ひて威權を專にし、此の如くにして朝政頗る亂れたり。

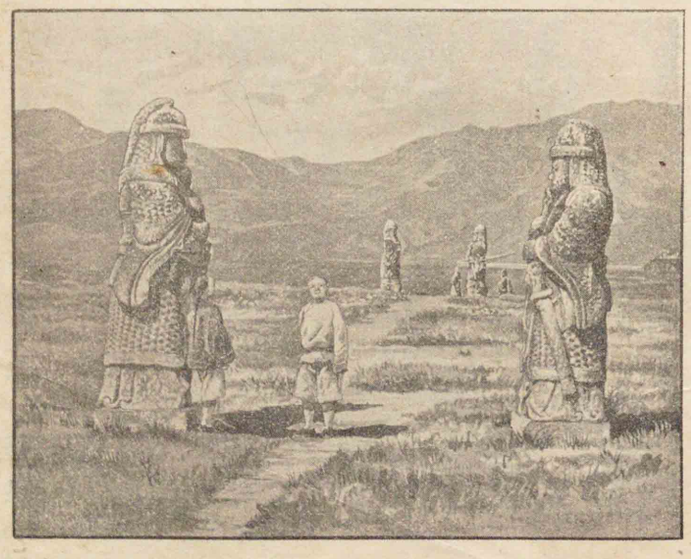
明の太祖元を滅ぼす

群雄の蜂起。 かねて蒙古の羈絆に不快なる漢人は、この機に乘じて四方に紛起せしが、就中朱元璋の兵勢日に强く、連に元軍を破りて大都に逼りしかば、元の順帝(世祖五世の孫)は開平(カイピン)に奔れり。世祖國號を建ててより、九十八年にして元亡び(一三八)、朱元璋位に金陵(江蘇省江寧府)に卽く。之を明の太祖(洪武帝)といふ。

明の太祖の陵(江蘇省江寧府)

第十二章　明の初世

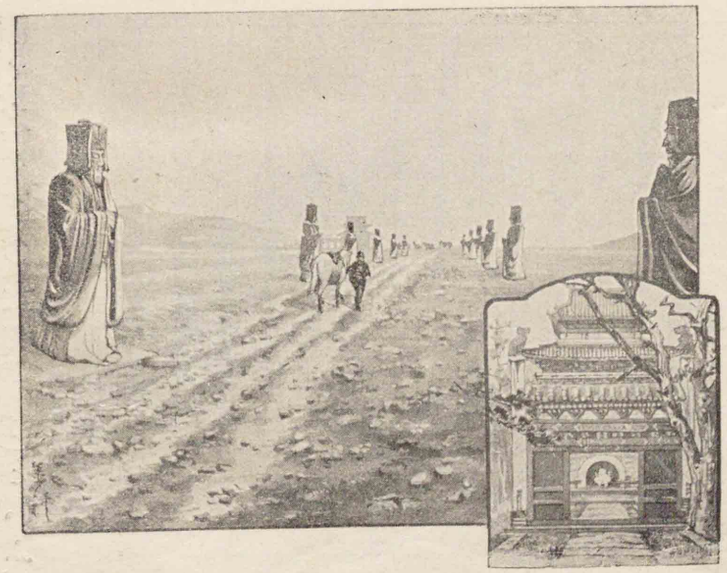
太祖の政策。 明の太祖は、元末の諸弊を革め、更に兵をやりて、元の餘衆を開平附近に擊破せしめしかば、蒙古の部族全く潰散し、漠南、滿洲の地は皆明の版圖に歸せり。是に於て、太祖は遼東(盛京省)、大寧(內蒙古)、大同(山西省)、洮洲(タウ)(甘肅省)等邊要の地に、行都指揮使司を置き



て、國防を嚴にし、尙ほ諸子を要地に分封して、帝室の藩屏となししが、其北邊の諸王には、特に征討の自由を許ししを以て、其勢次第に强大となれり。

諸王の强大

成祖の簒立。 太祖死し(二〇五八)、孫惠帝(建文帝)嗣ぎ、諸王の强大を恐れ、之を抑壓せんことを圖りしかば、燕王朱棣(惠帝の叔父)は兵を燕京に擧げ、諸王を誘ひて南下す。金陵の宦者等燕王に內通しければ、惠帝遂に



明の成祖の陵及び陵前の正門（直隸順天府昌平州附近）

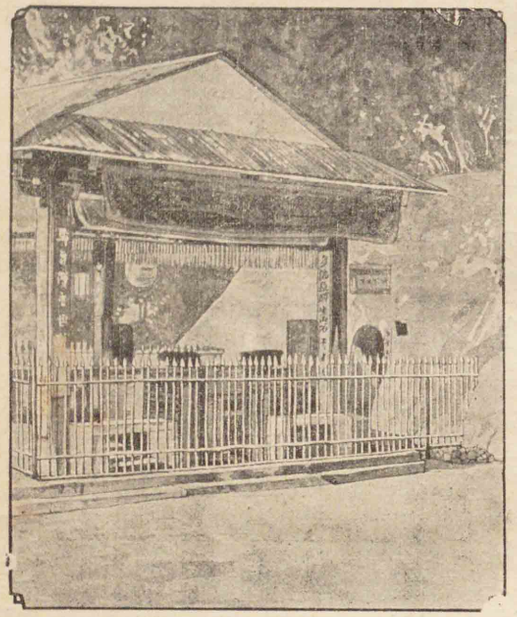
出奔し、燕王代りて帝位に卽く(二〇六二)。之を成祖(永樂帝)となす。都を燕京に移して北京となし、舊都金陵を南京となす。

北京と南京と

交趾の併呑。 成祖は又當時交趾に內亂ありしに乘じて、一時之を併呑せしが(二〇六六)、幾ばくならずして國人黎利といふ者亂をなし、大越國を建て(二〇七八)、屢明軍を敗りしかば、成祖の孫宣宗の時、遂に交趾を棄て(二〇八七)、之と和せり。

大越の建國

南海經畧。 曩に成祖は惠帝の海外に逃亡せしを疑ひ、宦者鄭和に命じ、海軍を率ゐて南海諸國を歷訪せ



鄭和の祠（瓜哇島サマラン市支那人居留地大覺寺境內）

鄭和南海諸國を經畧す

しめしかば、南海諸國皆明に來貢し、而して明人の南海諸國に通商する者も亦多かりき。

鄭和は皇紀二〇六五年に成祖の命を奉じ、六十二艘の巨舶を率ゐて、南海に航せし以來、二十五年間に、海外に航すること前後七回にして、蘇門答剌等の酋長を擒にすること三回、大に明の國威を南洋に輝かせり。鄭和は一に王三保として知られ、今日に至るまで、南洋航海者は其神靈を崇拜す。

王三保

第十三章　帖木兒帝國の興起

東察合台汗國と西察合台汗國と

蒙古諸汗國の衰微。 元の東方に滅亡する間に、察合台、伊兒、欽察の三汗國も亦西方に衰微せり。此等諸汗國の衰微せし大原因は、相續法不完全にして、王位繼承の際に、常に紛擾を起ししに在り。察合台汗國の如きは、遂に之が爲に東、西兩部に分裂し、東察合台汗國は喀什噶爾に都し、西察合台汗國は撒馬兒罕に都して、相攻爭し、國勢頗る衰微せり。

帖木兒伊兒汗國を滅ぼす

帖木兒の興起。 是時蒙古の疎族帖木兒は碣石（撒馬兒罕の南）より起り、西察合台汗國を併せて、都を撒馬兒罕に奠め（二〇二九）、東察合台汗を降し、伊兒汗國を併呑し、遂に欽察汗國に侵入す。

伊兒汗國の滅亡。 伊兒汗國は旭烈兀の曾孫合贊汗の時、憲法を制定し、國政を改良し、又歐洲諸國の文物を輸入して、國運隆盛なりしかど、其死後幾ばくならずして內訌起り、加之、屢欽察汗の侵入を被り、國力頗る衰へしかば、帖木兒は容易に之を併呑し得たり。

欽察汗國の盛衰。 欽察汗は拔都の玄孫月卽別、その子札尼別の時、伊兒汗國を侵畧して領土を開き、又以太利の商人を招きて黑海の貿易を盛にし、國運盛大なりしが、其後篡弑相

帖木兒欽察汗國を征す

帖木兒及び其廟（サマルカンド）

繼ぎ、拔都（バッ）の疎族トクタミシュ（拔都の父朮赤六世の孫）は、帖木兒の後援により、一時欽察汗となりしが、反覆常なかりしかば、帖木兒は伊兒汗國平定の後、親征して欽察汗を降せり（二〇五）。

帖木兒の東征。 帖木兒は尋で印度を侵畧し、更に小亞細亞に向ひて、土耳古帝バヂャジッドをやぶり、此の如くして亞細亞の大半を平定したれば、明を滅ぼして世界一統の實を擧げんと欲し、東征の軍を起ししが、中途にして病死し（二〇六五）、明は幸に其侵畧を免れぬ。帖木兒の死後國威一旦衰へしが、其五世の孫バベルに至り、印度に莫臥兒（ムガール）帝國を建設せり。

帖木兒の人物

帖木兒、人となり、意志鞏固にして、曾て目的を變更せしことなし。好みて英傑の傳記を讀み、又深く意を外國の地理、政治に留め、其記憶力は非常なりき。彼は常に「天に二日なし、地に二王あるべからず。世界は大なりと雖も、我が大望に比するに足らず。」といへり。

第十四章　明の衰微

明代宦者專權の由來

宦者の專横。 初め明の太祖は、歷代の成敗に鑑み、宦者の政事に預かることを禁ぜしが、成祖の簒立するや、宦者の內應せしを德として、之に信任しければ、宦者次第に政權を握り、

成祖の曾孫英宗以來、英宗の曾孫武宗に至るまで、凡そ八十年間、朝廷に跋扈せり。かくて中央政府の腐敗せしに乘じ、南北邊に外寇おこる。

瓦剌部長也先

土木の變

瓦剌部の强盛。 瓦剌はもと蒙古の屬部にして、バイカル湖の西邊に住居せしが、蒙古の衰微すると共に、漸く勢を得て南下し、天山北路及び外蒙古の西半を占領せり。也先其部長となるに及びて、元の遺族を擁して明に入寇す。明の英宗親征して土木（直隸省）に至りしが、大敗して虜となり（二一〇九）、僅に和議によりて放還せらるゝを得たり。然れども幾ばくならずして、也先は内亂に斃れ、瓦剌部は衰微せり。

韃靼部の入寇。 元滅びてより、元の子孫は、韃靼の可汗の號を稱せしかど、諸部を統一する實力なく、蒙古の勢久しく振はざりしが、達延（元の順帝七世の孫）韃靼の可汗となるに及び（二一三〇）、始めて内外蒙古を一統して、大元大可汗と稱し、又明に入寇して、河套（今の爾多斯）を畧し、其孫俺答の時、益〻明の北邊を攻掠せり。

韃靼の達延汗蒙古を一統す

倭寇の侵害。 かく北邊綏からざる間に、明の東南海は倭寇の侵害を被れり。我が國の南北朝分爭の頃より、我が邊民は海賊となりて、高麗及び元の沿海を侵掠し、明初に至りてやまず。之を倭寇といふ。南北朝一統後、我が足利義滿好を明に通ぜしより（二一〇六）、足利氏と明との交通絶えず。西國の諸侯も亦各自明に通じて貿易に從事せしかば、倭寇は一時やみしかど、足利氏の衰ふるに及びて、また

日本の海賊朝鮮支那の沿海を掠む

倭寇

來寇す。武宗の從弟世宗(嘉靖帝)の時に至り、僅に之を鎭定せしかど、餘黨は臺灣を占領して、猶ほ近海に出沒せり。

八幡賊

當時我が國の海賊は、八幡大菩薩の幟を建てたる小船に乘りしかば、八幡(バシ)賊ともいへり。大抵輕裝して日本刀を携へ、進退の相圖には、法螺を吹き、動作極めて敏捷なりしかば、諸外國皆之を恐怖せり。明人の記錄に、倭賊勇而戇(オロカ)、不甚別生死、每戰輒赤體、提三尺刀舞而前、無能捍(フセグ)者、其用兵善埋伏、數(メグツテ)遶出我軍後、兩面夾攻、每以寡勝衆といへるにて、其大樣を察知すべし。

朝鮮の建國

朝鮮の役。 高麗は元との關係上、元の滅亡後も、明に歸服せざりしが、高麗の將李成桂は、倭寇擊退の功によりて、國人の心を得、遂に簒立して王位に卽く。之を朝鮮の太祖となす(二〇五二)。尋で明の封册を受けて其外藩となれり。太祖八世の孫宣祖(李昭)の時、我が豐臣秀吉は、朝鮮に命じて、明を伐つ嚮導をなさしめしかど、命を拒みしかば、先づ朝鮮を征伐す(二二五二)。宣祖

明軍朝鮮を援ひて大敗す

頻にやぶれ、義州(鴨綠江の河口)に走りて援兵を明に請ふ。時に世宗の孫、神宗(萬曆帝)明に君臨せしが、大兵を發して朝鮮を援けしかど大敗し、遂に和を我が國に求む。されど媾和の條件一致せずして、我が軍再び朝鮮を蹂躪せしが、秀吉死するに及びて退去せり。この戰爭の爲に、明は將士を失ひ、軍資を費すこと多く、國勢益衰微せし時に當りて、滿洲は勃興し來れり。

第四編　近世期（二二七六年以後）

第一章　滿洲の興起

滿洲の太祖。 金の滅亡後、滿洲族の勢久しく振はざりしが、明末、弩爾哈赤（ヌルハチ）といふ者出でて、赫圖阿拉（ホトアラ）（今の興京）附近を占領せし、覺羅（ギオロ）部に長たるに及びて（二二四三）、次第に滿洲族を統一し、遂に國號を建てて滿洲といひ、皇帝を稱す（二二七六）。之を滿洲の太祖となす。明の神宗は其強大を恐れ、朝鮮と協力して之を夾擊せしが、反りて大敗し、太祖は明の瀋陽（シン）をとりて、都を斯に奠む。卽ち奉天府なり。

覺羅部長弩爾哈赤皇帝を稱す

滿洲國號を清と更む

太宗の事業。 太祖死し、子太宗嗣ぎ、西（シ）、漠南蒙古部を征服し、國號を更めて清（シン）といふ（二二九六）。時に朝鮮は猶ほ明と通ぜしか

ば、太宗之を征して、封册を受けしめ（二二九七）、又力を專にして、南、明を侵す。明の毅宗（神宗の孫）は吳三桂をやりて之を防がしむ。

清の太宗朝鮮を降す

朝鮮は久しく清を夷狄視して、明に好意を示ししが、皇紀二二九六年清の太宗親しく侵入するに及びて、遂に城下の降伏をなし、京城の東南なる南漢山の地に、大清皇帝功德碑を建て、盛に國家再造の洪恩を頌せり。爾後毎年歲幣使を派遣し、且つ京城の西郭外に、迎恩門と慕華館とを設け、清の使者來れば、朝鮮王は之を迎恩門に奉迎し、之

朝鮮の迎恩門

を慕華館に休憩せしめ、而して京城に導くを常となししが、日清戰爭後功德碑を掊し、其他清國に對する一切の典禮を廢止せり。

流賊李自成

明の滅亡。 明は神宗の時より課稅重く、國民其負擔に苦みしが、李自成陝西に反するに及びて(九一二)、四方の流民之に響應し、明の北邊に事あるに乘じて北京に入り、毅宗を弑す。明は二百七十七年にして亡びぬ(〇四三)。

清の一統。 清の世祖(太宗の子)は之を機とし、明將吳三桂を助け、李自成を伐つを名として、容易に支那の北部を定め、國都を北京に遷せり。明の諸王は江南に據りて、清の南下を防ぎしかど皆敗れ、桂王(神宗の孫)は緬甸に入り、魯王(太祖九世の孫)は臺灣に退き、清は支那本部を統一し、辮髮の令を下して、其風俗に從はしむ(〇五三)。

清辮髮の令を下す

蘭人鄭成功に降服する圖及び鄭成功の廟（臺灣臺南府）

清軍臺灣を降す

鄭成功。 明の遺臣に鄭成功あり。明人鄭芝龍の子にして、母は我が平戸の人なり。清の江南を平定するや、魯王を奉じて臺灣に退く。臺灣は曩に倭寇の根據地となり、尋で和蘭人之を奪ひ(二八四)、學校を設け、寺院を建て、專ら文化の輸入に盡力せしが、是に至りて鄭成功は和蘭人を逐ひて、臺灣を占領せしかど、魯王、鄭成功相つぎて死せしかば、鄭成功の孫鄭克塽の時、遂に清に降れり(二四三)。

吳三桂の反亂

三藩の亂。 初め世祖は、明の降將吳三桂を雲南に、尙可喜を廣東に、耿(カウ)繼茂を福建に封じて、明の遺族を鎭壓せしめしが、天下平定の後、三藩自ら安んぜず。世祖の子聖祖(康熙帝)の時、吳三桂遂に耿繼茂の子耿精忠、尙可喜の子尙之信と共に、兵を擧げしが、幾ばくならずして、反亂平定せり(二三一)。

第二章　清の塞外征畧

宗喀巴の喇嘛教革新

紅教喇嘛及び黃教喇嘛。 西藏(卽ち吐蕃)の喇嘛は、もと紅衣紅帽を著けしを以て、紅教喇嘛といふ。彼等は元代、明初にかけて、支那政府の尊仰を受けしより、頗る驕惰となり、殊に妻子を蓄へ、其弊害少からざりしかば、明の初宗喀巴(ツオンカバ)といふ者、宗教改革を唱へ、新喇嘛教を建つ。彼は紅教に反對して、黃衣、黃帽を著けしが故に黃教喇嘛といふ。

達賴喇嘛

黃教喇嘛の勝利。 宗喀巴の死(二七〇)後、其後嗣者は世々達賴(ダライ)喇嘛(ラマ)と號して、黃教喇嘛を總管せしが、次第に勢力を增し、殊に韃靼部長俺答(アルタン)の歸依を得てより、內、外蒙古及び天山北路に流通するに至りしかば、紅教喇嘛は兵力によりて、黃教を壓倒せんと圖りしが、達賴喇嘛は衞拉(ウエラ)(卽ち瓦剌)部の一派にて當時靑海地方を占領せし和碩(ホショ)部を招きて、紅教を

達賴喇嘛選定の圖

擊破せしより、西藏全土は遂に黃教に歸し、和碩部は黃教の保護者として、西藏の兵權を握れり。

達賴喇嘛の相續法

黃教は紅教に反對して、帶妻を非認せしが故に、特異なる相續法を創設し、達賴喇嘛には眞死なく、必ず其化身者出現して、衆生を濟度する者とせり。故に一達賴喇嘛入寂すれば、國中の小兒につきて、化身者たるべき者を搜出して、達賴喇嘛となす。若し其候補者數人ある時は、各自の名を金瓶に納め、抽籤して之を決定す。

準噶爾部の强大。 衞拉部は、也先の死後、分裂して統一せざりしが、明末に至り、伊犁地方の準噶爾部は、衞拉部より起りて、遂に之を統一し、和碩部に代りて西藏の兵權を握り、更に當時東察合台汗の全く衰微せしに乘じて、天山南路を併呑せり。

清と準噶爾部との衝突。 是に於て準噶爾部は東に向ひ、漠北蒙古部に侵入す。蒙古部やぶれ、保護を清に乞ふ。聖祖は親征して、大に準噶爾の軍を土拉河畔にやぶれり(二三五六)。漠南蒙古部は、曩に清に歸服し、漠北蒙古部も亦清に降服したれば、內外蒙古は全く清の版圖に列せり。

內外蒙古清の版圖となる

西藏の征服。 準噶爾部は更に西藏の喇嘛の力を借て、恢復を圖りしが、清軍西藏に入りて喇嘛を征服し、尋で駐藏大臣を拉撒に置きて、之を鎭壓し(二三八四)、又青海地方をも占領せり。

準噶爾部、天山南路の平定。 この失敗の後、準噶爾部は猶ほ天山南路の回教徒と協力して、清の西邊を擾ししかば、聖祖の孫、高宗(乾隆帝)は大軍を派して、準噶爾部を討滅し(二四一七)、併せて天山南路を平定し(二四二〇)、天山南北兩路は全く清の有に歸しぬ。

準噶爾部の滅亡

高宗乾隆皇帝

後印度諸國の朝貢。 高宗は西北方面を平定し終ふるや、又西南方面の經畧に從ひ、緬甸を征して朝貢國たらしめ(二四二九)、暹羅をも來貢せしめ(二四一四)、更に安南を征す。曩に黎利は大越國を安南に建てしが、其後内亂起り、阮文惠遂に大越を滅ぼして安南を一統す(二四六)。高宗はこの内亂に乘じて安南を擊ち、遂に之を朝貢國たらしめたり(二四八)。

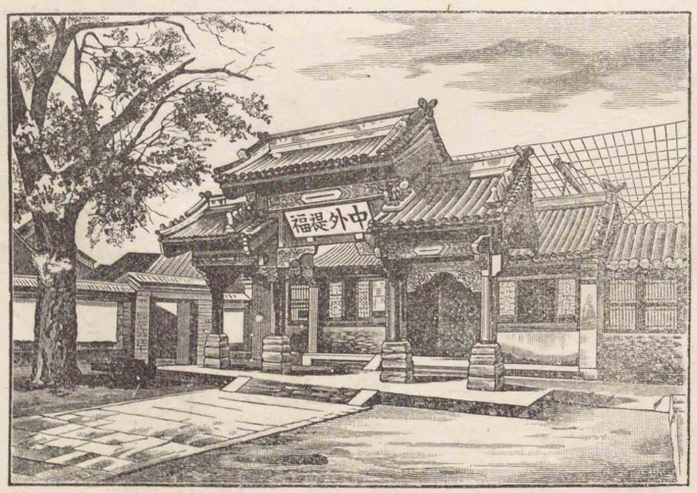
第三章　清の制度及び學術

總理各國事務衙門

内閣と軍機所と

清の制度。 清は滿洲より起り、次第に内蒙古、支那本部、外蒙古、天山南北兩路、西藏、青海を平定し、遂に今日の領土を有するに至りしが、この領土を統治せんが爲に、左の制度を採れり。

中央政府。 中央政府の組織は、上に内閣ありて天下の政務を總理し、軍機所ありて軍國の機務を議定し、下に吏、戶、禮、兵、刑、工の六部及び理藩院、總理各國事務衙門、海軍衙門ありて行政を分擔す。六部の職掌は唐の六部



理藩院と總理各國事務衙門と

に同じく、理藩院は藩部（内外蒙古、青海、西藏）を管し、總理各國事務衙門は外交を、海軍衙門は海軍を統ぶ。

地方廳。 支那本部は、之を十八省（直隸、山東、山西、河南、江蘇、安徽、浙江、江西、福建、廣東、廣西、甘肅、陝西、四川、湖南、湖北、雲南、貴州）とし、天山南北兩路は之を一省（新疆）とし、省の下に府、州、縣を置く。大抵二省毎に總督を置き、其管内に於ける文武の大權を統べしむ。其下に巡撫及び提督あり。共に一省一人を常とす。巡撫は省内の民治を掌り、提督は其兵事を統ぶ。其下に知府、知州、知縣等ありて、各其管内を統治す。滿洲は三省（盛京、吉林、黑龍江）に分ち、各將軍を置きて之を統べしめ、藩部は皆理藩院に隷屬す。

總督、巡撫、提督

兵制。 清の兵制は八旗と綠旗とに分かる。八旗とは太祖の時、滿洲兵を八旗（正黃、正白、正紅、正藍、鑲黃、鑲白、鑲紅、鑲藍）に編成せしに始まり、尋で

八旗と綠旗と

蒙古人、漢人を以て、各八旗を編制せり。八旗の兵は皇帝の親軍にして、滿洲及び京城を警衛するを主とし、又全帝國内の要地を守備す。各旗に都統ありて之を統ぶ。綠旗とは明の滅亡後、專ら漢人を以て組織せし常備軍にして、支那本部の守備を主とし、各省の提督之を統ぶ。八旗、綠旗の外、支那本部には勇兵（地方の義勇兵）あり。内外蒙古、青海には旗兵（一種の民兵）ありて、其方面の警備に當れり。

勇兵と旗兵と

考證學。 宋學流行して以來、訓詁の學廢し、殊に明の王守仁（陽明先生）が、良知の說を唱へてより、學者は理論を尙び、學說頗る粗空となりしかば、清初に顧炎武、考證學を唱へ、必ず證據を古典に求めて立論すべきを主張せり。聖祖、高宗の世、大に學術を奬勵しければ、學者輩出し、考證學は益〻流行せり。

明代の王守仁及び清初の顧炎武

耶蘇教の東漸。 明の中世葡萄牙(ポルトガル)人が、喜望峯を廻りて東洋の航路を開きしより、耶蘇教士の東方に布教を試むる者多かりしが、就中ゼシュイット派のフランシス、ズァヴィル(沙末爾)は、印度、日本に布教して後、支那に向ひ、中途にして死せり(一二二)。尋で同派のマテオ、リッチ(利瑪竇)は支那に來り、明の神宗の許可を得て、北京に會堂を建てしより(一二二)、ゼシュイット教士の北支那に來る者多く、その曆法、砲術に達せし故を以て、明廷の信任を博せり。

利瑪竇

沙末爾と利瑪竇と

耶蘇教士の任用。 清の世祖北京に入るや、耶蘇教士アダム、シャール(湯若望)を用ゐ、聖祖も亦フェルビースト(南懷仁)に任じ、世宗、高宗相繼ぎて教士を任用し、其力によりて支那の曆法、砲術、數學を一新し、且つ始めて支那全帝國を測量製圖するを得たり。

湯若望と南懷仁と

湯若望

曆法、砲術、數學の革新

耶蘇教の禁止。 かくゼシュイット教士が清廷の信任を得しより、自餘の耶蘇教士は之を嫉みて爭論を構へしかば、聖祖は清廷任用以外の耶蘇教士の退去を命じ(二三七八)、尋で耶蘇教禁制の令を下せり。

第四章　莫臥兒帝國の興亡及び英人の印度侵畧

ウヅベック族

莫臥兒帝國の建設

男

女

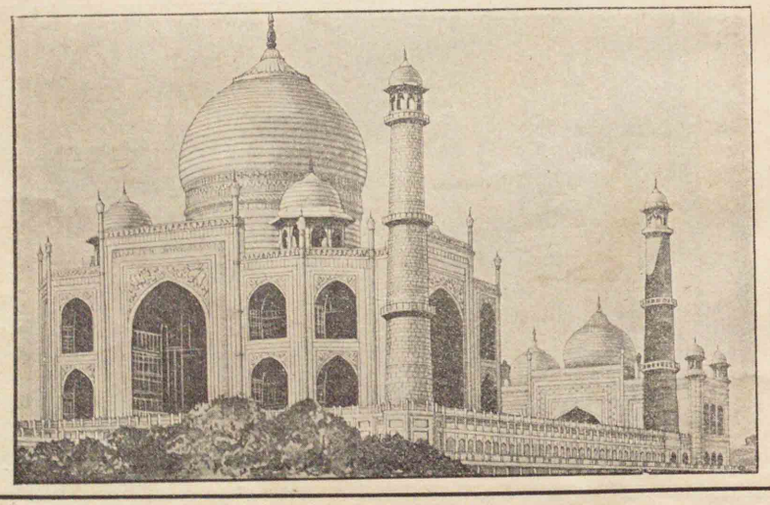
ウヅベック族の南下。 明初、帖木兒の死後、其大帝國分裂し、中央亞細亞の紛擾せるに乘じて、欽察汗に隷屬せしウヅベック族南下し、中央亞細亞を占領して、布哈拉（ブハラ）、基華（ヒワ）の二汗國を建てたり。帖木兒五世の孫バベルは頻に恢復を圖りしかど、失敗し、遂に印度に退きて莫臥兒（ムガル）（莫臥兒は蒙古の訛なり）帝國を興しぬ（二一八六）。

莫臥兒時代の建築（皇紀二三〇〇年頃印度アグラ府に建設せられし廟）

莫臥兒帝國の極盛

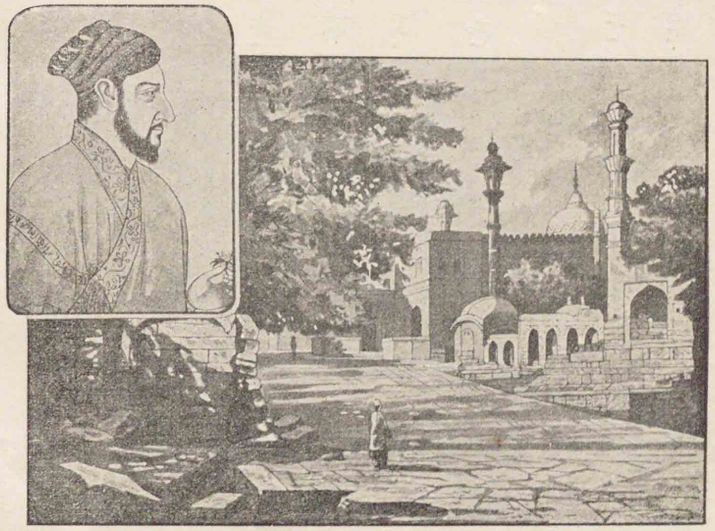
アクバル大帝。 印度の佛教は唐の中世より衰へ、波羅門教其勢を恢復せしが、尋で宋初の頃より、回教徒侵入して、次第に印度を占領せしかど、常に宗教上の爭絶えざりしが、バベルの孫アクバル位に卽くに及びて、波羅門教徒と婚を通じ、且つ從來行はれし不信仰稅（回教を奉ぜざる者より徵收す）を廢せしかば、波羅門教徒の心服を得、南印度を除くの外、悉く其版圖に歸せり。

アクバルはあらゆる宗教に寛大にして、休日毎に、猶太教、耶蘇教、回教、波羅門教、拜



火教佛教の僧侶を會同して宗教上の談論を聞くを樂とせり。彼は印度の回教徒と波羅門教徒との惡感情を一掃せん爲め、自から一新宗教を興ししが、十分の成功を見るに及ぼずして死せり。アクバルよりアウラングゼブに至れる百餘年間は、莫臥兒帝國の極盛時代にして、當時に建設せられたる宮殿寺院の宏麗なること世界に比なく、デーリの大宮殿の如きは、間口三千二百尺、奥行千六百尺に餘り、其天井には、若し地上に天國あらば、そはこの宮殿なり、この宮殿なり」の名句を書せりといふ。

アウラングゼブ及び其廟（印度デッカン地方アウランガバッド市の西北）



莫臥兒時代の建築

莫臥兒帝國の衰微。

アクバルの曾孫アウラングゼブの時、

始めて南印度を平定して、印度を統一せしが、帝は回教を崇拜する餘、不信仰税を再興しければ、波羅門教の叛亂を企つる者多く、殊にアウラングゼブの後嗣は概ね庸劣にして、之を鎭定するを得ず。かくて莫臥兒帝國の次第に衰微せしに乘じて、英人は印度侵畧に著手せり。

アウラングゼブの失政

歐人の東漸。

明の中世の頃より、歐洲一般に新大陸の發見、遠洋の航海を奬勵しければ、葡萄牙、西班牙（スペイン）、和蘭（ホランド）英國等の商民は、陸續として東洋に渡來せり。

葡萄牙。

葡萄牙人ヴァスコ、ダ、ガマが喜望峯を廻りて印度に達せし（二一五八）より、國人の東洋に航行する者頗る多く、遂に印度西海岸の臥亞（ゴア）を畧して、其根據地となし（二一七〇）、更に其航路を東して、支那海に出で、阿瑪港（アマカウ）（廣東省）を根據地として、盛に支

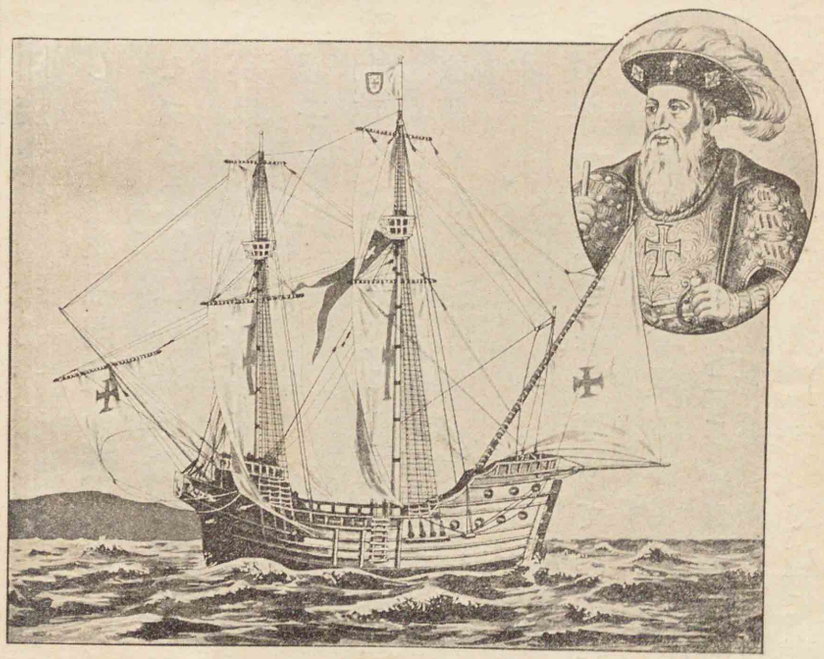
那、日本と貿易せり。

西班牙。 西班牙人は葡萄牙人と反して、南亞米利加を廻りて太平洋に出で(二一一)、尋でフィリッピン群島を占領し(二二五)、マニラを根據地として東洋の貿易に從へり。

ヴァスコ、ダ、ガマ及び其乘船

蘭人。 蘭人は葡萄牙人及び西班牙人に後れて、東洋の貿易に從事せしかど(二二五)、著々兩者を壓

東洋貿易に於ける蘭人の成功

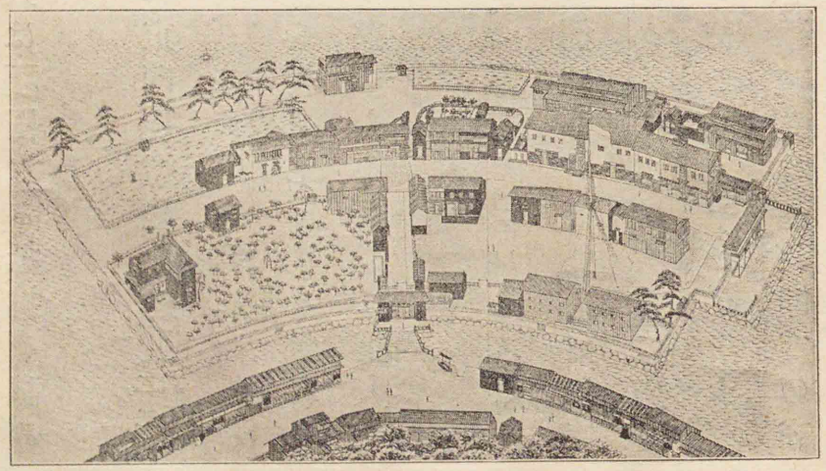


倒し、尋で爪哇のバタヴィアを根據地とし(二二七九)、更に臺灣を占領し(二二八四)、盛に我が國及び支那と貿易し、此の如くして遂に東亞貿易の覇權を握れり。

長崎出島の蘭人商館

英人。 英人も亦東印度會社を建て(二二六〇)、東洋に來航せしかど、支那の貿易は葡萄牙人に妨げられ、日本の貿易は蘭人に妨げられしかば、專ら印度に於ける商權の擴張に從事し、マドラス、ボンベイ、カルカッタ等に、順次に居留地を構へ、葡

印度に於ける英人の成功



葡牙人、蘭人を壓倒せしが、獨り佛人は頑固なる抵抗を試みたり。

佛人。 佛人も亦英人と殆ど同時に東印度會社を建て(一六二四)、尋で印度に來り、ポンヂシェリ、シヤンダルナガル等に商館を構へしが、彼等は莫臥兒帝國の内擾を機とし、印度を侵畧して、東洋の貿易を獨占せんことを計畫せしかば、斯に英人と衝突起る。

クライヴ

佛人デュプレイスと英人クライヴと

英佛の攻爭。 佛人デュプレイスは、一時英人を壓倒せしかど、英國東印度會社の書記クライヴは次第に恢復を圖り、ポンヂシェリ、シヤンダルナガルの佛人を擊破しければ、印度の商權は全く英人に歸せり。

クライヴの功績

クライヴは西暦一七四四年英國東印度會社の書記として印度に來りしが、勇敢なる彼は、久しからずして身を軍隊に投せり。デュプレイス歸國の後、彼はシヤンダルナガルを陷れ、僅に三千の兵を以て、佛人と印度兵との連合軍七萬をプラッシイにやぶれり。史家はこの勝利をさして印度に於ける英國建設の紀元となす。

ヘスチングス印度總督となる

莫臥兒帝國の滅亡。 かくてクライヴは、佛人に倣ひて、莫臥兒帝國の侵畧に著手し、ヘスチングス始めて印度總督に任ぜられしより(一七三四)以後の總督皆クライヴの計畫を完成し、遂に莫臥兒皇帝に年金を與へ、英人は之に代りて全印度に號令せしが(一七六四)、尋で之を廢せしかば(一七七五)、莫臥兒帝國は斯に滅亡しぬ。

印度女皇。 この時に至るまで、印度は東印度會社の有なり

印度英國皇室の有に歸す

しが、英國政府は印度の政治を改革するを名として、之を皇室に移し、英國女王ヴィクトリアは印度女皇の尊號を襲へり(二五三七)。英國は尋で緬甸を併せ(二五四六)、又馬來半島の諸小國をも保護國となせり。

第五章　阿片戰爭　露人の東侵

林則徐阿片の輸入を禁ず

林則徐。 英國の東印度會社は、印度に勢力を得てより、盛に印度の阿片を支那に輸入し、流弊甚しかりしかば、宣宗(道光帝)の時、林則徐は兩廣(廣東廣西)總督となり、廣東の外商に、阿片の輸入を嚴禁せしが(二四九九)、英商は猶ほ密賣を企てしかば、遂に其通商を禁ぜり。

南京條約。 是に於て英國の艦隊は、貿易保護を名として、廣東、厦門(福建省)、寧波(浙江省)等を封鎖し、更に南京に逼りしかば、清廷遂に香港を割き、償金(二千萬弗百)を與へ、且つ上海(江蘇省)、寧波、厦門、福州(福建省)、廣東の五港を開きて、和を請へり。

英清の開戰

阿片及び其喫煙の圖

長髮賊の興起、 阿片戰爭以後、清廷の威嚴の損ぜしに乘じて、洪秀全といふ者、亂を廣西に起し、國を太平天國と號す。之を長髮賊(剃頭辮髮せざるをいふ)といふ(二五〇)。遂に湖南を取り、更に南京に據る。八旗、綠旗の兵は已に老朽して、之を平定する能はざりしか

洪秀全南京に據る

ば、文宗（咸豐帝）は天下に詔して勤王の兵を募る。曾國藩李鴻章、左宗棠等、所在に義勇兵を起して、賊軍を破りしかど、賊勢猶ほ頗る盛なりき。

曾國藩

洪秀全の策畧

洪秀全は歐米人の同情を得んが爲に、耶蘇教を奉じて、自ら耶蘇の弟と稱し、制度律令一に耶蘇教國に擬す。蓄妾を非とし、娼妓を廢し、奴隷の賣買及び婦人の纏足を禁せり。又四方に檄を傳へて、專ら滿洲人を排斥せし中に、天下者中國之天下、非胡虜之天下也、寶位者中國之寶位、非胡虜之寶位也の語あり。されば漢人の之に響應する者、一時百萬に及びきといふ。

英佛の侵入。 時に廣東の官吏は、英船を搜索して、その使役せる清の罪人を逮捕せしかば、英人大に怒りしに、會佛國宣教師も廣西にて殺害せられしかば、英佛の連合軍天津に逼り、清廷は假條約を結びて、僅に其難を逃れしが、尋で其批准交換の使節を砲擊せしより、二國の兵は、天津、北京を陷れ、文宗は遂に和を二國に請ひ（二五〇）、償金（千萬兩）を出し、耶蘇教の公布を許し、牛莊（盛京省）、漢口（湖北省）等の七港を開けり。

英佛の同盟軍北京を陷る

長髮賊の平定。 かくて外國との葛藤を解きたれば、清廷は專ら內亂の鎭定に從ひ、穆宗（同治帝）の時、英人戈登等を招きて洋搶隊（砲兵隊）を組織して、屢賊徒をやぶり、遂に南京を復せしかば（二五四）、洪秀全自殺し、長髮賊

戈登

全く平定せり。然れども、この十五年の内亂の爲に、清の國境の守備壞れしに乘じて、露國は次第に滿洲地方を侵略し來れり。

戈登及び常勝軍

戈登は英佛聯合軍に加はりて北京に侵入せしが、和議成立の後、清國在留の歐米人は、清廷の懇請により、義勇兵を募りし時、彼は其指揮官となる。戈登の陣に臨むや、常に一條の鞭と、一箇の双眼鏡とを手にし、彈丸雨注の間に立ちて、泰然自若たり。故に部下皆勇奮し、向ふ所勝たざるなし。號して常勝軍といひ、其鞭を常勝鞭といへり。

常勝軍

戈登の廉潔

後清廷之に酬ゆるに巨萬の財を以てせしかど、皆辭して受けず。曰く、余は唯不幸なる人民を塗炭の中より救濟するを以て目的とせり。國に歸らん日、一錢の蓄財あらしむるも、余の快とせざる所なりと。

喀薩克兵の東侵

日本海沿岸の大陸露國に歸す

欽察汗國の滅亡。 帖木兒の死後、欽察汗國は其羈絆を脱せしかど、内訌繁くして、國勢次第に衰微せしかば、露西亞は之を機として獨立し、加之、漸く欽察汗國を侵略して之を滅ぼし、更に黑海沿岸に漂泊せし喀薩克部をして、益〻東進せしめ、遂に滿洲の北部に侵入し、斯に清兵と衝突せり。

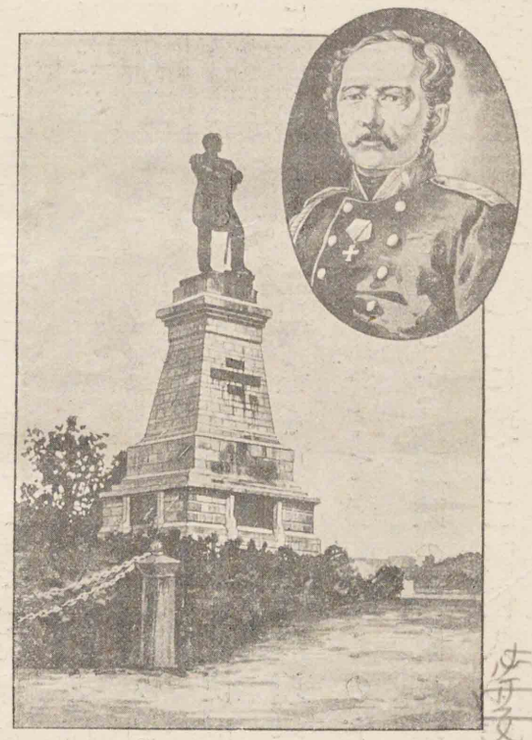
尼布楚條約。 清の聖祖は、書を露國のピーター一世に送り、邊境を議定せんことを求め、兩國の使臣は尼布楚（ネルチンスク）（シルカ河の中流）に會合して、外興安嶺（ヒンガン）を以て兩國の境界となせり（二三、四九）。

露國の滿洲侵略。 かくて聖祖はこの方面に屯田兵を置きて、守備を嚴にせしが、長髮賊の内亂に乘じて、露國は黑龍江北を占領し（二五、一八）、更に英、佛二國侵入の時、烏蘇里（ウースリ）江以東を占領せり（二五、二〇）。尋で露國は我が國と交渉して、薩哈嗹（サガレン）（樺太）島を占

ムラビヨフ及び其銅像

ムラビヨフの功績

領せしかば(明治八)、日本海對岸の大陸は悉く露國に歸せり。露國の東方侵略に就きて最も功勞ありしは、ムラビヨフなり。彼は皇紀二五〇八年東部西伯利亞總督となりてより、頻に滿洲侵略を計畫し、皇紀二五一八年遂に清廷を脅迫し、愛琿條約を結びて、滿洲の東北半部を占領せり。今ハバロフカに建設せられたる彼の銅像は、この偉業の紀念なり。



第六章　露國の中央亞細亞侵略　露國と英清との衝突

三汗國の降服。

露國は東方侵略と共に、中央亞細亞の侵略を計畫せり。當時中央亞細亞には、基華汗、布哈拉汗の外、東察合台汗の後裔なる、浩罕汗の三國鼎立して、相攻爭せしかば、露國は容易に其目的を達し、先づ布哈拉汗國を降し(元明治)、尋で基華汗國を降して(六明治)、ともに保護國となし、更に浩罕汗國を滅ぼし(九明治)、此の如くして露國は次第に清國と境を接するに至りしが、是よりさき、會清國に回教徒の叛亂起りしを機とし、其邊境を鎮するを名として伊犂を占領せり(四明治)。

露國中央亞細亞の三汗國を併呑す

露國伊犂を占領す

回教徒の叛亂。

清の高宗の天山南路を平定するや、回教徒多く浩罕汗國に逃れて、其保護を受けしが、穆宗の時、清の內亂、外寇に疲弊せるに乘じて、彼等は天山南路に侵入し、其地の回教徒も之に響應して、勢頗る強かりしが、清將左宗棠遂

左宗棠

に之を鎮定せり(明治一一)。

伊犂條約。 是に於て清廷は露軍の伊犂を退去せんことを求めしかど、應ぜずして、兩國將に戰を開かんとせしが、後互に讓歩し、コルゴス河(曲城の西)を以て、兩國の境界となし、且つ清國より償金(九百萬ルーブル)を支辨して、局を結べり(明治一四)。

ヘラット及びパミル方面に於ける境界問題

英、露の衝突。 清國と紛爭落著の後、露國は鋭意南侵を圖り、メルヴを取り、更にアフガニスタンに入り、ヘラットに逼れり。英國は露國の南下を以て、印度の平和を害するものとして、アフガン王を助けて抗議を唱へ、遂に英、露兩國より委員を派出して境界を議定せり(明治二〇)。然るに露國は更にパミル方面を侵して、印度に逼らんとし、英國との間に紛爭起りしが、兩國新に境界を議定して局を結べり(明治二八)。

第七章　佛國の後印度侵略

越南の建國。 明末、清初の頃より、佛蘭西の耶蘇教士の安南に布教する者多かりしが、もとの王族の裔に、阮福映といふ者ありて、佛國宣教師ピニヨーの勸に從ひ、地を割き、通商を許すを約して、佛國の援助を求め、遂に阮文惠の子孫を滅ぼして、安南に越南國を建つ(二四六三)。

耶蘇教士ピニヨー

佛國の柴棍占領。 然るに越南は前約を履まず、且つ屢佛國の宣教師を虐待せしかば、佛國は遂に柴棍(サイゴン)を占領して(二五一九)、越南に逼る。越南王は交趾支那の地と償金とを佛國に與へ

カンボヂア國佛國の保護に歸す

て和を請へり(二五)。尋でカンボヂア國も亦佛國の保護に歸しぬ(二七)。

佛國の東京占領。 是より越南の君臣ともに深く佛人を惡み、時に之を殺害せしことありしかば、佛國は之を機とし、佛人に紅河航行の自由を與へしめ(明治七)、尋で其保護を名として、擅に東京(トンキン)地方に駐兵せしめたり。是に於て越南王は佛人の横恣を憤りて、戰端を開きしが、佛軍の國都順化(ユエ)府を陷るに至りて、遂に東京地方を割き、且つ佛國の保護國となるを約して和を請へり(明治一六)。

佛越戰爭

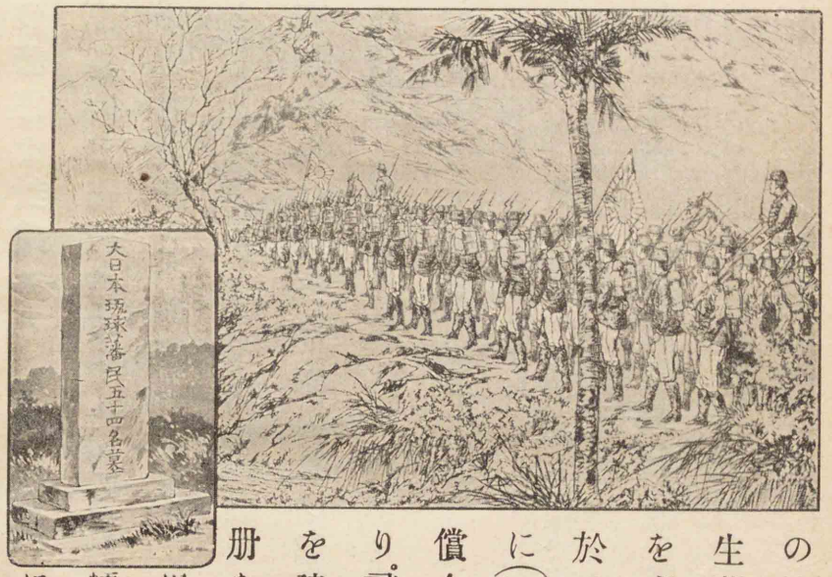
清佛戰爭。 されど越南王は、もと清廷の封册を受けしを以て、清國はこの媾和に異議を唱へ、遂に清佛の和親破れ、清の陸軍は東京に入り、佛の海軍は福建附近を攻擊し、更に臺灣の諸港を封鎖せしが、尋で兩國和議を媾じ、清國は佛國の東京地方を占領することを承認せり(明治一八)。

清佛戰爭

佛國と暹羅との關係。 かくて佛國は交趾支那、東京を屬地とし、越南、カンボヂアを保護國となしし、曾てメイコン河東岸の地は、カンボヂア及び越南に屬せしを口實とし、暹羅を脅迫して、メイコン河を以て、佛國領地と暹羅との境界となさしめたり(明治二六)。

第八章　朝鮮の狀態　日清戰爭

臺灣征伐。 清國曩に臺灣を降してより、漢人の其地に移住するもの多かりしが、土民は猶ほ其東半部に割據し、熟蕃(清國の政令を奉ずる者)と生蕃(清國の政令を奉せざる者)とにわかる。然るに我が琉球



臺灣征伐及び琉球人遭難紀念碑（恒春附近）

の漁夫の臺灣に漂著せる者、屢生蕃に殺害せられしかば、清廷を責めしかど、要領を得ず。是に於て我が國は生蕃を征服せしに（明治七）、清廷は俄に五十萬兩の償金を出して、我が撤兵を請へり。尋で我が國は琉球に沖繩縣を建てしに、清廷は琉球が其封册を受けたりしを口實として、異議を唱へ、かくて兩國の感情益〻惡しかりしが、遂に朝鮮に於て衝突を見るに至れり。』

大院君鎖國主義を執る

大院君の攝政。 朝鮮王李熙（宣祖十一世の孫）位に卽くに及びて（二五三）、年幼にして、其實父大院君李昰應（シヨウ）國政を攝せしが、當時朝鮮に漸く流通せし西教（耶蘇教）を惡みて、之を撲滅するに力を用ゐ、併せて堅く鎖國主義を執れり。

歐米諸國朝鮮と通商條約を結ぶ

我が國と朝鮮との通商。 朝鮮と我が國との通交は、德川氏の初より舊に復せしが、王政復古するに及びて、我が國は屢朝鮮に通商を逼りしかど、大院君は我が國が歐米と和親せるを悅ばずして、之に應ぜず。加之、我が軍艦を江華島に砲擊せしかば、我が國は其罪を問ひ、遂に朝鮮をして通商條約を結び、且つ、釜山の外、元山、仁川の二港を開放せしめたり（明治九）。是に於て歐米諸國も亦之に倣ひしかば、朝鮮は一獨立國の體面を備へしかど、清に對しては依然外藩の禮を執れり。

閔后と大院君と。　朝鮮王年長じ、政を親らするに及びて、王后閔氏の一族政權を專にしければ、大院君は不平の餘、遂に亂民を使嗾して、閔氏の一族を擊ち、併せて我が公使館を燒かしめ（明治一五）、因つて鎖國の主義を實行せんとす。我が國は公使を派して其罪を問ひ、遂に償金五十五萬圓を出さしめ、且つ京城の我が公使館に守護兵を置くことを約す。是に於て清國も亦兵を朝鮮に派して、暗に我が國に備へたり。

大院君及び其墓（韓國京城附近孔德里）

事大黨と獨立黨と。　是より先き、朝鮮に事大、獨立の二黨對立して相排擊せり。獨立黨は我が國に賴りて、獨立の體面を全くせんと志し、事大黨は專ら清國に依賴して、其外藩たるべきを唱ふ。日、清兩國の兵が京城に駐在するに及びて、兩黨の軋轢益甚しかりしが、獨立黨は遂に發して事大黨を擊ち、國王を擁して我が公使の援助を請ひしに（明治一七）、清兵は事大黨を助けて獨立黨を破り、併せて我が公使館を燒けり。

天津條約。　我が國は朝鮮に償金十三萬圓を納めしめ、又伊藤博文を清國に派して、その全權大臣李鴻章と天津に會して、兩國の朝鮮駐在兵を撤去し、且つ爾後朝鮮に軍隊派遣の必要ある時は、兩國互に通知すべきを約す（明治一八）。

事大黨の勝利。　此天津條約にて、朝鮮は獨立國にして、日、清

兩國は、朝鮮に對し同一の權利を有すること、確定せられしかど、其實獨立黨は多く國を去り、事大黨政權を握りたれば、朝鮮に於ける清國の威勢は舊に倍加せり。

東學黨の叛亂。 東學黨とは、もと西教を排し、東學を興さんとする一派の保守的學者の團體なりしが、政府に怨ある者之に附和して、遂に叛亂を起し（明治二七）、其勢强大にして、鎭壓すべからず。我が國は兵を派して、朝鮮在留の國民を保護せしめ、且つ清國に兩國協力して、朝鮮の內亂の源を塞がんことを勸告す。』

朝鮮王李熙

日清戰爭。 然るに清國は、既に朝鮮の內亂鎭撫に託して大兵を派し、且つ朝鮮が其外藩たるを主張して、我が勸告を却け、反りて撤兵を我に求めしかば、我が國は清國が天津條約を破りしを憤り、遂に宣戰を公布して、海陸兩方面より清國を討つ。陸軍は先づ牙山（朝鮮忠清道）、平壤（朝鮮平安道）に據れる清兵を擊退し、別軍と共に進みて遼東半島を畧し、海軍は清國の北洋艦隊を黃海に破り、追ひて之を威海衞（山東省）に殲し、海陸力を協せて將に北京を衝かんとす。是に於て清國遂に和を請ひ、李鴻章を派し、我が伊藤博文と下關に會して左の條約を結ぶ。實に明治二十八年四月なり。

李鴻章

下關條約

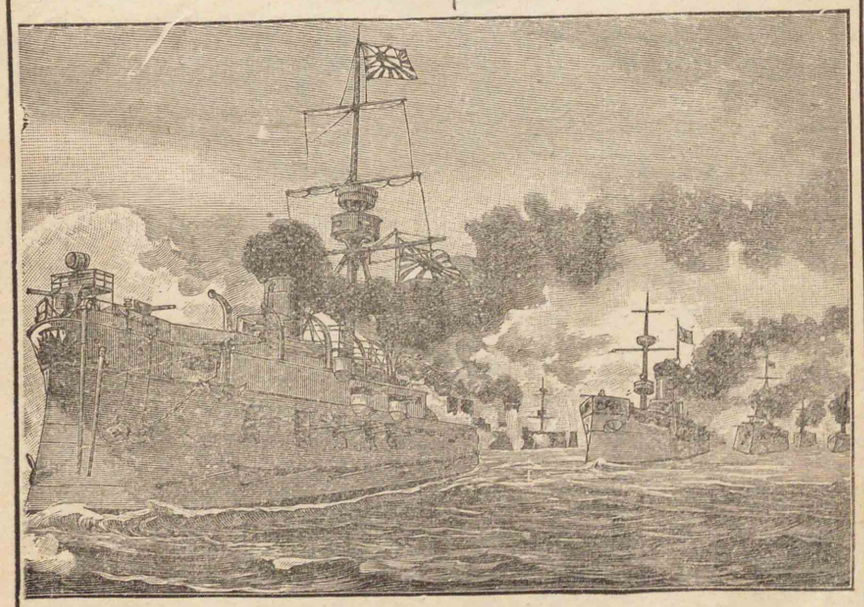
第一、清國は朝鮮の獨立國たるを承認す。

第二、償金二億兩（約三億圓）を出し、遼東半島及び臺灣、澎湖島を讓與す。

第三、沙市（湖北省）、重慶（四川省）、蘇州（江蘇省）、杭州（浙江省）を開放す。

黃海の戰

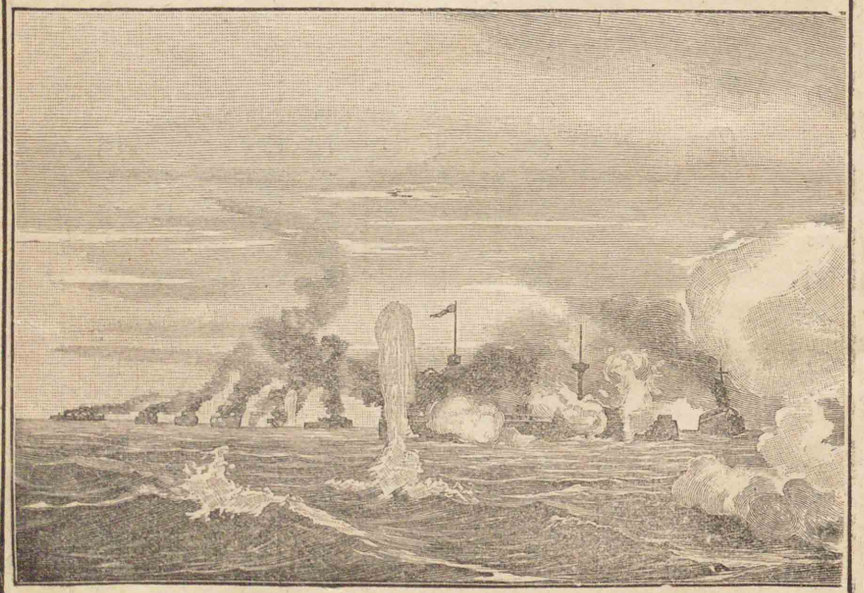
三國の抗議。 露西亞はクリミア戰爭後、意を歐洲に得ず。中央亞細亞の南下も亦、英國の妨害を受けたれ



露國の東亞經略

遼東還附

ば、專ら力を東亞の侵略に用ゐ、ウラヂボストクを建てて、太平洋方面の根據地となし（二五、三一）、尋で西伯利亞鐵道の敷設に從ひしが、我が國が遼東半島を占領するを悅ばず。獨逸、佛蘭西を連ねて異議を提出しければ、我が國は之を納れ、代償金三千萬兩（四千五百萬圓餘）を受けて、遼東半島を清國に還附せり。



遼東還附の詔の署に曰く、「露西亞、獨逸兩帝國及び法朗西（フランス）共和國の政府は、日本帝國が遼東半島の壤地を永久の所領とするを以て、東洋永遠の平和に利あらずとなし、交々朕が政府に慫慂するに、其地域の保有を永久にする勿らんことを以てしたり。顧ふに朕が恒に平和に眷々たるを以てして竟に清國と兵を交ふるに至りしもの、洵に東洋の平和をして、永遠に鞏固ならしめんとするの目的に外ならず。而して三國政府の友誼を以て、切偲する所、其意亦茲に存す。朕平和の爲に計る、素より之を容るるに吝ならざるのみならず、更に事端を滋し、時局を艱し、時平の回復を遲滯せしめ、以て民生の疾苦を釀し、國運の伸張を沮むは、眞に朕の意に非ず。百僚臣庶其よく朕が旨を體し、深く時勢の大局に視、微を愼み、漸を戒め、邦家の大計を誤ることなきを期せよ。

第九章　日清戰爭後の東亞

朝鮮の獨立。　朝鮮は下、關條約の結果、清國への貢獻、典禮を

朝鮮國號改を大韓とむ

日露協商

廢し、其獨立を國內に告げ、獨立祭日を定め（明治二八）、國號を大韓と改め（明治三〇）、我が國も亦銳意之が扶植に盡力せしが、東亞の經營に熱心なる露國は、我が國の勢力の朝鮮に加はるに異議を唱へ、遂に日露協商を結び、韓國內に於ける我が國の商工業の優勝權を承認すると共に、韓國の主權及び獨立を確實にすることを議定せり（明治三一）。

清國の困難。　清國は戰敗によりて、多大の損害を蒙りしのみならず、其弱勢を觀破せし諸外國より種々の强請を受けたり。佛國は遼東還附に干涉せし報酬として、廣東、廣西、雲南の鑛山採掘權を得（明治二八）、露國は滿洲を貫きて西伯利亞鐵道を敷設することを許され（明治二九）、獨逸は宣教師の殺害せられしを口實として、九十九年間膠州灣（山東省）を占領する許可を

諸强國支那の要港を占領す

得(明治三〇)、尋で露國は旅順口(盛京省)及び大連灣(盛京省)を、佛國は廣州灣(廣東省)を借り受けたり(明治三一)。是に於て英國も亦威海衛を借りて權衡を保てり。

康有爲の改革計畫の失敗

清の改革黨。 日清戰爭の失敗と諸外國の强迫とは、一部の清人を刺擊して、變法自强の氣運を起さしめぬ。廣東の儒者康有爲の如きは、屢其改革意見を上疏せしかば、光緒帝(咸豐帝の從子)之を登用して、共に種々急激なる改革を計畫せしが(明治三一)、清廷の舊臣多く之を悅ばず。西太后(咸豐帝の妃)を擁して沮害を試み、改革黨は多く殺戮せられ、西太后國政を執れり(明治三二)。

義和團の亂。 清廷が耶蘇教を公許せし以來、耶蘇教士の支那に來りて布教するもの多かりしが、彼等往々支那人を侮辱し、加之、耶蘇教に轉ぜし支那人等は、耶蘇教士の保護を賴

清人の外國人を排斥する由來

西太后と光緒帝と

みて、多く不法を行ひしかば、支那人は一般に耶蘇教を厭忌せしが、殊に日清戰爭後、諸外國が支那の各地を占領してより、益、外人排斥の氣燄を高め、遂に西教撲滅、外人排斥を旨趣とせる義和團と稱する暴徒山東省に起れり(明治三三)。清廷は寧ろ之を保護する形迹ありければ、義和團の勢力日に加はり、遂に北京に入り、清軍と協力して列國の公使館を攻擊す。

聯合軍の進擊。 是に於て、日英、米、露、佛、獨等の聯合軍は公使館を救ひて、北京を占領しければ、光緒帝及び西

太后以下、一時西安府に出奔せり。

列國と清との講和。　かくて清廷は和を請ひ、列國の使臣は四億五千萬兩の賠償金、暴擧主謀者の嚴刑等を命じて之を許可す(明治三四)。この騷亂の際、露國は滿洲を占領せしが、平和恢復の日には、必ず撤兵すべきことを列國に通牒せり(明治三三)。

露國滿洲を占領す

日英同盟。　露國は已に滿洲より撤兵すべきことを約せしにも拘らず、陰に清廷を脅迫して、東亞の平和に害ある新條約を結ばんと力めしが、この間、日英兩國の利害相一致しければ、兩國は清、韓の保全と、東亞の平和とを目的として、同盟を締結せり(明治三五)。是に於て、露國は遂に十八ヶ月間に必ず撤兵を實行すべきことを宣言せり(明治三五)。

滿洲撤兵の宣言

日露の開戰。　されど、初より東亞の侵畧を目的とせる露國は、この宣言を實行せざるのみならず、更に日露協商に背きて、韓國の北境を威迫して、其主權を蹂躪するに至れり(明治三六)。是に於て、我が國は露國に對して、友誼的交渉を重ぬること半歲に及びしかど、露國は之を無視し、益〻東亞の軍備を擴張して、我が國を壓服せんとする形勢ありければ、我が國は自國の安全と東亞の平和との爲に、遂に宣戰を公布するに至れり。實に明治三十七年二月なり。

露國の背信

東洋史教科書終

近世史摘要及び年表

この世期は、我が後水尾天皇以後に當り、支那にては清の興起より今日に至るまで約三百年を包括す。この間最も注意すべきは、東西兩洋の交通大いに開け、加之、歐人の勢力漸次東洋を壓倒し、英國は印度及び緬甸を併呑し、佛國は安南、カンボヂアを制服し、露國は西伯利亞中央亞細亞を占領し、亞細亞大陸の大半は已に歐人の領土となれり。其よく今日に存するものは、波斯、アフガニスタン、暹羅、清、韓及び我が日本のみ。而も波斯とアフガニスタンとは英露兩勢力の平衡により、暹羅は英佛二國の對峙によりて、僅に國命を維持するのみ。清、韓二國も亦現に列國の勢力競爭場裡たり。皆獨立國の名ありて實之に副はず。眞の獨立國の體面を具備せるものは、唯我が日本國あるのみ。我が國民の責任實に重大なりといふべし。試に現時亞細亞に於ける英、露、佛の領地の面積、及びその亞細亞全土の面積に對する比例を示せば左の如し。

	面積	比例
亞細亞大陸	約二百六十二萬五千方里	一〇〇
英領地	約三十萬八千方里	一二弱
露領地	約百十二萬二千方里	四三弱
佛領地	約五萬方里	二弱
日本帝國全土	約二萬六千方里	一弱

年代		事蹟
皇紀	西暦	
二〇七七	一四一七	宗喀巴死す
二五六	一四六	ヴァスコ、ダ、ガマ印度に達す
後土御門	稱光	

年代		事蹟
皇紀	西暦	
二四一	一七八一	暹羅清に朝貢す
二四八	一七八八	安南清に朝貢す
同	光格	

佛領地　約五萬方里

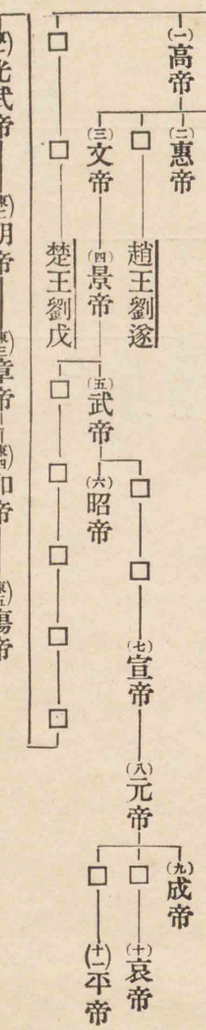
日本帝國全土　約二萬六千方里

年代		皇紀	西暦	事蹟	年代		皇紀	西暦	事蹟
稱光		二〇七七	一四一七	宗喀巴死す	光格		二四四一	一七八一	暹羅清に朝貢す
後土御門		二五八	一四九八	ヴァスコ、ダ、ガマ印度に達す	同		二四四八	一七八八	安南清に朝貢す
後柏原		二七〇	一五一〇	葡萄牙人ゴアを占領す	同		二四六一	一八〇一	越南國の設立
同		二八一	一五二一	西班牙人太平洋に出づ	同		二四六四	一八〇四	莫臥兒帝國英人の保護に歸す
同		二八六	一五二六	バベル莫臥兒帝國を興す	仁孝		二四九九	一八三九	阿片問題起る
後奈良		二二二	一五五二	沙末爾支那布教の中途に死す	明		二五一〇	一八五〇	長髮賊起る
同		二二六	一五五六	莫臥兒帝アクバル卽位す	同		二五一七	一八五七	莫臥兒帝國亡ぶ
正親町		二三三五	一五六五	西班牙人フィリピン群島を占領す	同		二五一八	一八五八	露國黑龍江の北岸を占領す
同		二二四二	一五八二	利瑪竇支那に來る	同		二五一九	一八五九	佛國柴棍を占領す
同		二二四三	一五八三	滿洲に弩爾哈赤出づ	同		二五二〇	一八六〇	清、英、佛二國と和す○露國烏蘇里江の東岸を占領す
後陽成		二三五六	一五九六	蘭人東洋に來る	同		二五二二	一八六二	越南佛國と和す
同		二二六〇	一六〇〇	英人東印度會社を建つ	同		二五二三	一八六三	朝鮮王李熙立つ
同		二二六一	一六〇一	利瑪竇北京に會堂を建つ	同		二五二四	一八六四	長髮賊の亂平定す
同		二二六四	一六〇四	佛人東印度會社を起す	同		二五二七	一八六七	佛國カンボヂアを保護國となす
後水尾		二二七六	一六一六	弩爾哈赤皇帝を稱す	明治元		二五二八	一八六八	露國布哈拉汗國を降す
同		二二七九	一六一九	蘭人瓜哇を根據地とす	同	六	二五三三	一八七三	露國基華汗國を降す
同		二二八四	一六二四	蘭人臺灣に據る	同	七	二五三四	一八七四	日本臺灣を征す
明	正	二二九一	一六三一	李自成亂を起す	同	八	二五三五	一八七五	露國薩哈嗹島を占領す
同		二二九六	一六三六	滿洲國號を建てて清といふ	同	九	二五三六	一八七六	日韓條約成る○露國浩罕汗國を滅ぼす
同		二二九七	一六三七	朝鮮滿洲に降る	同	一〇	二五三七	一八七七	英國女王印度を直轄す
後光明		二三〇四	一六四四	明亡ぶ	同	一四	二五四一	一八八一	伊犂問題定る
同		二三〇五	一六四五	清辮髮の令を下す	同	一五	二五四二	一八八二	朝鮮の亂民我が公使館をやく
後西院		二三一八	一六五八	莫臥兒帝アウラングゼブ卽位す	同	一六	二五四三	一八八三	越南佛國の保護國となる
同		二三二一	一六六一	鄭成功臺灣に據る	同	一七	二五四四	一八八四	朝鮮に於ける日清の守護兵衝突す
靈元		二三三三	一六七三	三藩の亂起る	同	一八	二五四五	一八八五	天津條約成る○清佛戰爭終る
同		二三三八	一六七八	準噶爾部天山南路を併す	同	一九	二五四六	一八八六	緬甸全く英領に歸す
同		二三四一	一六八一	三藩の亂平ぐ	同	二〇	二五四七	一八八七	ヘラット方面に於ける境界問題定る
同		二三四三	一六八三	臺灣清領に歸す	同	二六	二五五三	一八九三	佛國メイコン河岸の地を占領す
東山		二三四九	一六八九	尼布楚の條約	同	二七	二五五四	一八九四	東學黨の亂起る○日清戰爭起る
同		二三五六	一六九六	清の聖祖準噶爾部をやぶる	同	二八	二五五五	一八九五	下ノ關條約成る○バミル問題定る
中御門		二三八〇	一七二〇	佛人チュプレイス印度に來る	同	三〇	二五五七	一八九七	朝鮮國號を大韓と改む○獨逸膠州灣を占領す
同		二三八四	一七二四	駐藏大臣を置く	同	三一	二五五八	一八九八	日露協商成る○露、佛、英、清の港灣を借受す
櫻町		二四〇四	一七四四	英人クライヴ印度に來る	同	三二	二五五九	一八九九	清の改革黨の失敗
桃園		二四一七	一七五七	清準噶爾部を滅ぼす○プラッシイの勝利	同	三三	二五六〇	一九〇〇	義和團の亂起る○露國滿洲を占領す
同		二四二〇	一七六〇	清天山南路を併す	同	三四	二五六一	一九〇一	清列國と和す
後櫻町		二四二九	一七六九	緬甸清に朝貢す	同	三五	二五六二	一九〇二	日英同盟成る○滿洲撤兵の宣言
後桃園		二四三四	一七七四	ヘスチングス始めて印度總督となる	同	三七	二五六四	一九〇四	日露の開戰

支那歴代世系

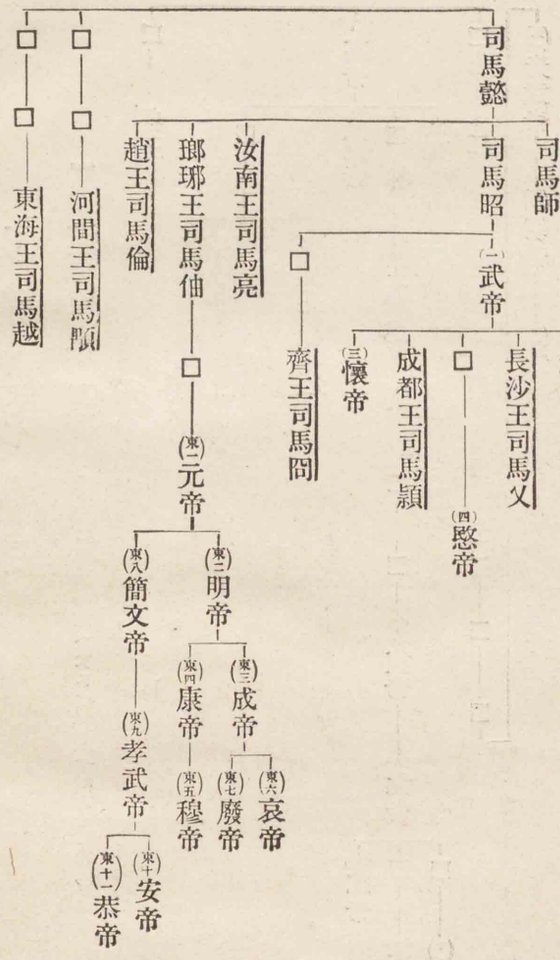
一　漢の系圖

（右側に縱線を加へたるは吳楚七國の王なり）

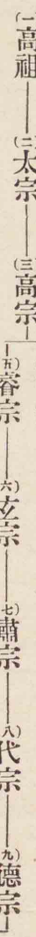


二　晉の系圖

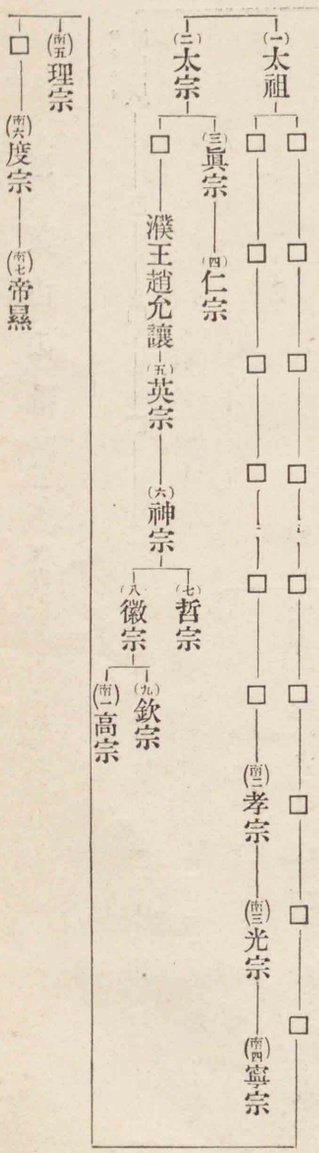
（右側に縦線を引けるは所謂八王なり）



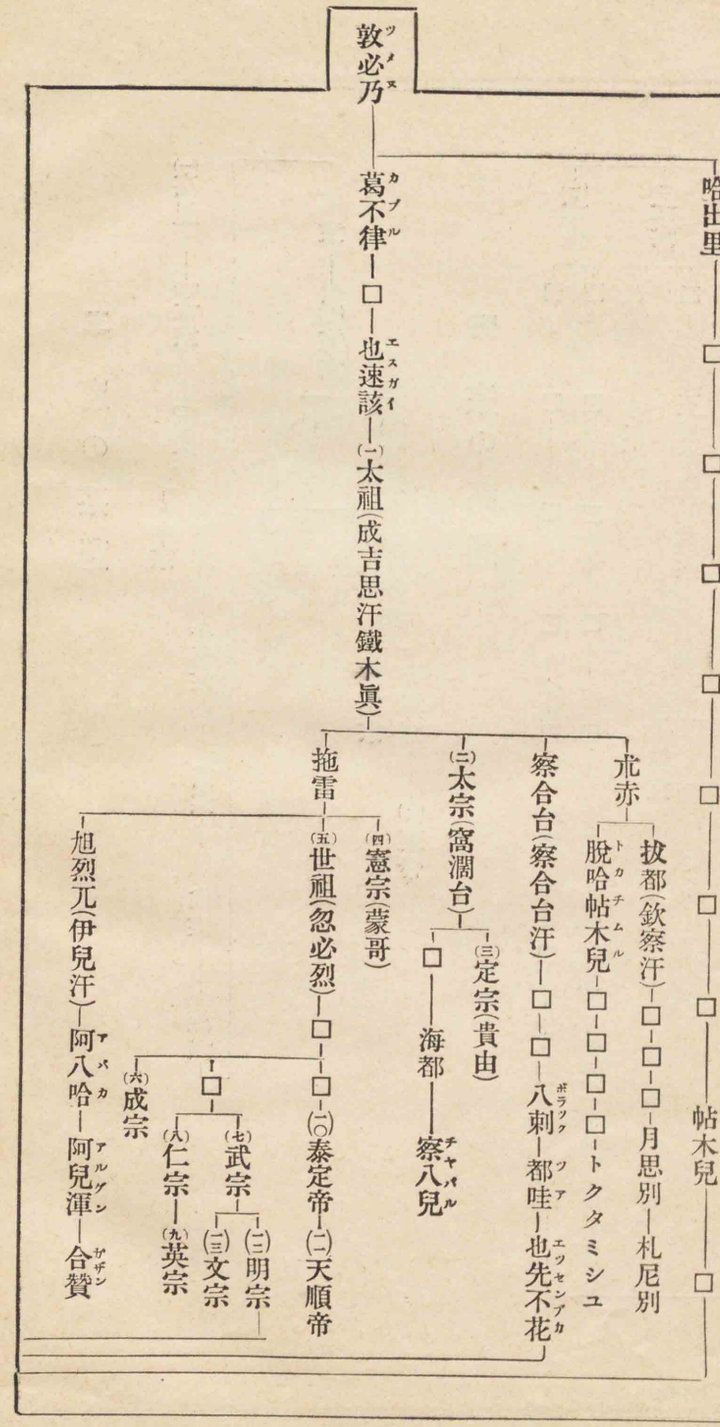
三　唐の系圖



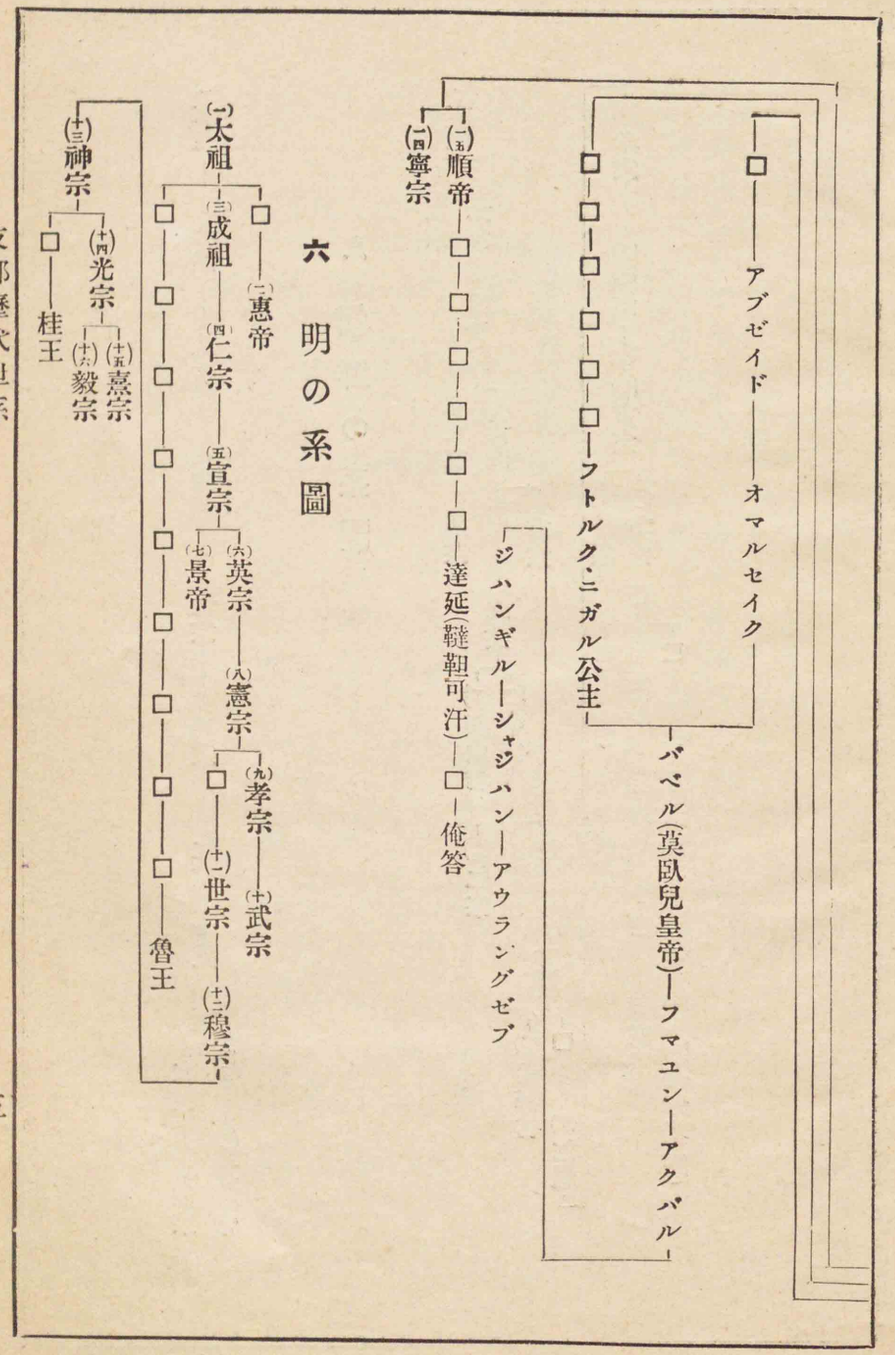
四　宋の系圖


(一)太祖
□
□
□

五　蒙古の系圖



六　明の系圖



七　清の系圖

(一)太祖 — (二)太宗 — (三)世祖 — (四)聖祖 — (五)世宗 — (六)高宗 — (七)仁宗 — (八)宣宗 ┬ (九)文宗 — (十)穆宗
└ □ — (十一)光緒帝

八　朝鮮の系圖

(一)太祖 ┬ (二)定宗
└ (三)太宗 — (四)世宗 ┬ (五)文宗 — (六)端宗
└ (七)世祖 ┬ (八)睿宗
└ □ — (九)成宗 ┬ (一〇)燕山君
└ (一一)中宗 ┬ (一二)仁宗
└ (一三)明宗 — □ — (一四)宣祖 ┬ (一五)光海君
└ □ — (一六)仁祖 ┬ (一七)孝宗 — (一八)顯宗 — (一九)肅宗 ┬ (二〇)景宗
└ (二一)英宗 — □ ┬ □ — □ — (二二)哲宗
└ (二三)正宗 — (二四)純祖 — □ — (二五)憲宗
└ □ — □ — 大院君(李昰應) — (二六)今帝(李熙)

明治卅六年二月八日印　刷　明治卅六年二月十一日發　行
明治卅六年五月十六日訂正再版發行　明治卅七年一月五日第三版發行
明治三十七年十月一日修正第四版印刷
明治三十七年十月四日修正第四版發行

東洋史教科書
定價金七拾錢

不許漢譯

著作權所有

本書中の圖畫の轉載を禁ず

著作者　東京市小石川區表町百九番地　桑原隲藏
發行者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　西野虎吉
發賣者　大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷　三木佐助
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　東京開成館
(長距離加入)電話番町三五五番
發行所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　大阪開成館
(長距離加入)電話東局八〇七番

(株式會社東京築地活版製造所印刷)

開成館歷史叢書

日本史教科書　東京帝國大學文科大學助教授　文學士　藤岡作太郎著
文部省檢定濟　全上下　正價金一圓四拾錢　正價金五拾錢

東洋史教科書　東京高等師範學校教授　文學士　桑原隲藏著
文部省檢定濟　全一冊　正價金七拾錢

東洋歷史　東京高等師範學校教授　文學士　桑原隲藏著
文部省檢定濟　全一冊　正價金參拾錢

西洋史教科書　第三高等學校教授　文學士　坂口昂著
文部省檢定濟　全一冊　正價金九拾錢

西洋歷史地圖　第三高等學校教授　文學士　坂口昂著
近刊　全一冊

日本史講義　東京帝國大學文科大學教授　文學博士　萩野由之著
近刊　全一冊

東洋史講義　東京高等師範學校教授　文學士　桑原隲藏著
近刊　全一冊

西洋史講義　東京帝國大學文科大學教授　文學博士　箕作元八著
近刊　全一冊

第參學年

午日信之

広島大学図書
0130449507